
魔法少女リリカルなのは～目覚めた力～

TR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜目覚めた力〜

【Nコード】

N0485S

【作者名】

TR

【あらすじ】

その人物はごく普通の小学生で、家族と一緒に幸せに暮らしていた。だが、それは脆くも一瞬で崩れ去ることになる。

たった一人の人物の手で。

これはごくごく平凡の小学生、山本 真人やまもとまことに降りかかった事件の物語である。

* 不定期更新ですが、よろしくお願いします。 *

前書き（必ずお読みください）（前書き）

プロローグをお読みになる前に必ずお読みください。

前書き（必ずお読みください）

このたびは、本作を読んで頂きありがとうございます。

この作品は、私が不詳にも書いてしまった新作です。

本作品を読まれる前にいくつか注意点がございますので、ご覧下さい。

・本作の更新間隔は早くても2日、長くても1か月ほどかかっています。

多作品を執筆している関係上これ以上早く更新することは実質不可能です。

また時期によっては更新をいったん保留にする場合もございます。予定よりも更新が遅れたり保留にする場合は、こちらでお知らせいたしますので、ご了承ください。

・本作品では時々残酷な描写が含まれていたりします。
なるべく注意しますが、そういったものに抵抗を感じる場合は読まれないことをお勧めします。

・またこの作品内では主人公はややチート傾向にあります。
一応理にかなった形で力を高めていくという形にはしますが、もしそう言ったものに不快感を感じられましたら、引き返すことをお勧めします。

偉そうに書き連ねましたが、これからもよろしく願います。

プロローグ

この世界には2種類の力の得方がある。

一つ目が得たくて得た力。

つまりは自分で望んで得た力だ。

次は偶然得た力。

才能、運命等々によって得た力だ。

どの得方も力も得たことによって持つ責任は同じだ。

なぜならば人ならざる力はそれだけ脅威だからだ。

だがしかし、この責任は本当に平等と言えるのだろうか？

異種の力 魔法。

その力を望んでいないにもかかわらずに得た者にとって、その責任は果たして軽いと言えるのだろうか？

そしてまたここに一人、望んでもいないのに力を手に入れてしまう少年がいた。

果たして彼はどのようにその力を振るうのだろうか？

それは誰にもわからない。

これはそんな少年に降りかかった事件の物語である。

第1話 日常（前書き）

時系列はA・Sの始まりからです。
現在どっち側につくのか未定です。

なのは側管理局かそれとも守護騎士たちにするべきか……
誰かアドバイスをください！！

ということで、第1話です。

第1話 日常

12月2日

「真人、ご飯よ」

「はい！」

朝、俺はいつものように下から聞こえてくる母さんの声に返事をした。

俺の名前は山田 やまだまさこ 真人どこにでもいる普通の小学生だ。

って、誰に説明しているのだろうか、俺は？

そんなこんなで俺は制服に着替えて、リビングに行った。

朝食を食べ終えて、少しだけゆっくりしている時、俺達家族はテレビのニュースを見ていた。

『続いてのニュースです。4月に発生した原因不明の市街地の壁などが突然壊れた事件ですが、未だに原因が分かってはおりません』

ニュースでは『市街地破壊事件』（俺命名）が取り上げられていた。その事件は4月に入って少ししてから起きた。

突然市街地の壁が壊れたのだ。

電柱は折れ曲がっていたと言われていた。

それからしばらくして今度は町中に木の幹が出現した。

少し経ったら消滅したが、環境問題による現象や、地球の終わりだ

とか色々な憶測が飛んだ。

結局答えなどは出なかったが……。

さらには連休中にも光が飛び交うのを見たという目撃証言まで飛び出したりした。

そのため、一時期海鳴市は怪奇な街と呼ばれるようになってしまった。

まあ、そっち関係での観光客は増えたみたいだったが。

（それにしても、一体なんだろう？）

俺はふと考え込んだ。

「嫌だわ、近頃は物騒で」

俺の考えを遮ったのは、母さんのぼやきだった。

「そうだな、真人も気を付けるんだぞ」

「はい、父さん」

俺はそう答えたものの俺にとっては無関係だった。そしていつも通りに学校へと向かうのだった。

そういつも通りに。

「お、真人おはよう」
「おはよう」

クラスの友人が教室に入った俺を見つけて声をかけてくる。
それに対して俺はいつも通りに答える。

「なあなあ、やっぱり今年のミス聖翔は高町さんで決まりだよな」
「おいおい何を言ってるんだよケンジ、それならバニングスさんだよ」
「いやいや月村さんという線も」

三人はそのまま討論を始めてしまった。
俺はその三人から離れることにする。
周りを見れば案の定三人を冷たい目で見る女子たちの姿があった。

「あ、おはよう真人君」
「おはよう、なのは」

挨拶をしてきたなのはに俺も挨拶をした。
別に俺となのはは知り合いだとかそういうのではない。
家が隣だからとか近所だからとかはない。

（そもそも学校からバスに2、3分くらい乗って乗って5分程度歩けば家だし）

なのになぜかこういう風に自然に話せるぐらいの中なのだ。
ちなみに呼び方は、彼女自身が指定してきた。
思い当たるとすればたまたま席が隣で元気がない時に、俺が元気づけてあげたりしたただけだ。
まさかそれだけで仲良くなれるのであれば、今も俺にひしひしと感じる男からの殺気はないはずだし。

「そう言えばなのははどう思う?。」

「え?何が?」

俺はとりあえず気になったことを聞いてみることにした。

「ほら、4月にあった市街地の壁が突然壊れた事件」

「さ、さあ?」

俺の言葉になぜかなのはは慌てていた。
なぜ?

「はい、皆さん席についてくださいね」

理由を聞こうとしたが先生が来たため打ち切りとなってしまった。
結局その後、市街地破壊事件に関して聞くことはできなかった。

「ふう……」

夜、俺はいつものように自分の部屋で本を読む。

読んでいるのは、ごく普通の少年が魔法使いの学校に行くという内容の本だ。

「いいなあ、魔法って」

一通り読んだ俺はそう呟いた。

やっぱり俺でも魔法というものにあこがれる物さ。

「もし魔法が使えたら好きなお菓子を、いっぱい食べたいな」

俺はそんな現実味のないことを口にする。

でもそれは所詮、作り物。

この世に魔法なんてものは存在しないのだから。

「……寝よう」と

そして俺は眠りにつくのだった。

日常崩壊まで残り1日――

第1話 日常（後書き）

はい、そんなこんなで第1話となったわけですが、ヒロインを決めていないんです。

候補はあるけども、絞れない。
そんな状況です。

とりあえずはヒロインに関してはもう少し考えてみたいと思います。

ということで、第2話でお会いしましょう。

第2話 襲撃（前書き）

主人公にはまだ魔法の力はありません。

通常の日常は今ここに幕を閉じる
それは仮初の日常である。

さあ始めよう真の非日常の生活を

第2話 襲撃

12月3日

朝

ドクン！ドクン！

寝起きの俺を襲ったのは、突然の動悸だった。

（なんだろう……この嫌な感じは）

俺はそれに少しだけ胸騒ぎを感じるのだった。

「おはよう、真人君」

「あ、ああ……おはよう」

学校で、いつものように声をかけてきたのはだが、それはいつもと何かが違った。

それがなんなのかは分からないが、どこか無理をしているような感じだった。

「大丈夫か？」

「え？！な、なにが？」

俺の言葉に、なのはが一瞬慌てた。

「いや、なんか元気がないように見えたからさ。具合が悪ければ休んだ方がいいぞ?」

「だ、大丈夫だよ!! 私元気だから」

そういいながらのはは両手を上げて元気だということをアピールしている。

「そ、そう? ならいいんだけど……」

俺はこれ以上聞いても無駄だと思い、切り上げることにした。これが俺が初めて感じた些細な日常の異変だった。

夕方

借りた本を返し、違う本を借りるために図書館へと寄った。

「うーん、何かいい本はないのかな?」

俺は図書館の中を歩いて面白そうな本がないかどうかを探す。しかし、なかなか見つからない。そんな時だった。

「うーん、届かへん」

「ん?」

見れば車いすに座っている俺と年代の、栗色のショートヘアの少女が高いところにある本を取ろうとしていた。

人が困っているところを見ると放っておけない性分なので、俺は少女の近くに異動すると、本を一冊取った。

「これがほしいのかな？」

「え？あ、はい。ありがとうございます」

本を差し出した俺に驚いた様子でお礼を言った。

「他にも取ってほしい本とかあったら遠慮しないで言って。ついでだし」

「あ、それじゃお願いします」

妙にイントネーションが変なことから、彼女はおそらく関西人だろう。

こうして俺達は少女の取りたい本を取るために歩くのであった。

一通り本を取り終えた俺達は、本を読む場所に座っていた。

「さっきは助けて頂きありがとうございます」

「いや、別についてだから。と言うよりもすごい量だな」

俺はテーブルに積み上げられている本を見る。
有に20は超えている。

「あはは、うち本読むのが好きなんです」

「そう。俺も好きだぞ。今日も本を借りるために来たわけだし」

「そうなん？」

俺の言葉に、少女は聞き返す。

「あ、うち八神はやてと言います」

「俺は山本真人。よろしくね、八神さん」

自己紹介がまだだったのを思い出したのか、八神さんが自己紹介をした。

「はやてでええよ。そだ！真人君の本をうちが選んであげる」

「え？あ、ちよつと八神さん！？」

俺はなすがままに、八神さんに引つ張られていった。

「本、ありがとね八神さん」

俺は再びテーブルに目をやる。

SF系の本がいいと言ったら5、6冊選んでくれた。

「ええつて、本のお礼やし。それより、うちのことは”はやてでええよ”」

「わ、分かったよ。はやて」

「うん」

なぜかはやては上機嫌に返事をした。

「あ、はやてちゃん、ここにいたんですか？」

ふいに聞こえてきた女性の声に俺は声のした方を見る。

「あ、シャルル！」

シャルルと言われた女性は金色のショートヘアが特徴の女性だった。

（はやてのお姉さんか？）

「あ、この人は、うちの親せきでシャルルと言っんよ」

「山本真人です」

俺はとりあえず名前を言う事にした。

「シャルル、この人はなうちが本を取れなくて困っている時に、助けてくれたんよ」

「そうですか。私はシャルルです。はやてちゃんを助けてくれてありがとね」

「いえいえ、当然のことはただけですから」

俺の返事にはやてとシャルルさんはくすくすと笑うと、そのまま去って行った。

（不思議な人たちだったな）

内心でそう思いながら。

そして俺も図書館を後にするのだった。

夜

今日も俺は自室で本を読んでいた。

言い忘れたが、俺の両親は共働きだ。

とはいっても夕食は家族全員でするし、ちゃんと帰ってくるので、大して気にはしていないが。

たまに父さんたちが帰ってこないことがある。

そう、今日がたまたまその日だったのだ。

「お、もうそろそろ寝ようかな」

そして俺はいつものように、ベッドにもぐりこみ、寝るのだった。

これで今日という平凡で、刺激のない1日が終わりを迎える。

はずだった。

3人称Side

とある場所にて、一人の少女が上空に立っていた。

「この辺か？」

【うん、その近くに強力な魔力反応があるの。それを収集できれば2,300頁は稼げるわ!!】

「分かった」

少女がそう答えるのと同時に、赤色の魔法陣が展開される。

「封鎖領域、展開」

その瞬間、あたりの世界は一変した。

S i d e
o u t

「ん?!」

眠りに落ちてどのくらいたったのかは全く分からない。
突然の違和感に俺は目を覚ました。

「??」

まだ目が覚めていないからなのか、それとも違和感が気付きにくい
からなのか、俺は何がおかしいのかが分からない。

「でも、普通なわけではないんだよな」

俺はベッドから出て明かりをつける。
別段不自然なところはない。

「あれ?何かが違うような……」

明かりをつけた時、俺はさらなる違和感を感じた。

「……気のせいかな？」

俺はそう決めることにした。

「とりあえず父さんたちに電話しよう」

俺はそう考えると、父さん達が帰ってきているかを確認するために、玄関へと向かった。

「靴がないということは、父さんたちはまだ仕事かな？」

靴がないのを確認した俺は、電話をかけるためにリビングに向かった。

「えっと番号番号は」

俺は父さんの携帯の番号に電話をかけることにした。
その方がいいと思ったからだ。

「あれ？」

番号を押したのにもかかわらず、なぜかつながらないのだ。
番号が間違っているわけでもない。

「一体何がどうなってるんだ？」

俺はなぜか無性に恐ろしくなった。

「とりあえずここから逃げた方がいいかも」

俺の直感が告げていた

このままここにいたら危ないと。

「そうだ！」

俺はあることを思いつき、自室に戻って弓矢を持ち出した。

これでも俺は昔、地区大会で準優勝の成績を残しているのだ。だから少しばかり弓矢の腕に自信があるのだ。

「さて、行きますか」

俺は矢を50本（競技用なので、殺傷能力はない）が入った入れ物を背負うと家を飛び出した。

「それにしても何だか静かで不気味だよな……」

俺は今オフィス街を歩いていた。
聞こえるのは風の音だけ。

それ以外の音は聞こえなかった。

（そうか！！違和感の正体はこれだったんだ！！）

そこで俺は気付いた。
静かすぎるのだ。

出る前に見ると時間は午後10時。
人はいなくとも、車の一台でも通っていてもおかしくはない。
しかし車は通っていない。
だが明かりはついている。

(そういえば周りの色もおかしい)

よくよく見ればわずかに色が変わる。
まるで何かを通してみているかのようなくらいに、白い家だったものが黄色っぽくなっていたのだ。
つまり、これから言えることは……。

「ここは俺の知っている世界じゃない……という事か」

なぜ今まで気づかなかったんだという後悔をしつつも結論を出す。
だとしたら電話が繋がらないことも、納得がいく。

「とりあえず、歩いていけば抜け出せるか」

俺はそう考えるとそのまま歩き出した。

「見つけたぞ!!」
「え？」

しばらく歩き商店街のような場所に出た時、俺は背後から突然かけ

られた声に慌てて振り返った。

そこにいたのは赤いゴスロリのような服に身を包んだ少女だった。本当ならようやく人に合えたことの嬉しさで駆け寄るところだが、俺の体が動かない。

それどころか俺の中で危険信号を発している。

逃げろ！

逃げろ！！

逃げろッ！！！！

そして俺は少女の持つそれを見た。

「あ……あれって……」

それはハンマーだった。

「こ、これはお前の仕業か！！！」

「んなもん関係ねえ。あたしはてめえのリンカーコアを、蒐集すればそれで十分だ」

少女の言葉に俺は混乱する。

（なんだよリンカーなんとかと、蒐集って）

俺が混乱している時だった。

「ッ！！？」

俺は不穏な気を感じ、横に避けた

ドガァァン！！

その次の瞬間、俺が今まで立っていた場所に何かが命中した。

「へえ、あたしの攻撃を避けるなんてやるじゃねえか」
「な、な、な」

俺は体が震えた。

今のは目の前にいる少女が放ったのか？

あり得ない！信じられない！！

そのような感情が頭の中を占める。

夢じゃないかとも思う。

これは夢で起きれば新しい朝がやってくる

でも、焦げたような匂いと、辺りに立ち込める何かがそれを否定する。

「抵抗しなければ無傷で返す」

「く、来るな！！」

俺は怖くなり、とつさに背中に背負っていた弓矢を少女に構える。

「なんだ、やる気か？」

恐怖のあまりに手が震える。

だが俺は根性で矢を引いた。

（一瞬でもいい、逃げる隙が出来れば！！）

俺はそれを放ってどこかに隠れようと考えていた。

「はあ！！！！」

そして俺は矢を射た。

その矢はまっすぐに少女に向かって

「フン！」

行かなかった。

ハンマーで思いっきりはじかれてしまった。

「この！！この！！このお！！！！！」

俺は無我夢中で矢を射た。

「だから無駄だ……くう！？」

どうやら俺が射た矢の一つが少女に命中したらしい。

（よし今だ！！）

そして俺は一目散に逃げ出した。

そして適当な路地に入ろうとした瞬間、体に一瞬痛みが走ったかと思うと、俺の体は意志とは関係なくそのまま地面に倒れた。

（な、なんで！？）

俺は突然の事態に何も理解できなかった。

「てりゃああああ！！！！」

「がああああ！！！！？」

考える間もなく、俺は少女の叫び声と同時に伝わった衝撃で吹っ飛

ばされた。

「あ……ぐう!?」

どこかの壁にぶつかっただのか、背中が痛かった。
そして俺は見てしまった。

自分の体に開いた4つの穴を。

疑問が頭の中をぐるぐる駆け巡っている中、唯一分かったことは

（ああ、俺死ぬんだな）

そのことだけだった。

少しずつ意識が遠のいていく。

「な!? てめえ、魔導師じゃねえのかよ!!」

そんな中少女の慌てるような声を、聞いたような気がした。
そして俺の意識は闇に落ちて行った。

なぜ?

そんな疑問を思う時間が残っていたようだ。

俺はただ自然に生活をして幸せに過ごしていたはず。

それなのに、なぜおれは死ななければいけなかったんだ?

なんでこんなことになってしまったのか?

お主は知りたいのか?—

声が聞こえたような気がした。

だから俺は答えた。

”ああ、知りたい”と

左様か、ではこれより試験を始めるー

”試験？一体なんのだ？”

聞こえてきた声に俺は疑問を投げかける。

良い結果を待っているぞー

俺の疑問に答えずに声はそう告げると、今度こそ俺の意識は闇に落ちて行った。

第2話 襲撃（後書き）

さあ、非日常は幕を開けた。

そして偽の日常は幕を閉じた。

我は問おう。

貴殿はどのような選択をするのであろうか？

真実に目をそらすのかまたは向き合うのであろうか？

答えを見せたまえ。

それがどのような結果になろうとも

第3話 リピート（前書き）

少々日が開きまして申し訳ありません。

何気にこの作品は注目されていないような気が……

とりあえずは、第3話をどうぞ

第3話 リピート

12月3日

「はっ！ー！」

朝、俺は慌てて目を覚ました。
そして自分の体を確認した。
俺の体は傷一つもない。

（夢……だったのか？）

俺はそう思うことにした。
でなければ、辻褄が合わない。

ドクン！ドクン！

だが、この動悸だけは全く治まることはなかった

（なんだろう……この嫌な感じは）

俺はそれに少しだけ胸騒ぎを感じるのだった。

「おはよう、真人君」

「あ、ああ……おはよう」

学校で、いつものように声をかけてきたのはだが、それはいつもと何かが違った。

それがなんなのかは分からないが、どこか無理をしているような感じだった。

「大丈夫か？」

「え?! な、なにが？」

俺の言葉に、なのはが一瞬慌てた。

「いや、なんか元気がないように見えたからさ。具合が悪ければ休んだ方がいいぞ？」

「だ、大丈夫だよ!! 私元気だから」

そういいながらのはは両手を上げて元気だということをアピールしている。

「そ、そう? ならいいんだけど……」

俺はこれ以上聞いても無駄だと思い、切り上げることにした。

(なんだろう)

胸に何かが使えるような感じが残った。

夕方

借りた本を返し、違う本を借りるために図書館へと寄った。

「うーん、何かいい本はないのかな？」

俺は図書館の中を歩いて面白そうな本がないかどうかを探す。
しかし、なかなか見つからない。
そんな時だった。

「うーん、届かへん」

「ん？」

見れば車いすに座っている俺と年代の、栗色のショートヘアの少女が高いところにある本を取ろうとしていた。
人が困っているところを見ると放っておけない性分なので、俺は少女の近くに異動すると、本を一冊取った。

「これがほしいのかな？」

「え？あ、はい。ありがとうございます」

本を差し出した俺に驚いた様子でお礼を言った。

「他にも取ってほしい本とかあったら遠慮しないで言って。ついでだし」

「あ、それじゃお願いします」

妙にイントネーションが変なことから、彼女はおそらく関西人だろう。

こうして俺達は少女の取りたい本を取るために歩くのであった。

一通り本を取り終えた俺達は、本を読む場所に座っていた。

「さっきは助けて頂きありがとうございます」

「いや、別についてだから。と言うよりもすごい量だな」

俺はテーブルに積み上げられている本を見る。
有に20は超えている。

「あはは、うち本読むのが好きなんです」

「そう。俺も好きだぞ。今日も本を借りるために来たわけだし」

「そうなん？」

俺の言葉に、少女は聞き返す。

「あ、うち八神はやてと言います」

「俺は山田真人。よろしくね、八神さん」

自己紹介がまだだったのを思い出したのか、八神さんが自己紹介をした。

「はやてでええよ。そだ！真人君の本をうちが選んであげる」

「え？あ、ちよつと八神さん！？」

俺はなすがままに、八神さんに引つ張られていった。

「本、ありがとね八神さん」

俺は再びテーブルに目をやる。

S F系の本がいいと言ったら5、6冊選んでくれた。

「ええって、本のお礼やし。それより、うちのことは”はやてでええよ”」

「わ、分かったよ。はやて」

「うん」

なぜかはやては上機嫌に返事をした。

「あ、はやてちゃん、ここにいたんですか？」

ふいに聞こえてきた女性の声に俺は声のした方を見る。

「あ、シャル！」

シャルと言われた女性は金色のショートヘアが特徴の女性だった。

（はやてのお姉さんか？）

「あ、この人は、うちの親せきでシャルと言っんよ」

「山本真人です」

俺はとりあえず名前を言う事にした。

「シャル、この人はなうちが本を取れなくて困っている時に、助けてくれたんよ」

「そうですか。私はシャルです。はやてちゃんを助けてくれてありがとね」

「いえいえ、当然のことをしただけですから」

俺の返事にはやてとシャルさんはくすくすと笑うと、そのまま去って行った。

（不思議な人たちだったな）

内心でそう思いながら。

そして俺も図書館を後にするのだった。

夜

今日も俺は自室で本を読んでいた。

言い忘れたが、俺の両親は共働きだ。

とはいっても夕食は家族全員でするし、ちゃんと帰ってくるので、大して気にはしていないが。

たまに父さんたちが帰ってこないことがある。

そう、今日がたまたまその日だったのだ。

「お、もうそろそろ寝ようかな」

そして俺はいつものように、ベッドにもぐりこみ、寝るのだった。

これで今日という平凡で、刺激のない1日が終わりを迎える。

本当にそうなのか？

「ん?!」

眠りに落ちてどのくらいたったのかは全く分からない。
突然の違和感に俺は目を覚ました。

「??」

まだ目が覚めていないからなのか、それとも違和感が気付きにくいからなのか、俺は何がおかしいのかが分からない。

「でも、普通なわけではないんだよな」

俺はベッドから出て明かりをつける。
別段不自然なところはない。

「あれ? 何かが違うような……」

明かりをつけた時、俺はさらなる違和感を感じた。

「……気のせいかな?」

俺はそう決めることにした。

「とりあえず父さんたちに電話しよう」

俺はそう考えると、父さん達が帰ってきているかを確認するために、玄関へと向かった。

「靴がないということは、父さんたちはまだ仕事かな？」

靴がないのを確認した俺は、電話をかけるためにリビングに向かった。

「えっと番号番号は」

俺は父さんの携帯の番号に電話をかけることにした。
その方がいいと思ったからだ。

「あれ？」

番号を押したのにもかかわらず、なぜかつながらないのだ。
番号が間違っているわけでもない。

「一体何がどうなってるんだ？」

俺はなぜかこれを知っていた。
そうこれはだ。

「つく……とりあえず、ここから逃げよう」

思い出そうとするたびに頭痛が襲う中、俺はそう決意した。

「よし！」

俺は一回気合を入れて、自室に戻って弓矢を持ち出した。
これでも俺は昔、地区大会で準優勝の成績を残しているのだ。
だから少しばかり弓矢の腕に自信があるのだ。

「さて、行きますか」

俺は矢を50本（競技用なので、殺傷能力はない）が入った入れ物を背負うと家を飛び出した。

「それにしても何だか静かで不気味だよな……」

俺は今オフィス街を歩いていて、
聞こえるのは風の音だけ。
それ以外の音は聞こえなかった。

（そうか！！違和感の正体はこれだったんだ！！）

そこで俺は気付いた。
静かすぎるのだ。

出る前に見ると時間は午後10時。
人はいなくとも、車の一台でも通っていてもおかしくはない。
しかし車は通っていない。
だが明かりはついている。

（そっいえば周りの色もおかしい）

よくよく見ればわずかに色が変わだ。
まるで何かを通してみているかのようなくらいに、白い家だったものが黄色っぽくなっていたのだ。
つまり、これから言えることは……。

「ここは俺の知っている世界じゃない……という事か」

なぜ今まで気づかなかったんだという後悔をしつつも結論を出す。
だとしたら電話が繋がらないことも、納得がいく。

「とりあえず、歩いていけば抜け出せるか」

俺はそう考えるとそのまま歩き出した。

「見つけたぞ!!」

「え？」

しばらく歩き商店街のような場所に出た時、俺は背後から突然かけられた声に慌てて振り返った。

そこにいたのは赤いゴスロリのような服に身を包んだ少女だった。

その姿から普通の人だと思われる。

でも、俺はこの少女を知っていた。

そう、こんな風に出会った。

そして俺は殺された。

すぐる気持ちで俺は、少女の持つそれを見た。

「あ……あれって……」

それはかなり大きめのハンマーだった。

「こ、これはお前の仕業か……!」

「んなもん関係ねえ。あたしはてめえのリンカーコアを、蒐集すればそれで十分だ」

少女の言葉に俺は混乱する。

（なんだよりリンカーなんとかと、蒐集って……それにどこかで聞いたような）

俺が混乱している時だった。

「ッ……!?!」

俺は不穏な気を感じ、横に避けた

ドガァァン!!

その次の瞬間、俺が今まで立っていた場所に何かが命中した。

「へえ、あたしの攻撃を避けるなんてやるじゃねえか」
「な、な、な」

俺は言葉を失った。

俺はそれを知っている。
これは……そう魔法だ。

（何を言っただ？俺は）

自分の考えていることに思わずおかしく思ってきた。
俺はこの少女と初対面のはず、なのに前に会ったような気がするのだ。

「抵抗しなければ無傷で返す」

俺は素早く弓矢を少女に向けて構える。

「なんだ、やる気か？」

なぜか俺は落ち着いていた。

狙うのは彼女ではない。

少女の脇を掠めるようにする。

少なからず少女の動きは止まる。

その隙に俺は横に運よくあるビルの中に逃げ込もうと考えていた。

「はあ！！！」

そして俺は矢を射た。

その矢は狙い通りにまっすぐに少女の脇に向かう

「フン！」

少女はその矢をハンマーで思いつきり弾いた。

それが一番無駄な動き。

それるようにしたものを自ら弾く際の行動のロスが生じた。

（よし今だ！！）

そして俺は一目散にビルに逃げ込んだ。

俺は背後から追いかけられているのを気にして、ひたすら階段を上るやがて俺は屋上へと出た。

「よしこれで何とか巻け 遅かったじゃねえかーっ!？」

俺の頑張りもむなしく、少女は上空にいた。

（そうだったよな。魔法つて空を飛ぶこともできたんだよな）

俺は今まで忘れていた自分に恥ずかしく思った。

「つたく、手間かけさせやがって……でもこれで終わりだあ!!」

放たれたのは鉄球だった。

「たあ!!」

もうその攻撃にこなれた俺は、それを矢で難なく打ち落とす。

「おりゃああ!!!!」

「っ!?!がぁ!!」

鉄球に気を取られていた俺は、背後から奇襲してきた少女の攻撃をもろに食らう。

さらに悪いことに俺は、そのまま屋上から落ちていく。
不気味な浮遊感を感じた。

（ああ、俺死ぬんだな）

それを理解した瞬間、俺の意識は闇に落ちた。

どうだ？ー

再び声が聞こえる

同じ日を繰り返しても大して変わらなかったー

” ああ、俺には手も足も出なかった ”

……ではそなたは力を手に入れたら立ち向かうのか？ー

” あればいくらかでも立ち向かってやる ”

それが例え、そなたが望まないものでもか？ー

” 俺は現実しか見ない。で、今現実でそれが起こっている。それだけで十分だ ”

……おめでとう。貴殿が試験の合格者第1号だー

突然聞こえてきたおかしな声に、俺は意味が分からなかった。

合格した証に、特別な力を渡そう。今現実で起こっている真実に立ち向かう強大なる力をー

その瞬間俺は体中に力が湧き上がるのを感じた。

さあ、そなたの名を聞かせておくれー

”俺は、山本 真人”

では真人よ、使う武器の形態はどれがいい？二つ指定が出来るー

俺は使いたい武器を考えた。

やがて思いついたのは。

”弓と剣が良い”

なるほど、近中距離か。和風の弓に洋風の剣とはなかなか愉快なマスターだ。では、そんなマスターにもう一つプレゼントしよう、どれほど離れている敵にでもダメージを与えられる超長距離型の形態をー

俺はその声を怪しむ何て物は頭の中から消えていた。

怪しむなんてものが無駄なことだと感じたからかもしれない。

さあ、呼び出したまえ。そなたの武器ともなり右腕ともなる相棒の名を……クリエイトをー

”クリ……エイト？”

その瞬間俺の視界はまばゆい光に包まれた。

どうやら、ここからが始まりのようだ。

第3話 リピート（後書き）

力をえし者は立ち向かう。

たとえその戦いが間違っていようとも。

そしてその力を手に彼らは駆け巡る。

さあ、始めよう。

理不尽な初陣を

第4話 初戦（前書き）

あとかきのあれは不評だったのでやめました。
今回は少々難産でした。
戦闘描写はやや苦手です。

第4話 初戦

意識が戻った俺が感じたのは、吹き付ける強い風だった。

【真人よ】

「え!？」

突然誰もいないはずなのに声が聞こえた。

【念話のようなものだ。心の中で話し掛ける。誰にも聞かれずに会話ができる】

【これでいいのか?】

俺の問いかけに謎の声（おそらく男の人）が上出来だと答えた。

【さて、真人は現在進行形で地面に落ちている。このままなら地面に墜落して終わりだな。回避したいのならば、浮遊魔法を使え。使い方は自らが飛んでいる姿を想像してみるといい】

声に導かれるまま俺は頭の中で、自分の飛んでいる姿を想像する。すると、今まで吹き付けていた強い風がパタリと止んだ。

【上出来だ。そのまま地面に着地しろ】

【あ、ああ】

俺はゆっくりと地面に向かって下りる。

【真人は魔法に触れるのが初めて……まだ戦いと言うものもできないだろう】

【一体あんたは　くるぞー】

その声がした瞬間目の前に、少女が降り立つ。

「やっぱり魔導師じゃねえか。バリアジャケットも展開しないとは余裕の表れか？」

【さて、今回の初戦はあの少女だ。悪いが彼女には実験台になってもらおう】

【実験台って……】

あまりな言いぐさに俺は抗議の言葉を漏らす。

【勘違いするな。ここは戦場だ。戦場に男も女も大人も子供も関係ない。それ位分からなければお前が死ぬだけだ】

男の人の言葉が胸に突き刺さった。

【さて、それでは基本的な魔法戦の使い方を説明しよう】

【お、お願いします】

とりあえずそう言うておくことにした。

「行くぞー!!」

【まずは防御だ。全タイプの魔法には僕が使っていた魔法が初期設定として存在している。今のところはそれを使いこなせばいいだろう。自分の前に盾があるのを想像するんだ】

少女がこっちに向かって突撃してきた。

【盾……盾】

俺は必死に盾を想像する

『プロテクション!!』

すると、右手に握ってあった剣が突然しゃべったかと思うと、少女のハンマーが青い光に遮られた。

「か、堅え!!」

その何かが盾であるのは分かった。

少女は、分が悪いと思ったのか、バックステップで後ろの方に回避した。

【初めてにしては中々だ。では、次だ】

男の人の声は淡々と魔法の使い方を伝えようとする。

【次は攻撃だ。これも最初は初期設定の魔法を使うといい。これは形態によって異なる。剣の場合は爆発を起こる光景を想像しながら、相手を切りつける。これを”一刀両断”と言う】

【一刀両断……】

男の人の言葉になぜか俺は理解できた。

【そうだ。他にもいくつか技はあるが、今はこれだけでいいだろう】
(よし、行くぞ!!)

「はああああ!!!!」

俺は大きめの剣を構えて少女の元に突撃する。

「喰らうかよ!!」

しかし少女はその攻撃から逃げるように上空へと浮遊する。

【戦いは知恵だ。こういつた場合はどうするのかは自分で考えろ。ちなみに僕が教えた魔法を応用すれば何とかなるぞ】

男の人の声に、俺は必死に考える。

（上空に向けて攻撃をすればいいのか？でもそれじゃ意味がない…
…そうだ!）

俺は一つの方法を思いついた。

そして先ほどと同じ要領で頭の中で想像する。

「よし!飛べた!!」

俺が選んだのは浮遊魔法だった。

これで相手のところまで近づけばいい。

「行くぞ!!」

そして俺は前に進むのを想像して移動を始めた。

「はっ!!」

そんな俺にめがけて少女は鉄球を放つ。

いつもなら逃げるところだが……

『プロテクション』

「っち！」

【ほう、多重処理か】
マルチタスク

何のことはよくわからないが、これで俺に好機が見えたことだけは分かった。

「一刀」

そして俺は驚きで固まっている少女の隙を突き、剣を振りかぶった。

「両断！！！」

その瞬間、少女のいた場所が爆発した。

「やったか？！」

【ふん、あれしきでやられるほど軟じゃないだろう】

その声を肯定するように、爆発で生じた煙が晴れ全く無傷の少女の姿があった。

「アイゼン！カートリッジロード！！！」

少女の言葉と同時に、ハンマーから何かが排出された瞬間、何かが強まったような感じがした。

「おらぁ！！！」

そして俺に向かって武器を振りかざしてきたので、俺は盾を出して防ぐ。

「ぐうつ!？」

ドリルの形に変形したそれは、前よりも威力が上がっていたのか、圧迫感に襲われた。

【威力が上がったか……このまま続けてもこちらの敗北は確実……であれば】

男の人の声が何かを呟く。

【真人よ、形態を剣から弓に変えろ】

「ゆ、弓?」

俺は、突然の指示に驚きながらも武装を弓に変えた。その弓は、俺がよく使っているのと同じ形だった。

【矢は魔力を込めながらその形を想像して生成しろ。したら矢の先端に魔力を収束させるイメージを思い浮かべるんだ】

【わ、分かった】

俺は言われるとおりに目をつむって矢を生成させると、先端に魔力が集まるようにイメージする。

目を開けるとそこには矢の先端に集まる青い光のようなものがあった。

【よし、次はそれを上空に照準を合わせろ】

【上空? 敵の方じゃ いいから合わせろ!ーわ、分かった!】

俺の声を遮るようにして男の人の声が指示を出す。

俺は慌てて照準を上空に合わせる。

【その状態で僕の詠唱に続け】
【お、おう】

とりあえず今はこの声の言うとおりにしておこう。

【我が生み出しし矢よ】

「我が生み出しし矢よ」

【我が言霊を聞き入れたまえ】

「我が言霊を聞き入れたまえ」

俺の詠唱のたびに、力があふれ出すような感触がした。

【その矢は全てを貫きし線となれ】

「その矢は全てを貫きし線となれ」

その瞬間、地面に丸くて中央に五芒星が描かれている青色の何かが浮かび上がった。

【貫け、ブレイク・イヤー！！】

「貫け、ブレイク・イヤー！！」

そこで俺はいつもの感触で弓を射る。

「は！！そんなことしても無駄」

少女はそこから先を言うことが出来なかった。

ガチャーン！！

ガラスが割れるような音と共に、不思議な空間が少しずつ薄れていく感じがした。

「なっ！？結界が抜かれた！」

少女が慌てていることから、どうやら結界と言つのを破つたらしい。

「くそ！！てめえ次会ったときは絶対に倒すからな！！！」

少女は最後にそう捨て台詞を言うと、その場を後にした。

「終わった……のか」

緊張の糸が切れたのと同時に、激しい睡魔が襲ってきた。

「ったく、こいつはすごいのだかそうではないのだか」

誰かの呆れたような声が聞こえてくる。
俺はその声に反論することが出来ない。
そしてそのまま俺は眠りについた。

「……………しばしの休息を。正統なるマスター、山本真人よ」

そんな、静かで穏やかな声を聴きながら。

第4話 初戦（後書き）

いかがでしたでしょうか？

なんか主人公が小学生に見えないというのは無しの方向で。

とりあえず次回は、敵陣の視点の話を書いて、から進みたいと思います。

感想やアドバイス等がありましたら遠慮なくどうぞ。

それでは、第4話でお会いしましょう。

第5話 対面（前書き）

ようやく完成しました。

それでは、どうぞ。

第5話 対面

??? Side

あたしは封鎖領域を展開し、リンカーコアを持つ魔導師を探す。

(見つけれれば100頁ほどは稼げるんだ)

やがてあたしは、ビルの建っている場所を歩く人影を見つけた。

「見つけたぞ!!」

「え？」

そいつはあたしを見てなぜか驚いたような様子だった。

そいつは短めの黒髪が特徴のやつだった。

「あ……あれって……」

そいつはあたしの持つアイゼンを見て、おびえたような様子だった。

(なんだ、こいつ?)

あたしは一瞬勘違いかと思ったが、魔力を持たないやつがここにいるわけがないので、すぐにその考えを捨てた。

「こ、これはお前の仕業か!!!」

「んなもん関係ねえ。あたしはてめえのリンカーコアを、蒐集すればそれで十分だ」

あたしはそう答え、誘導弾を放った。

「ッ！！？」

だが、そいつは横に避けた。

ドガァァン！！

「へえ、あたしの攻撃を避けるなんてやるじゃねえか」
「な、な、な」

あたしは、そう言ってアイゼンを構え直す。

「抵抗しなければ無傷で返す」

あたしの言葉にそいつは弓を構えてきた。

「なんだ、やる気か？」
「はあ！！！！」

あたしはこっちに向かってくる矢をアイゼンで薙ぎ払った。

「フン！」

そしてあたしは気付いた。

（っち！はったりか！！）

さっきの弓はあたしを狙ったものではない。
つまりあたしをまくために放った威嚇射撃だ。

そしてあたしはすぐに上空に移動した。

それからしばらくしてそいつが屋上に姿を現す。

「よしこれで何とか巻け 遅かったじゃねえかーっ!？」

「ったく、手間かけさせやがって……でもこれで終わりだあ!！」

あたしは誘導弾を放った。

「たあ!！」

そいつは再び矢で攻撃を打ち落とすが、それは計算済みだ。
あたしは奴の背後に回り込み一撃を食らわした。

「おりゃああ!！」

「っ!?!がぁ!！」

そのままそいつは地面に落ちていく。

（あいつ、魔導師じゃねえのか？）

そんなことを考えた時だった。

「え!？」

そいつは突然声を上げると、右手に大きな剣が現れた。

そいつはゆっくりと地面に向かって下りた。

あたしは、それを確認して地面に降り立つ。

「やっぱり魔導師じゃねえか。バリアジャケットも展開しないとは
余裕の表れか？」

あたしはそうつぶやき、そいつに向かって飛び込む。

「行くぞ!!」

『プロテクション!!』

すると、アイゼンは障壁に遮られた。

「か、堅え!!」

あたしは、これ以上は無理だと判断して、バックステップで後ろの方に回避した。

「はああああ!!!!」

今度は相手があたしに突撃してくる。

「喰らうかよ!!」

あたしは上空へと移動する。

すると、奴まで上空にやってきた。

「よし!飛べた!!」

奴の言葉に少々疑問を感じたが、あたしは攻撃の準備をする。

「行くぞ!!」

「はっ!!」

あたしは奴にめがけて鉄球を放つ。

『プロテクション』

「っち！」

しかし奴はあたしの攻撃を防ぎやがった。

「一刀」

その事実思わず固まっていた隙を突かれ、あたしは攻撃を許してしまった。

「両断！！！！」

あたしは間一髪で障壁を張った。

「やったか？！」

「アイゼン！カートリッジロード！！！」

あたしはカートリッジをロードし、アイゼンをラケーテンフォームに変形させる。

「おらあ！！！」

「ぐうつ！？」

あたしは奴の障壁を貫こうとするが、堅いために貫けない。
あたしは一旦奴から離れる。

「ゆ、弓？」

突然奴は声を上げた。

「我が生み出しし矢よ」

すると何かを呟き始めた。

「我が言霊を聞き入れたまえ」

（障壁でもはっておくか）

あたしはそう考え障壁を張る。

「その矢は全てを貫きし線となれ」

次の瞬間そいつの地面に丸くて中央に五芒星が描かれている青色の魔法陣が浮かび上がった。

「貫け、ブレイク・イヤー!!」

「は!! そんなことしても無駄」

あたしはそこから先を言うことが出来なかった。

ガチャーン!!

ガラスが割れるような音と共に、結界が破壊されたのだ。

「なっ!!? 結界が抜かれた!」

あたしは慌ててその場を離脱する。

「くそ!! てめえ次会ったときは絶対に倒すからな!!!!」

最後にそう言い残して。

（一体なんなんだよ！あいつ！！）

あたしは次こそはと強く思った。

第5話 対面（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回は前回の別サイドの話になります。

次回は、主人公の紹介が続きを予定しています。

それでは、次回でお会いしましょう。

主人公設定（ネタバレ注意）（前書き）

今回は主人公についての設定です。

8月7日追記：使用可能魔法を追加しました。

主人公設定（ネタバレ注意）

【名前】 山本 真人

【年齢】 9 歳

【性別】 男

【容姿】 黒の短めの髪が特徴で、黒くて透き通った目が印象的。

【性格】 かなりおとなしい性格。
最近の悩みは小学生らしからぬ言葉づかいである。
よくよくクラスから大人だとからかわれている。

魔法関連

【魔導師ランク】 ???

【所持媒体】 クリエイト

【使用可能魔法】

一刀両断（剣状態のみ）：剣に魔力を通して相手に切りかかる半物理攻撃。

なダメージを与えるほど。

その威力はまともに喰らったら、致命的

ただし、隙がしやすい。

効果【物理大ダメージ】

ブレイク・イヤー（弓形態のみ）：魔力で生成した矢を射る攻撃魔法。

貫通力に長けており、どのような決壊や防御魔法ですらも貫く。

その代りダメージは低めだ。

効果【物理ダメージ＋決壊（防

御魔法）破壊】

ライトフレイヤー（弓状態のみ）：魔力で生成した弓を放つ攻撃魔法。

て5発分も放てる。

また矢を使って、槍のように攻

撃することも可能である。

効果【物理ダメージ＋追尾】

断絶（剣状態のみ）：真人が新たに生み出したオリジナルの攻撃魔法。

斬るというよりは爆撃に近い物なので、一刀両断に比べるとそれほどダメージは高くない

ただしノックバック効果があり、相手を少々ではあるが後方へと吹っ飛ばす。

効果【論理ダメージ＋ノックバック（小）】

ブレイク・インパルス（弓状態のみ）：ブレイク・イヤーの進化版。軌道修正は不可能だが、高い攻撃力を誇る。

効果【物理ダメージ大】

ブレイク・イヤー マルチショット（弓状態のみ）：ブレイク・イヤーを複数にしたもの。

威力は変わら

ずに最大10発を同時に放つことができる

効果【物理ダ

メージ（大） 防御魔法破壊】

トレース（全状態可）：すべての魔法弾や矢を相手に追尾させることができる。

魔力を少々食う程度で、それほど影響もないためによく使用される。

効果【追尾】

シール・プロテクション：真人が主に使う防御魔法。

強度はそこそこだが俊敏に張ることができるため、いつもはクリエイトの自動防御に頼っている。

効果【防御（中）】

リフレクション：相手の攻撃をそのまま跳ね返す魔法。

シールプロテクションを展開しなければいけない。

効果【反射】

ミラーインケルト：相手の攻撃を跳ね返す魔法。

リフレクションのようにシールプロテクションを展開しなくてもいいため、多用できるが魔法陣に接触した魔法が圧力となって真人にのしかかるので、それほど使うことはできない。

効果【反射】

一刀連舞（剣状態のみ）：剣の一振りでも相手に数回分の攻撃を加える魔法。

威力はそこそこ弱いものの、最初の一撃を回避しない限り防ぐことは不可能なため、かなりの戦力となる。

効果【物理ダメージ小＋防御魔法無効化】

第6話 魔法（前書き）

ちょっと短めです。

それでは、どうぞ。

第6話 魔法

「ん……」

俺はいつものように小鳥のさえずりに目を覚ました。

（夢……なのか？）

体中を確かめても怪我の一つもない。

何ともまあトンデモな夢だと思ったが、それは儚く散ることになった。

「あれ？これって……」

そこにあったのは一つの西洋風の剣が立てかけられていた。それはまさしく、夢と思っていた場所で見たと同じだった。

「真人くご飯よ」

「はいー!!」

下から聞こえてくる母さんの声に返事をして、俺は着替えるのだった。

この時、俺は小さな疑問に目を背けようとしていたのかもしれない。

いつも通りと思われた朝は、先生の一言で変わり始めた。

「さて皆さん。実は先週急に決まったんですが、今日から新しいお友達がこのクラスにやってきます。海外からの留学生さんです。フエイトさん、どうぞ」

「し、失礼します」

教室に入ってきたのは、金髪のツインテールで目の色が赤い少女だった。

「あの、フエイト・テストロッサと言います よろしくお願いします」

その少女がお辞儀をすると、クラス中から拍手が沸き起こった。近くの人が『あの子、かわいい』と言っている声が聞こえた。

「ねえ、向こうの学校ってどんな感じ」

「あ、あの私、学校には」

休み時間、テストロッサさんの周りにクラスメイトたちが質問を投げかけていた。

俺はと言えば、特に興味もないので、遠くで静観している。

「すっげえ急な転校だよね、なんで？」

「そのっ、色々あって」

「日本語上手だね、どこで覚えたの？」

「どこに住んでたの？」

どうでもいいが、彼女は困っているようだった。いい加減に止めようとした時だった。

「はいはい、転入初日の編入生をそんなにみんなでわやくちゃにし

ないの」

「アリサ」

「それに質問は順番に、フェイト困ってるでしょ」

アリサとによってその場はなんとか鎮静化したのだった。

そして昼休み。

「ささ、あんたも座って座って」

「あゝ誰かさんに引きずられたせいで、腰が痛い」

俺はアリサに半強制的にここに屋上に連れてこられた。

「はいはい。へんなこと言っていないで自己紹介」

「……山本真人です。よろしく」

「わ、私は…フェイト・テストロッサ。よろしく…ね?」

いや、なんで疑問形?

「それじゃ、お昼を食べるわよ!」

と言うことで昼食となったのだが……。

「あ、真人君のお弁当おいしそうだね」

「ほんとねゝ、これと交換でいい?」

「いや、聞いておきながら、もう交換してるし」

「良いじゃない!あんたはあたしたちのお弁当が食べられるんだか

ら！……おいし」

とまあこんな感じで、お弁当の中身はどんどん変わっていく。

【ふむ……女子とのおかず交換か……モテモテのようで何よりだ】
「なっ！！？」

俺は突然聞こえてきた声に、思わずベンチから立ち上がってしまった。

「ど、どうしたのよ？いきなり立ち上がったりなんかして？」

「あ、いや、なんでもない」

俺は怪訝そうな様子で聞いてくるアリサにそう答えると、再びベンチに座った。

【思念通話だ。心の中で喋ればいい。と言うよりこれは昨日教えたはずなんだが……】

その声は、ため息交じりにそう呟いた。

【一体なんなんだよ】

【何、お前さんに魔法について色々とおいて貰おうと思ってな】

【……………】

俺は内心でその必要はないだろと思った。

【必要はない？それは違うな。魔法の事を知るのは、魔法と言う力を手にした者の義務だ】

声色が変わり、俺は思わず背筋を正した。

「背筋を伸ばしてどうしたの？」

「あ、いや。なんでもないんだ」

俺はなのはに誤魔化すようにそういうと、再び心の中で話し掛けた。

【……分かった。それじゃ、よろしくお願いします】

【よし。では、僕の話をよく聞けよ？】

こうして、俺と謎の人物による、魔法の講習会が始まった。

第6話 魔法（後書き）

次回には、ここまでの謎が明かされる予定です。

それでは、第7話でお会いしましょう。

第7話 魔法講義（前書き）

少々遅くなりましたが、第7話です。

ちょっと短めです。

第7話 魔法講義

俺は今授業中だ。

「三角形の内角の和は180度です。よってこの角度は」

その授業を聞きながら、俺はもう一方の講演会に耳を傾けていた。

【魔法と言うのは俗にいう、奇跡を起こす力だ。もちろん一般人には使うことはできず、この力が使える者は絶大な力とそれ相応の責任が追い求められる】

【責任？】

俺の疑問に、声は淡々と答え始める。

【そう、責任だ。魔法は人を殺したり傷つけたりする武器にもなる。だから魔法と言う力を使うのであれば、覚悟を決めることだ。これからお前は人を傷つけたり殺めることがあるだろうからな】

まさかと思ったが、それはできなかった。
なぜなら昨日、俺はすでにその兆しを見たからだ。

（俺の攻撃が、もしあの子に通っていたら……）

俺はぞっとした。

【そうだ。そのように力の恐ろしさを認識できただけで、お前は少し強くなった】

声はそんな俺を励ますのかどうかは知らないが、声をかけてきた。

【ところで、お前は誰なんだ？】

【……………そうだな。今は言わないで置いてやろう。だが……………そうだな、名乗るとすれば執行人だな】

その執行人と名乗る男は、それ以上自分のことについて語らなかった。

【試験とは一体なんだったんだ？】

【お前は一度死んだときに、なぜ死ななければいけないのかと疑問を抱いた。その強い思いが僕をここに呼び出したんだ。そして僕はお前に気づかせるチャンスを与えた】

【チャンス？】

【もう一度同じ日を過ごしてもらい、そして前と同じ行動をするかどうか……………それが今回の試験だったということだ】

執行人はそう説明するが、俺にはちんぷんかんぷんだった。

【つまり、俺はあの時とは同じ行動をしなかったから合格と言う事か？】

【まあそういう事だ。今まで僕を呼び出すことはできても、全員同じ行動をして死んでいたからな。お前さんが初めての合格者であり、わがマスターになる権利を持ったということだ】

あまり分らないがそういうものなのかと納得することにした。

【と言うことは、お前も戦えたりするのか？】

【ああもちろんだ。戦えば100%勝利で飾るだろう】

（だったらどうして戦わないんだ？）

そんな俺の疑問を感じたのか、執行人は声を出した。

【今はまだマスターの力が弱い。だから僕も力を出すことはできない。今こうやって姿を出せないのも、マスターの力不足が原因だ。マスターの力が強くなれば、僕は姿を現したり、消したりすることが出来るようになる】

要するに今の俺はまだまだ弱いと言っことになるのか。

【まあ心配するな。これから僕と一緒に魔法の練習をすればいいのだし、それに僕だってサポート系の魔法位なら使えるからな】
【それじゃあ、魔法を教えてくれ！！】

俺は速攻で執行人に頼んだ。

またいつかあの少女が現れるかもしれないのだ。
だから俺自身も力を付けなければいけない。

【その言葉を待っていたのだ！よし、では今日の放課後から特訓を始めるぞ】

【はい！！】

俺は執行人にはつきりと返事をした。

この時、俺はまだ魔法の特訓がどんなものなのかを、知っていなかった。

そのことを知った時、俺はこの時の自分の言葉にどれほど後悔したのかは予想もできなかった。

かくして、俺の魔法の特訓はこうして始まったのだ。

第8話 特訓（前書き）

ちよつと時間がかかりましたが、書き上げました。

それでは、どうぞ。

第8話 特訓

【では今日も、魔法の特訓を始める】

【おー】

もう今日で二日目。

どうでも良いがこの特訓は、かなり疲れるのだ。

【それじゃ仮想空間シュミレーションをする。目を閉じていつものようにして接続しろ】

俺は執行人にせかされるように、目を閉じて剣を手に集中する。

そして一瞬光が走り、俺は目を開けた。

そこはさっきまでの俺の部屋ではなく、一面砂漠の空間だった。

最初ここに来た時は、かなり驚いたものだ。

何でも、ここは仮想空間と言うもので、執行人が作り出した架空世界らしい。

「さて、それじゃまずはいつものシュート練習から始める。理論は頭に叩き込んでいるから今日でマスターしてもらっぞ」

そして俺の前には光の球だが執行人の姿があった。

何でも、ここだと光の球状態ではあるが姿を見せることが出来るらしい。

ちなみに俺は魔法の実技を教えられる前に、かなりの魔法理論をたたきこまれた。

それも時間がないとのことで、この二日間ずっと理論の勉強をしていた。

寝ている時でさえ、意識の中に入り込んでた。

おかげで睡眠時間がかなりと言って良いほど削られた。

「では、スタート!」

執行人の合図と同時に目の前に複数の円盤が現れたかと思うと、こ
つちに攻撃してきた。
数は5個だ。

「はつよつと!?!」

俺はそれを何とか避けていく。

「お、よく避けるな。しかし避けてばかりではきりがない。攻撃し
て打ち落とせ」

「了解!!」

俺は避けつつも攻撃の機会を伺う。

（よし今だ!!）

「貫け閃光! ライトフレイヤー!!」

俺は弓形態の状態で、一つの円盤に向けて矢を射た。

ズガアアアン!!ズガアアアン!!

「よし!命中」

一気に2個も破壊でき、俺は思わずガッツポーズをした。

「ほう？5発の矢を一瞬で放つか……しかし命中率が悪い。ロックをしっかりとしろ」

「はい！」

執行人のアドバイスを聞きながら、俺は再び矢を射る。

ズガアアアン！ズガアアアン！ズガアアアン！

最後の一発ですべての円盤を撃破できた。

「よし、ミッションクリアだ」

「ふう〜〜！！！！」

俺は執行人の言葉を聞いて、地面にへたり込んだ。

「何だ何だ？もうへばってるのか？」

執行人がそんな俺の様子を見て、呆れと優しさを含んで声をかけてきた。

「当たり前だろ？！さすがに疲れるよ！！」

「まあ、今日は新技の成功と言うことで大目に見てやろう」

執行人はそう言うと、何かを呟く。

その瞬間、一面砂漠だけしかない世界が変わり、気づくと俺のよく知る自分の部屋だった。

【お疲れ様だ。どうだ？二日間の特訓を終えて】

【かなり疲れた。……けど、なんだか強くなれたような気がする】

少なくとも、魔法と言うものには慣れたはずだ。
その実感をさっきの訓練で感じたのだ。

【そうか。それはいいことだ。しかしそれで自惚れるな。まだまだ
上があるし、そこで止まっていたらいずれはやられるぞ】

俺は執行人の忠告をしつかりと覚えておくことにした。

この二日間で少しだけだが、この人物の人となりが見えてきたよう
な気がした。

減らず口だが、重要なことはしつかりと言う。

具体的に言えば、面倒見のいい先生のような感じた。

【分かりました。教官】

【……まあいいだろう。明日からはもう少し訓練の趣旨を変えよ
う。どんな物になるかはやる時のお楽しみだ】

今の間は、確実に照れていたのを隠すためと見た。

【む？お前今いらぬことを考え つ！！？】

「っ！？」

執行人が声を上げようとした瞬間、再び世界が切り取られるような
感触がした。

「結界か！！」

俺はすぐに立ち上がった。

「ここでの戦闘は非常にまずい。見通しのいい場所に向かうぞ」

「了解だ！！そこでやってくる敵を待ち構えるということだな！！」

俺は執行人の言葉を先取りして言った。

「おや、どうやら少しは成長したようだな真人よ。では出陣だ!!」

そして俺は、向ってくる敵を倒すべく外に出るのであった。

第8話 特訓（後書き）

ということで第8話は以上になります。

いかがでしたでしょうか？

残すは第9話です。

それでは、第8話でお会いしましょう。

感想やアドバイスなどをお待ちしております。

第9話 再戦（前書き）

第9話です。

今回は戦闘がメインになります。

戦闘描写はやはり難しいものですね。

第9話 再戦

〔海鳴市 臨海公園〕

「まだ来てないようだな」

【ああ、でも確実に近づいているな】

今俺達は見通しのいい場所にいた。

聞こえるのは静かな風とさざ波の音だけだ。

【この気配は……あの時の人物と同じだな】

執行人から伝えられる情報に、俺は何度も深呼吸して気を落ち着かせる。

何分これが二度目の戦いなので、緊張しているのだ。

【もう緊張するな。何、この僕がついているのだ。いくらお前がへっぽこでも、心配することはなに一つもないさ】

【そ、そうだな】

俺は応援している（？）執行人にそう頷き返した。

【お、こっちに到達するまで残り10秒、9、8、7……】

（っ！！）

執行人の言葉に、俺は高鳴る鼓動を落ち着かせる。
気づけば手足が震えていた。

（大丈夫。俺なら出来る）

俺は自分にそう言い聞かせ、敵が来るのを待った。

「今度は逃げねえんだな」

「ああ、今の俺はこの間とは違う!!」

目の前にいる赤い服を着た少女に、俺は言い返しながら剣状態のクリエイトを握りしめる。

「今日こそ、リンカーコアを蒐集してやる!!」

少女はそう言うや否やいきなり鉄球を5つほど放ってきた。

「何のこれしき!!」

俺はそう叫びながら5発すべてを避ける。

しかし3発はこつちを追撃してくる。

どうやら誘導弾のようだ。

「おりゃ〜!!」

「なっ!!」

俺の行動に少女が信じられないと言った感じで見てくる。

俺がやったのは魔力刃を放って3発破壊しただけだ。

「これで終わりなら、次はこつちから行く!!」

俺はそう宣言してこの間執行人に教えてもらった俊足を使い、一気に少女の背後を取る。

「全てをたち切れ！断絶！！」
「っち！」

一撃必殺に思われた俺の攻撃だが、何かに阻まれたような感触だった。

どうやら防御魔法のようなもので防がれたようだ。

「やんじゃねえか」

【相手はどうやら一筋縄ではいかないようだ。どうする？真人よ】

執行人が俺に問いかけてくる。

答えなんてものはとうに決まっていた。

【サポートを頼む。少しでも彼女を止められれば……】

【了解だ。彼女の身動きを止めればいいのだな】

俺の答えに、執行人はそう返す。
そしてそれは一瞬だった。

「ぐはっ！？」

「今だ！」

突然少女がはりつけにされたような体制で固まったのだ。
そして俺は反射的に動いていた。

「一刀、両断！！！」

「うあああああ！！！！！」

俺は必殺技でもある魔法を少女に使った。

今度こそ命中したのか、それなりの感触が伝わってきた。

「喜べ、倒したぞ」

「ッ！！いいいいよっしや〜！！！！」

執行人の宣言に、俺は思わず声を上げて喜んだ。
何せ、初めて敵を打倒することが出来たのだ。
喜ぶなと言う方がおかしい。

【さて、とつとと帰 下がれ、真人！！】
「え？」

突然執行人の声が響く。

しかし俺の体は突然のことに固まってしまった。
その次の瞬間だった。

ズガアアアン！！

「があああああ！！！！」

俺は突然現れた何者かによって斬られたのだ。

「だい よ」

「いわ だよ」

襲撃者と少女の声がかすかに聞こえる。
だが、俺の体はびくともしない。
ふいに、こちらに近づく気配がした。

（これで、終わるのか？）

ドクン

俺は悔しかった。

このままやられてしまう事実を理解するのが。
だから目をそむけた。

（もし終わるのなら）

ドクン！

鼓動だけが俺の耳に聞こえた。

（その結果を……この俺が覆して見せる！！！！！！）

その瞬間、俺の意識は完全に途絶えた。

第9話 再戦（後書き）

今回の展開はおそらく賛否両論になりそうな気がします。

それでは、次回でお会いしましょう。

第10話 憑依（前書き）

なんだか賛否両論になりそうな気がします。
とりあえずは、チートですのでご注意ください。

第10話 憑依

3人称Side

真人に近づく二人の人物。

もちろん彼女たちの目的は、真人のリンカーコアだ。

そしてあと少しで真人の体に触れる範囲にたどり着く時だった。

ゴ
!!!

「ぐあ!?!」

「な!?!」

突然生じた突風に二人は突き飛ばされた。

「一体なに、が」

何事だと言わんばかりに、真人が倒れている方向を見た瞬間、二人は驚きを隠せない表情を浮かべた。

「な、なんで」

なぜなら……

「なんで立ってるんだ!?!」

彼女たちの前には、平然と立っている真人の姿があったのだから。真人はしばらく自分の手や体を見ると、声を出した。

「これはどういう事だ？」

Side out

真人？Side

「これはどういう事だ？」

気づくと僕はマスター^{真人}の体になっていた。
あまりに突然のことで、僕も混乱する。

「おいおい……勘弁してくれよ」

結論が出た時には、僕はもうそれしか言えなかった。

「いきなり僕の出番を出すなっの」

そりゃ、出番がないな。なんて思っではいたけどよ。
これは突然すぎるだろ？

「ま、やるからにはしっかりと……だな」
「何をごちゃごちゃ!!」

僕の言葉を待たずして少女が突っ込んでくる。

ガキ！

「何!？」

「ふふふ。後悔するがいい。僕を表に出したことを、な!！」

僕は、少女を思いつきり吹っ飛ばした。

「ぜえええええい!!」

「ふん。」

ピンク色の髪をした女性が切りかかってくるが、甘い。

こんなもの脅威でならない。

すると、女性はいったん僕から距離を取ると、右手に構えていた剣の形を変えた。

(ありや、軌道が読みづらいな)

僕はすぐに頭で理解した。

「飛龍……」

女性が攻撃を仕掛ける。

「一閃」

「無限烈火」

それに対して僕は、目の前に黒い霧を発生させた。

シュウウウウウ

「なっ!？」

突然の出来事に女性が驚きの声を上げた。

「それで、終いか？なら……」

僕は右手にクリエイトを構える。

「こっちから行かせてもらうぞ！！！」

僕は魔法陣を展開した。

もちろん二人を拘束するのを忘れない。

（ああ、この感覚……そうだ。これだよ。これが僕の求めた戦場だ）

僕は戦場独特の感覚に酔いしれていた。

「ブレイク系魔法……始動！！」

僕は久々の砲撃魔法を行使することにした。

『了解です。マイスター』

魔法陣を覆うように魔力が収束する。

『発動まで残り10秒です』

かつての相棒から情報が入ってくる。

これを感じつきりぶつ放せば僕達の勝利だ。

『5 / 4 / 3 / 2 / 1 ……』

カウントが0になり、砲撃を放とうとした瞬間だった。

「がっ!!」

突然体中に痛みが走った。

「あ……あ……あ……」

その痛みの元を見やると、そこには誰かの腕が生えていた。

（これは……魔力が抜かれてる!?!）

僕は本能的に察知すると、すぐに行動に移すことにした。
幸い行動できる魔力はふんだんにあった。

「エマ ジェンシー・エクスプロージョン」

その瞬間僕を中心にした爆発が起きた。
これで相手を遠くに吹っ飛ばすことが出来る。
むろん自分もだが……。
見れば誰かの腕も消えていた。

（づう……どうやら何とかなったみたいだな）

敵の気配が周囲に感じられないので、事態は収束したと判断したのだ。

どうやら今の自爆でおびえて逃げたらしい。

（魔力が3%蒐集されちゃった……僕ともあろう人物が）

唯一僕の心残りと言え、その点だけだった。

「さ、て早く家に帰るとしましょうか」

僕はそう呟いて、とぼとぼと帰路へと着くのであった。

第10話 憑依（後書き）

いかがでしたでしょうか？

本当にチートだったような気が……

次回からはまた日常へと戻っていきます。
それでは、また次回にお会いしましょう。

第11話 1日の終わり（前書き）

ちよつと変な設定を入れてみました。
ちなみに私はアンチ転生者です。

第11話 1日の終わり

「ん……あ、れ？」

俺が目を覚ますと、そこは俺の部屋だった。

（俺さっきまで公園の方で戦っていたような……）

【目が覚めたか】

【え、あ、ああ】

【……そうか】

執行人の声に、なぜか覇気がなかった。

【あ、もしかして俺をここまで運んでくれたのはお前か？】

【ああ……そうだ】

やはりどこことなく元気がない。

これは聞くべきなのだろうか？

【一体どうしたんだ？なんか声には気がないぞ？】

【……すまなかった】

俺の問いかけに、突然執行人が謝ってきた。

あのいつも皮肉しか言わない執行人がだ。

【……その認識には誤解があるが。僕はサポート役失格だ】

【………何があったんだ？】

【なぜかお前の体を僕が乗っ取って、拳句の果てに魔力を3%蒐集

されてしまった】

執行人の言葉に、俺は何も言えなかった。

【乗っ取ったって……どういう事なんだ？】

【僕のようなサポート要員は、マスターとの相性……考えていることや思っていることが一緒になった時、肉体を共有する効果があるんだ。これをフィジカルシェアリングと呼んでいる】

【……肉体共有】

俺はいまさらなので、もう驚かないが。

まとめると、あの時俺と執行人の考えていることや相性が、最高潮に達して肉体共有が発動したらしい。

そして魔力を奪われてしまったという事らしい。

【情けねえな。あんなに偉そうなことを言っておいて、こんなざまとは】

【だ、だけどさ……執行人の強さって俺のに比例するんだろ！？だったらただの俺の力不足なんじゃ】

慌てて俺が否定する。

全く持つて執行人に似合わない感じだった。

【確かにそうだ。だがそれはあくまで”力”の部分だ。それ以外の戦略はすべて元の状態だ。……魔力値だけで言えば僕の次になるほどの量だ。そのことに油断していたのかもしれないな】

執行人は最後に、鍛え直さなければと呟いた。

【さて、此度の戦い。なかなか良かったぞ、ようやく上達したな。

これからは少しではあるが特訓の量を下げるとしよう】

【いいよっしゃあああ！！！！】

執行人の評価を聞いた俺は、今までの空気はどこへやら、思いっきり喜んだ。

なんせあのきつい特訓が、少しではあるが量が下がるのだ。

【ところで、だ】

【どうしたんだ？いきなり】

突然声のトーンを下げた執行人に俺は先を促した。

【いや、教室で強力な魔力反応を3人分感知したと言うことを伝えようと思っただけ】

【三人！？そ、それが誰なのかわかるか？】

俺のクラスに、俺と同じ魔法使いがいたとは……

【一人はお前の横にいたやつ。もう一人はこの間転校してきた少女。そして昼休みの時、お前と親しげに話していた男だ】

（それって、完全になのはとフェイトじゃないか）

この数日間で、テストロッサさんの事をフェイトと呼ぶようになった。これは本人に頼まれたことだ。

一応、誤解のないように言っておく。

【それじゃ、あと一人って……まさか】

俺は男と言われて一人の友人の顔を思い浮かべた。
青髪で、目元がぱっちりとしている少年。
俺とは逆の性格で、とても明るい。

【健司が、魔法使いだなんて】

【なるほど、健司と言ったか。どう思おうと自由だが、真実は変わらない。それだけは覚えておけ。いいな？】

執行人の言葉に、俺は頷くことしかできなかった。
そして俺は眠りにつくのであった。

3人称Side

とある場所で、襲撃者たちが話していた。

「何とか危機一髪だったわね」

「ああ」

「助かった」

彼女たちの脳裏にあるのは、一人の少年と魔法だ。
まるで人が変わったように動き、そして強力な収束魔法を展開する。
その技量は、かなりの腕であると知らせていた。

（あの少年と同じく、あいつも戦いになれている）

ピンク色の髪をし女性が思い浮かべるは、青髪の少年と真人の姿だ

った。

女性は、この二名に苦戦を強いられたのだ。

（いや、あの黒髪の少年が一枚上手だな）

女性はそう思っただけで撤回した。

青髪の少年は、力任せだったにもかかわらず、真人の場合は多少の戦略を使っている。

（どちらにしても、警戒せねばな）

女性の思いとは関係なく、時間は流れていく。

S i d e o u t

??? S i d e

「ふふふ……」

俺は、嬉しくて笑っていた。

なぜなら、あの、リリカルなのはの世界に転生できたからだ!!

俺は大学生だった。

いつものように通学していたら、突然俺は周りが白い空間に立っていた。

なんなのかが分からずにいると、突然神様を名乗る奴が現れたんだ。そいつが言うには、間違えて俺を殺してしまったらしい。

お詫びにと言うことで、チートな能力をもらってこのアニメの世界

に転生させてもらったのだ。

その時に、何か注意されたような気がしたが、まあいいだろう。だって、この世界で俺が一番強いからだから。

なんせ俺には、Fateのアーチャーの能力が備わってるんだし。これなら、超絶ハーレム間違いなしだ。

（まあ、変な邪魔もんがいるけど、関係はないな）

そのために、俺は親友を装って近づいてたんだ。親友であれば、多少は気を許すだろう。

「さあて！さくさくとやっちゃいますかねー！」

全ては、俺のハーレム計画のために！！

S i d e o u t

第11話 1日の終わり（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？

次回あたりで、エンカウントに持っていきたいです。

それでは、また次回でお会いしましょう。

第12話 エンカウト（前書き）

ここから少しですが、本篇に入っていきます。

それでは、どうぞ

第12話 エンカウト

次の日の放課後、俺は借りていた本を返すべく、図書館に来ていた。

「確かに確認しました」

返却し終え、家に帰ろうとした時だった。

「あ、真人君」

「ん？」

突然背後から声をかけられたので、振り返るとそこにははやてがいた。

その横には前にも見た金髪のショートヘアーの女性……シャマルさんがいた。

「はやて、今日も本を借りに？」

「うん、そうなんよ」

その後はやてに付き添って本探しをすることになった。

「あ、そうや。今日うちと一緒にご飯食べていけへん？」

「え？」

帰り際にはやてから提案されたことに、俺は少し驚いた。
なにせ突然のお誘いだ。

「ちょっと、お父さんに聞いて来るからちょっと待ってて」

「あ、うん。ええよ」

俺ははやての答えを聞いて家に電話をすべく、公衆電話がある方向かった。

「ごめん遅くなった」

「ええよ。そんなに待ってへんし……んで、どうやった？」

はやての疑問に、俺は答えた。

「いいてさ」

「ほんまか!？」

はやての問いかけに頷いて答えると、はやては嬉しそうな表情をした。

「あ、ああ」

「そうか……ふふ、今日はぎょうさん腕を振るわんとな」

はやてが嬉しそうに言う中、俺はある違和感を感じていた。

「そついえばシャルさんは？」

さっきまでいたシャルさんがいないのだ。

「あ、シャルマルなら、電話をしにちよい外に出てはるよ」

はやての答えに、俺は一応納得した。
その後、私服に着替えるため、俺は一度家に戻った。

はやてに教えてもらった通りに行くと、そこには確かに八神家と表札に書いてあった家があった。

「みんな遅いな」

「そうだね」

「ねえ、はやてちゃん。電話してみた方がいいかも」

と、俺の向かい側に座っているさすがが提案した。

驚いたことに、すずかもはやての知り合いだったらしい。

しかも、知り合うに至る経緯も俺と同じだし……。

とまあそれは置いといて、今俺達は遠縁の親せきが戻ってくるのを待っていた。

【真人、今どこにいる？】

【ああ、今友達の家……さっき言わなかったっけ？】

突然の念話にももう慣れた俺は、普通に返す

こういう面では成長したな〜と実感する。

まあ単に慣れただけかもしれないが。

【……………それよりも大変だ!!】

【どうしたんだ？】

分かりやすい話題転換だなと思いつつ、俺は執行人に続きを促した。

【そこからやや離れた市街地で結界が展開された!!】

【なんだって!?!】

俺は驚きながら聞き返した。

全くその気配を感じなかった。

【離れているとはいえ心配だ。これから僕もそっちに向かう。 10
秒間魔力を放出してくれるか?】

【了解だ】

俺は執行人に言われた通りに魔力を開放する。

ちなみにいつもは魔力が漏れないように蓋をしてあるのだ。

もし少しでも漏れれば、周りの魔法使いに自分の居場所や自分が魔法使いであることを知らせることになるからだ。

ちなみに念話とこの方法に関しては、すぐに教えられすぐに覚えた。

【よし、もういいぞ。これからそっちに向かう1分ほどで到着する】

その念話が最後だったのか、途絶えた。

「どうしようか? はやてちゃん」

「うーん、せやな…… 3人で鍋ちゅうのもちよい寂しいし…… お言葉に甘えさせてもらおうかな」

気づくとはやて達は何やら相談していた。

「うん、それで真人君はどうする?」

「あ、ごめん。話聞いてなかった」

俺の言葉に、すずか達ははちっとだけ驚いた表情を浮かべると、俺に説明してくれた。

どうやら、なかなか帰ってこない親戚の人を待っているというのも大変なので、すずかの家で夕食を食べないかと言っ事らしい。

「そうだな……じゃあ俺は【真人、悪いがここに残ると言ってくれ。訳は後で話す】ここに残ってるよ。親戚の人が帰って来て心配するだろうから」

俺は突然の指示に戸惑いながらも、もつともな理由を話す。

「確かにそうやね。ほんじゃ、頼まれてもええかな？」

「ああ、もちろんだ」

俺は椅子に座りながら、二人を見送った。

「んで、わけを聞かしてくれるか？」

「ああ、もちろんだ」

そっいえば、何気に今のが仮想空間以外で口に出した会話のような気がする。

「あの栗色の髪の少女……微妙にだが魔力反応を感じた」

「え？」

俺はそれしか声に出せなかった。

俺には普通の少女にしか見えなかった。

「それにここには二つの分類と彼女を除いた4種類の魔力反応があ

る」

「二つの分類？」

「ああ、普通の魔力と闇の魔力反応だ」

またもや、俺には分からない単語が出てきた。

「闇の魔力反応？」

「お前、属性については覚えているよな。その属性を使う際の魔力の事だ」

執行人が呆れたように説明してくれた。

確か、魔法には大きく分けて3つの基本属性と2種類の極限属性に一つの属性で成り立っているというものだ。

それが、水、火、雷の基本属性で、光と闇の極限属性、そして風や土などの無属性だったはずだ。

「と言うことは闇属性の魔法か」

「そういう事だ。お前の場合は僕がいるから闇特化型の光属性以外のすべての魔法が扱える」

執行人から余談とばかりに言われた。

何でも俺の基本属性は、執行人と同じように闇属性らしい。

「話を戻すが、感知した魔力反応によく感知した魔力反応があった」

「っ！！？まさか」

俺はもう予想がついていた。

「ああ、あの赤い少女だ」

「つまり、今俺は敵陣にいるという事か？」

「そついう事だな」

俺は思わず固まってしまった。

「に、逃げよう!」

「いんや、もう遅いぜ」

何のことだと聞こうとした瞬間、玄関から音がした。
どうやら誰かが帰ってきたようだ。

「ただいまはや……て」

そしてリビングに駆け込んできて固まる少女は、俺を襲ってきた人物だった。

「どうしたヴィータ？」

続いて入ってきたのは俺に不意打ちをかましたピンク色の髪をした女性に、シャマルさんだった。

『……………』

俺達は、その場で固まってしまふのであった。

第12話 エンカウント（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回は真人たちのターンです。

この物語の行く先はいまだにわかりません。

それでは、次回でお会いしましょう。

第13話 会ってしまったものは仕方がない（前書き）

今回は、ちょっと短めです。

第13話 会ってしまったものは仕方がない

「……………」

今の状況を説明しよう。

俺ははやての遠縁の親せきの人達が帰ってくるのを待っていた。
そして入ってきたのは、俺を襲ってきた赤い少女と、ピンク色の髪
を後ろに束ねている女性だった。

「なんで貴様^{てめえ}がここにいる!!」

「あら、山本君」

シャルさんとほかの二人の言っていることが見事に逆だ。

「って、シャル、こいつ知ってるのかよ!？」

「この間話したはやてちゃんのお友達よ」

女性に答えるシャルさんだが、少女は武器を手に使っていた。

「おらああああ!!!!」

「っ!!!!?」

そして一気にこっちにハンマーを振り下ろす。
俺はとつさのことで反応が出来なかった。
しかし……

カキン!!

「なっ!?!」

「え!？」

シャルさん達が驚きの声を上げる。

それもそのはずだ、誰もいないはずなのに少女のハンマーが止まっているからだ。

まるで、誰かが防いでいるように……

「全く、本当に攻撃を仕掛けてくるとはな……ま、分かりやすい軌道だったから防ぐのも簡単ではあったが」

「だ、誰だてめえ!!!」

執行人の声に、少女が警戒心むき出しで吼える。
まあ、誰もいないのに声がすれば当然だろうが。

「やれやれ、人に名を尋ねるのであれば己から名乗るのが流儀だと教わっていないのか?……まあ良い。わが名は無名の魔導師、執行人とでも呼んでくれ」

「確かにお前のいう事も一理ある。ヴォルケンリッターが将、シグナムだ」

「……鉄槌の騎士、ヴィータだ」

「それじゃあ、私も改めて……癒しの騎士、シャルです」

「えっと、山本 真人です」

完全に俺達は執行人のペースに巻き込まれていた。

「さて、このまま帰る……と言ってもお前らは帰す気はないよな」

「ああ、その通りだ。主の事が管理局に知らされてもらっては困るからな」

執行人の言葉にシグナムさんが当然だと言わんばかりに答える。

「あの、管理局って何？」

そんな中、俺は気になる単語があつたので尋ねることにした。

「あんた管理局知らねえのかよ？」

「管理局と言うのは全次元世界の平和を歌っている偽善者が集う場所だ」

管理局を知っていないことに、呆れながら言うヴィータと、どこことなく怒りを込めて言う執行人。

「……………そこであんたらに提案なんだが、こいつの魔法の特訓をして貰いたい」

「何？」

執行人の突然の提案にシグナムさん達の表情が険しくなる。ちなみに何度も言うが、執行人の姿は誰にも見えていない。

「こいつは知識はあるが、戦闘経験が皆無だ。そこでお前たちに戦闘訓練をして貰いたいんだ」

「しかし、お前の方が適任ではないか？」

シグナムさんがもつともなことを言う。

「確かにそうなのだが、僕はどうも実技に関しては教えるのに向いてないみたいでな。そっちの方が実技の方では、いい師匠になれるだろう？それともお前の称号はただのお飾りか」

執行人のあからさまな挑発にシグナムさんが載せられた。

「良いだろう。それほど言われたなら、やってやろうではないか！」
「OK、それなら代わりに僕たちはそっちのやっていることを手伝おう」

「お、おい！俺を無視して話を 分かった」

俺の意志はどこへやら、いつの間にか協定が結ばれていた。

「だから俺の」

「良かったなー、真人よ。これでお前は強くなれるぞ？」

俺の言葉を遮るように執行人がう嬉しそうに声をかけてきた。
ただ俺は一言だけ言いたかった。

「俺の話を聞いてくれー！！！！」

こうして、俺達のエンカウントは終わったのだ。

第14話 責務（前書き）

ようやく真人の役割が明らかに

第14話 責務

「今日はここまでだ」

「あ、ありがとう……ごさいました」

あれから何日目になるのか、俺はシグナムさんによってビシビシ鍛えられていた。

「……どうだシグナム。こいつの調子は？」

「うむ、よくもなければ悪くもない」

「ううう……」

執行人の言葉に、シグナムさんはいつものように容赦ない答えを返した。

「だが、最初の頃よりは格段に良くなっている」

「ッ！？あ、ありがとうございます！！」

初めて褒められたので、俺はつい舞い上がってお礼を言った。

「調子づく前に早く家に戻るぞ。お前の母親が心配するのではないか？」

「おっと！それじゃ、失礼します！！」

執行人の促しに、俺は慌てて一礼すると、家に走って行った。

【なあ、執行人】

夜、ベッドに横になりながら、俺は部屋のどこかにいるであろう執行人に声をかけた。

【なんだ？真人】

いつもの口調で、返してきた。

【もしかしてだけど俺がやらないといけない義務で言うのは、他にもあるんじゃないか？】

【ほう、なぜそう思う】

俺の言葉に、口調も変えずに答える執行人に、俺はさらに言葉をつづけた。

【いや、なんとなくだけど……】

【………お前は勘だけは鋭いな】

呆れた様子で執行人は答えた。

いくらなんでも俺に理由がわかるわけがない。

本当に勘なのだから。

【真人、お前は転生者と言うものを知っているか？】

【え？あ、ああ知ってるけど……】

唐突な問いかけに俺は答えた。

転生者

よくクラスメイトが話していたのが聞こえてきたときに聞いた言葉だ。

【転生者と言うのは、一度何らかの理由で死んだ者が神様の力によって別世界もしくは同じ世界で再び生きるようになる奴の事を言う】
【でもその転生者と俺の義務と何の関係が？】

俺はたまらずに聞いた。

だが、執行人の言葉は俺の予想の上を行くものだった。

【真人の義務と言うのは、その転生者を排除することだ】
【……………は！？】

俺はそれしか言う事が出来なかった。

【な、何で排除をしないといけないんだよ？！】

執行人の言う”排除”が、”殺す”と言う意味ぐらい、俺でもわかった。

【転生者は、世界にとって毒だ。だから排除しなければならない】
【それってどういう意味だよー！】

俺は分からなかった。

世界とか毒とか言われても、俺には何もわからない。

【世界単体には溜め込められる力の許容量がある。ここまでは良いか？】

【ああ、大丈夫】

俺の答えを聞いて満足したのか、執行人はさらに話を進めた。

【転生者はその大体が強靱な力を得る。それによって世界バランスが崩れるんだ。ここまでは良いか？】

【なんとか】

【それだけではなく、転生者の大多数が不誠実な目的で転生する。世界の女たちを誑し込もうとしたり、世界征服をしたりなど……真人はそう言ったやつらを排除するのが責務だ。ここまでは良いか？】

【ああ。でも、もしちゃんとしたやつだったら排除とかしなくてもいいんだよね？】

俺はすぐる思いで執行人に聞いた。

【もちろんだ。だがそれを決めるのは僕の役目だ。真人は排除するだけだ】

【……………】

俺は執行人の言葉に、言葉にはできない不安を覚えた。

【もう夜も遅い。早く寝ろ】

【あ、ああ】

俺は執行人の言葉に、心の中で執行人がまともな奴であることを願いながら、無理につくのだった。

第14話 責務（後書き）

というわけでして、何度でもいいです。
私はアンチ転生者です。

それでは、次回でお会いしましょう

第15話 出勤（前書き）

ようやく原作の話に戻っていききました。
一体何話まで行くのやら……

第15話 出勤

「今日も鍛錬お疲れだ」

「………… お前は最近独り言が多くなったようだが、大丈夫か？」

夜、背伸びをしながら自分を労っていると、執行人からツッコミが来た。

「誰のせいだよ誰の」

俺はここぞとばかりに反論する。

「何、この鍛錬は実に有意義な物であろう？」

何か不満でも言いたげに返してくる。

「濃密すぎるんだよ………… 毎日なんて聞いてない」

「それはシグナムが決めることだ。彼女に文句を言うといい」

言えるわけがない。

もしそんな事を口にしようものなら…………。

『甘ったれるな。剣の道は1日にしてならずだ！』

と言われること間違いなしだ。

【真人君！！】

そんな時、シャルさんから慌てた様子で、念話で話し掛けられた。

【ど、どうしたんですか！？シャマルさん！！】

【ヴィータちゃんとザフィーラが、管理局の人たちに囲まれているのー！私も今二人の近くにいますから、真人君もヴィータちゃん達と合流して！】

どうやらSOSの念話のようだった。

【分かりました】

俺はシャマルさんにそう答えると、念話を切った。

「ようやく実戦か。気合は十分か？」

執行人が俺にそう聞いてくる。
何気にかなり楽しげだ。

「あ、そういえば変装用の魔法って使えるか？」

「いきなり何を言い出すのだ。……………使えることには使えるが」

俺の疑問に答える執行人の声にはなぜかためらいがあった。

「どうしたんだ？」

「使って何をする気だ？」

どうやら目的が分からなかったようだ。

「俺の顔がみんなに知られるのもまずいだろ？だから」

「そうか……………」

俺の答えに執行人はそう返した。

「それじゃ、認識阻害魔法をかける」
「分かった」

認識阻害魔法。

前に執行人から聞いたものだ、確か相手から見た自分の姿を変える物だったはずだ。

つまりは、俺の顔が別人の顔に見えるということだ。

「 、 」

執行人が何かを呟いている。

すると、俺の体が淡い漆黒の光に包まれた。

だがそれはほんの一瞬で、すぐに元通りになった。

「これでお前だとはほかの奴には気づかれない」

「さんきゅ。それじゃ、行こうぜ!!」

「……………ああ」

今日の執行人の様子がおかしいと思いつつも、俺は窓から外に飛び出た。

こんなにも心がときめくのは初めてだ。

体が軽くて、なんでもやれそうな昂揚感が沸き起こる。

だからこそ、俺は執行人の一言が聞こえなかった。

「姿形を変えてまで戦うという意味を、お前は分かっているのか？」

第16話 戦闘（前書き）

今回は初戦と言っても過言でもない話です。

第16話 戦闘

執行人によって結界を抜け、ひたすら進む。

【そこをまっすぐ行けば、敵と対峙する！】

【了解】

執行人の言葉に、俺はそう返しながら空を飛んで向かう。そして少し進んだ時だった。

【真人、近くに反応ありだ】

【分かった】

どうやら敵に近づいたようで目視でも確認できた。
そして俺は敵の前に躍り出た。

???? Side

俺は順調だった。

目の前にいるヴィータやシグナム達を相手にしても一歩も引かない。
そして俺は今、シャルのいる方へ向かっていた。

（原作じゃ、ここでリーゼ姉妹が妨害するんだっただよな）

『マスター、近くから魔力反応です。こちらに近づいています』

そんな時、デバイスのルビーからそんな情報が入った。

「ああ、あいつの事か」

俺にはもうその人物の姿は見えていた。

黒のバリアジャケットに身を包んだ男だった。

顔の方は何やら仮面のようなものをかけていて、分からない。

（変装魔法か？ま、関係ないが）

「さあて、少しだけでも楽しませてくれよ」

そして俺は奴に攻撃を仕掛けた。

S i d e o u t

（な！？け、健司？！）

俺はそいつの顔を見て衝撃を隠せなかった。
なぜならそいつは、俺の友人だったからだ。

【真人、こいつから転生者反応ありだ】

【つまり……】

執行人は俺の言葉に執行人は何も言わない。

【来るぞ】

執行人がそう呟いた瞬間、目の前に二本の剣が迫って来ていた。

「ッ！！？ブレイク・イヤー！！」

俺は何とかその二本の剣をはじくことに成功した。

「へえ、やるじゃねえか。ならこれでどうだ！」

その次の瞬間、健司が手にした剣が弓へと姿を変えた。

「I am the bone of my sword・（我が骨子は捻じれ狂う）」

健司が歌うように詠唱を始める。

（ん？健司の構え方。おかしい）

俺は健司の弓の構え方に疑問を感じた。

空中と言う事もあるのだろうが、基本の構え方になっていない。しかも矢がぶれている。

これでは的を絞ることはまず不可能。

そう思うと、少しずつ健司の弱点が分かってきた。剣の構え方、あれも見よう見まねだ。

【さすがだ、真人。敵の弱点を見つけ出したな】

執行人が俺の考えに気付いたのか、称賛の声をかけた。

【お前の思うとおりだ。 あいつは戦術で言えば雑魚の範疇だ。ただ力を振りかざすだけで、照準とかは奴のデバイスが修正しているの
であろっ】

執行人の言葉に、健司は無敵のようにも聞こえる。

しかし、修正をしてるのであれば少しばかりはラグがあるはず。
そこを的確につければ何とか勝てる。

そう思い、俺は前方に防御障壁を展開する。

「シールプロテクション」

【強化】

執行人のサポートも相合って、防御障壁はかなりの堅さになった。

「偽・螺旋剣！！」
カラドボルグ

そしてドリルのようなものがこちらに向けて放たれた。

ギイイイイイ！！！！！

「ぐうううう！！！」

防御障壁とぶつかり合うが、ものすごい力で、こっちが圧されている。

今はまだいいかもしれないが、このままでは確実に破られる。

【真人！今展開している防御障壁をうまく使え！！】

執行人から檄が飛んでくる。

(うまく?.....そうか!!)

俺は何を言いたいのかに気付き、それをすぐに実行に移すことにした。

「リフレク、シヨン!!」

俺がやったのはただ単純に相手の攻撃をそのまま跳ね返すことだった。

俺は何とか猛攻を跳ね返した。

「何!？」

健司は驚きの声を上げる。

そして.....

「ぐあああああ!!!!」

健司は自分の攻撃をもろに食らい、落ちて行った。

その後、シャルが闇の書の力で結界を破壊し、俺達は解散となった。

第16話 戦闘（後書き）

ということで、VS健司戦でした。
これでいいんですよね？

それでは、次回でお会いしましょう。

第17話 初戦の夜（前書き）

伏線を張ります。

第17話 初戦の夜

健司Side

「クソッ！」

俺は机を思いつきり殴った。
理由は今日の戦闘だ。

「この俺が……負けるだなんて」

負け方とても惨めだった。

俺の攻撃をそのまま跳ね返されたのだ。

（こうなったら、とことんやり合ってやる……！）

【……やめておきなさい】

俺の決心と同時に、俺の頭の中に女性の声が響いてきた。
この感覚を俺は知っている。
この声は、神様だ。

【どういうことだよ！】

【そのままの意味よ】

俺の一言はバツサリと切り捨てられた。

【あなた、前に私がした忠告は覚えてる？】

【……世界のうんたらには見つかるなっちゅう奴か？】

俺は神様の問いかけでその時の事を思い出した。

【半分正解ね。正確には、世界の意志には見つからないで、よ】

【でもどうして見つかったらいけないんだよ】

【見つければ、間違いなく消されるわ】

俺は神様の言葉を聞いた瞬間、何の冗談だと思った。

一応俺は今最強の力を手にしている。

そんな俺が敗れるわけ……

【破れてるじゃない。戦歴のない彼に】

【なっ！！？あいつ、あれが初戦なのかよ！？】

俺は衝撃を覚えた。

俺は初戦の奴に負けたのかよ！？

【まあ、彼も少しは戦っているだろうけど、日は浅いはず。力量差は明らかなのにあなたに引けを取っていない理由は……】

【理由は！？】

もしかしたら弱点が聞けるかもしれないと思い、俺は先を促す。
だが、神様から語られたのは俺の予想を上回るものだった。

S i d e o u t

「……なあ」
「……」

俺はさつきから何度目かもわからない声をかけた。
しかし執行人は、只々沈黙するだけだった。

「もしかして、怒ってるのか？」
「……いや、そんなことはない。呆れてただけだ」

ようやく口を開いたかと思えば、帰ってきたのは、そんな言葉だった。

「勘違いするな。自分にだ」
「なんでだよ。お前のおかげでここまで強くなれたんだし」

俺の言葉に、執行人は鼻で笑った。

「だが、僕自身は何もしていない。それが一番悔しいんだ」
「……」

俺は執行人に何もいうことが出来なかった。

「僕の力があれば、お前には嫌な役割を押し付けることはないんだろ？が……情けないものだ」

「でも、俺が強くなれば執行人だって本当の姿を現せるんだろ？だつたら俺はこれからどんどん強くなっていくぞ」

俺の言葉に、執行人は無言だった。

「つぶ、お前らしい。だが、もう夜も遅い。早く寝ろ」

そういうと、執行人は二度と何もいう事はなかった。
そして俺も眠りにつくのだった。
しかし、俺は知らなかった。
この翌日、とんでもない事態が発生するという事を。

第17話 初戦の夜（後書き）

健司がどうなっていくのか……それは私にもよく分かりません。
その辺は少しずつ考えていく予定です。

それでは、次回でお会いしましょう。

第18話 襲撃（前書き）

襲撃第2弾です。

今回の襲撃者はあの人です。

第18話 襲撃

次の日、俺はいつものように学校へと向かった。
はずだった。

突然周囲の景色が変わったのだ。

「これは、結界!？」

俺はこの雰囲気を知っていた。

ヴィータに最初に襲われた時に出た結界だ。
と言うことは、ヴィータ達か？

(いや違う)

俺は直感的に察した。

ヴィータ達であれば用があれば念話で話し掛けるはず。

つまりは、これは第三者によって張られた結界と言うことになる。

(どうであれ、執行人を呼ぶか)

俺はそう思い執行人に念話で呼びかける。

【執行人、聞こえるか!!】

【ザーーーーーー】

俺の呼びかけに返ってきたのは、ただのノイズだった。

(クソ!!)

俺は今自分のおかれている状況を確認した。

幸い俺はクリエイトを身に着けている。

それを使えば戦うことだってできる。

だが、問題は俺自身の技量だ。

一対一ならばなんとか戦うことはできるが、もし二人だったら……

(……とりあえず、気を付けて行こう)

俺は剣状のクリエイトを両手で構えながら前方に歩き出した。

『マスター、3時の方向より誰かが近づいてきます。おそらく敵だ
と思います』

クリエイトからそう告げられ、俺は息をのんだ。

いつ来てもいいように来ると思われる方向を見て警戒した。

そして俺の前に現れたのは長身の、青髪に仮面をかぶった人だった。

「お前が山田 真人か？」

声から男の人だと思われる人物は、俺にそう聞いてきた。

「ああ、そうだが」

俺がそう答えた瞬間、威圧感のようなものが立ち込めた。

「そうか……なら」

次の瞬間、男が動いた。

「死んでもらおう!!」

『Protection / Extra』

クリエイトのつつさに張った強化型防御障壁により、男の奇襲は防げた。

「斬撃劣等!!」

「つつ」

俺は男に向けて剣を二回連続で切り付けるが、それは男が後退したことにより防がれた。

「っは！」

そして再び俺に肉厚してきた。

「つく！」

それを俺は何とか横に避ける。
だが……

「がつ!?!」

俺が横に避けることを予想していたかのように蹴りを入れられ俺は、後方へと吹き飛ばされた。

『Protection / EXTRA』

男が俺の方に追撃をかけようとするが、クリエイトによって防がれた。

（近接戦は不利だ。ここは距離を）

「バースト！」

「なにッ！？」

俺はクリエイトを地面に突き立てて衝撃波を発生させた。

これで男と距離が取れた。

その隙を見逃さずに、俺は弓状に変えた。

「ブレイク・インパルス！」

そして男に向けて矢を射た。

男はそれを難なく避けるが、それは俺の予想内だ。

「ブレイク・イヤー、マルチショット！」

俺と執行人で考えた新技のマルチショット。

矢を五発分具現化してそれを一斉に放つ。

「ちいっ！！」

男が舌打ちをしてそれを回避する。

だが、ただでは逃がさない。

「トレース・スタート！」

「何！？」

俺の追加呪文で今まで一直線だった矢が、男を追跡するように軌道を変えた。

これが俺の切り札の一つだ。

矢を誘導弾としてとらえたのだ。

（これならいけるッ！！）

俺は心の中でそう勝利を確信した時だった。

『マスター！！！！』

突然のクリエイトの悲鳴に、俺は一瞬反応が遅れた。

「があ！？」

そのために、俺は背後から誘導弾をもろに食らった。

（ツぐ、二人……だと？）

俺は意識が薄れるなかで見たのは二人の男の姿だった。
要するに俺は油断していたのだ。
そして最後に俺が聞いたのは

ズガアアアアアン！！！！

砲撃の放つ轟音だった。

第18話 襲撃（後書き）

今回はどの部分になるのかはわかりませんが、楽しみにして頂ければ幸いです。

それでは、次回でお会いしましょう。

第19話 新たな敵（前書き）

そろそろ20話に到達しそうです。

果たして、今原作ではどの部分なのでしょうか？

第19話 新たな敵

「……………んう」

気づくとそこは臨海公園だった。
あたりはすでにオレンジ色だった。

（そうだ、俺突然結界の中に閉じ込められて）

俺は何があつたかを思い出した。
そんな時だった。

【気づいたか？真人】

【執行人！？】

俺は執行人の声で驚いた。

【結界が展開されたのに気付くのが遅れた。すまなかった】

執行人が突然誤ってきたのに驚いた。

【そういえばあの二人はどうなったんだ？】

【この僕が追い払った】

俺の疑問に執行人がしれつと答えた。

【へ？】

【だから、僕が追っ払った。まあ詳しく言えば結界を破壊したら相手が逃げただけだ】

俺は執行人の言葉を頭の中で整理した。

結界を破壊したということは、攻撃系の魔法を使ったという事だ。

【お前、攻撃系の魔法を使えるようになったのか！？】

【ん？ああそうだけど。使えるとは言ってもほんの初級魔法程度だけだな】

執行人も俺の問いかけにすんなりと肯定した。

（と言うことは、俺はまた強くなったんだ）

執行人の強さは、俺の強さと比例する。

それは前に執行人から聞いた話だ。

だとすれば、最初は攻撃魔法が使用できない状態だったので、俺はその分成長したということだ。

【……………】

しかし、俺は素直に喜べなかった。

それはあの男達だ。

一瞬の油断で俺は、もう一人の男にやられてしまった。

【そう落ち込むな。やられる前までの戦いぶりはないものではないものだ】

執行人は最後に”その心意気を忘れるな”と言うと話を変えた。

【それはそうとあの仮面の男。……………もしかして転生者？】

俺はもしかと思い執行人に尋ねた。

【いや転生者にしては能力も低すぎるし、反応もなかった。おそらくは第三勢力の可能性がある】

執行人の言葉に、俺も納得した。
これで、敵の情報は分かった。

【さて、早く帰ろ　　】

執行人が帰ろうと言おうとした瞬間、再び周りに結界が形成された。

【これは転生者の物だ。おそらく健司とかいう奴だろ】

一難去ってまた一難とはこのことらしい。

【前行った時の魔法は使えるか？】

【いや、それには時間がない。もう3秒もすれば接触だ】

俺は変装魔法が使えるかを聞いたが、執行人から信じられないことを告げられた。

俺は急いでクリエイトを構える。

そして、健司が姿を現した。

「お前は!？」

そこにいる俺の姿を見て目を見開く。

「お前だったのか……真人」

健司が静かに呟いた。

第20話 目的

「……………」
「……………」

俺と健司は無言だった。

周囲には言葉では言えないほどの緊張感が立ち込めていた。

「健司、お前は転生者なのか？」

「……………ああ、その通りだ」

俺の問いかけに健司は自分が転生者であることを認めた。

「何が目的なんだ？」

俺は健司に聞いた。

俺は心の中で悪い目的じゃないことを祈った。

「そんなの決まってるだろ。なのはやフェイトたちでハーレムを築くのださ!!」

ハーレムと言う言葉の意味がよくわからないが、あまりいい目的ではないことはすぐに分かった。

「そういうお前は何者なんだ？ 真人」

「俺？」

「そうだ。俺はすっかり正体を言わせて自分は言わないのはずるくねえか？」

健司がそう言ってくるが、俺は自分がなんなのかが全く分からない。分かるのは自分が魔導師だということぐらいだ。そのことを知らせると、健司はぞっとするような笑みを浮かべた。

「へえ、自分の事も知らないで戦ってたんだ？」

「……………」

「だったら俺がお前が何者かを教えてやるよ」

健司が俺にそう言ってきた。

「本当か！？」

「ああもちろんだ。でも一つだけ条件がある」
「条件？」

一体なんだろうと思い、俺は健司に聞いた。

「それは簡単なことだ。俺の目的を果たすのに協力することだ」
「……………」

健司の出した条件に俺は、絶句した。
つまり俺は、明らかにいけないことをやろうとしている健司を手伝えと言う事なのだ。

「……………もう良い。貴様のくだらない話には飽きた」
すると、今まで黙っていた執行人が突然声を上げた。
声色からかなり怒っているのが伺えた。

「だ、誰だッ！……！」
「それは貴様ごとき雑種が知らなくてもよいことだ」

「何!？」

執行人の言葉に、健司が食って掛かる。

「お前のようなどうしようもないものは、世界にとってはただの毒にしかならん。とっとと消し去ってやりたいところだが……」

執行人はそこで言葉を区切った。

「それを許さない頓珍漢なマスターがいるせいでそれもできない」
「お、お前……まさか」

しかし健司は執行人の言葉など聞こえてはいない様子だ。
先ほどまでの余裕な様子はどこへやら、体中を震わせていた。

「おや?やはり転生させたものから聞いていたようだな」
「ヒイツ!!すみません!お許してください!!」

突然健司が土下座をした。

「ハッ!謝って許されるとでも思ってるのか?」

そんな健司に執行人は、容赦ない言葉を浴びせる。

【執行人】

「……………」

俺の念話に執行人は何も言わない。

「今日は見逃してやる。とっとと失せろ!」

長い沈黙の後、執行人はそう告げた。

健司は逃げるようにしてその場を立ち去って行く。
それから数分して結界が解除された。

【さて、帰るぞ。もう夕方だ】

【ああ】

執行人に促されるようにして、俺は帰路に就くのだった。

第21話 急変する事態（前書き）

ようやく原作へと戻ってまいりました。

第21話 急変する事態

【真人君！！真人君！！！！】

「のわあゝ！！！！？」

翌日、俺はシャルさんの叫び声の念話で目が覚めた。

「ううゝ」

【聞こえてる真人君？真人君！！！！】

聞こえてはいる。

でも、朝から念話で、しかも大声で頭の中でガンガンに響いて念話に答えられる状態ではないのだ。

【真人君！！！！】

そして今もシャルさんの念話で頭がくらくらしているという悪循環だ。

【おい、シャル。そこまでにしておけ。真人は寝起きだ】

【あ、ごめんなさい】

執行人の一言で、悪循環は何とか止まった。

【あ、あの。それで何があったんですか？】

ようやく落ち着いた俺はシャルさんに用件を聞くことにした。

【そ、そうなの！！実ははやてちゃんが！！！！】

その後シャルさんの話をまとめると、今朝はやてが倒れたらしい。今シャルさん達は救急車で病院に向かっている最中だとか。

【それじゃ、近いうちにお見舞いに行きます】

【うん、ありがとね。それじゃ】

シャルさんはそう言つと念話を切った。

「真人く、ご飯よ」

「はい！」

それと同時にしたからお母さんの声がしたので、俺はリビングへと向かった。

教室にいち早く到着した俺に向けられるのは、健司の怯えと妬みのどちらとも言いがたい視線だった。

教室になのは達がやってくると、いつものようにアリサ達がなのはの所にやってきた。

「入院？はやてちゃんか？」

「うん、昨日の夕方に連絡があつたの……そんなに具合が悪くないそうんだけど、検査とか色々あってしばらくかかるって」

俺はすずかの一言に驚いた。

あ、まさかはやての言っていた友人はさすがだったのか
俺は、はやての言っていたことをふと思い出した。

「そっか……じゃあ放課後健司と真人を含めて、みなでお見舞いとか行く？」

「え、いいのアリサちゃん!？」

(何っ!?)

何だかんでもないことになってきた。

もしこのままお見舞いに行つて、シグナムさん達と鉢合わせになったら。

想像するのも恐ろしい。

「すずかの友達なんでしょ？紹介してくれるって話だったしさ、お見舞いもどうせなら賑やかな方がいいんじゃない？」

「うーん それはちよつとどうかと思うけど……」

そして向こうは俺のそんな苦悩も知らずにとんとん拍子で、お見舞いに行くことが決まってしまった。

「でもいいと思うよ……ね、すずか」

「うん ありがとう」

その後、俺となのは、フェイトにアリサにすずか、健司の6人で写真を撮つてすずかがどこかにメールを送った。

一体どこに送ったのかと疑問に思ったが、それはすぐに分かった。

【真人君!!!これは一体どういう事!!!】

シャルさんの大声の念話で。

第22話 お見舞い（前書き）

原作でのお見舞いイベントです。

第22話 お見舞い

【真人君！！これは一体どういう事！！！】

シャルさんから大声の念話が入った。

【もしかしてメールが来たんですか？】

【ええ。さっきシグナムと話したんですが、私たちはお見舞い中は席を外して置こうと思うんです。それよりも、あの白い魔導師と真人君とは一体どういう関係ですか？】

俺はシャルさんの問いかけに正直に答えることにした。

【クラスメイトです】

【そう。でもどうでしょう……】

【そのことだが、ちょっと良いか？】

シャルの言葉に、突然執行人が念話で割り込んできた。

【はい、何でしょう？】

【その件だが、ここは僕に任せてはもらえないだろうか？】

【何かいい方法でもあるのか？】

俺は執行人に聞いた。

【ああ、はやてからシャルさん達の名前が出ないようにすればいいんです】

【そんなことが出来るのか！？】

執行人の案に、俺は思わず大声で聞いた。

【そう大きな声を出すな。僕のワード封印魔法でならできます】

【その封印魔法がなんなのかはよくわからないけど、お願いします】

シヤマルのその一言で、念話は終了した。

そして俺は授業を受けるのであった。

放課後、俺達は病院に来ていた。

コンコン

「はぁい。どうぞ」

中からはやての声が聞こえ、俺達は病室に入った。

「」「」「こんにちは」「」「」

「こんにちは、いらっしやい」

はやては俺達が押しかけても嫌な顔一つもせずに対応した。

「お邪魔します。はやてちゃん大丈夫？」

「うん、平気や！ あ、みんな座って、座って」

「ありがとう」

俺はちょっと遠慮して壁に寄り掛かるだけだった。

「コート掛けそこにあるから」

「うん」

「あ、これうちのケーキなの」

なのはが思い出したように手に持っていたケーキをはやてに渡した。

「それにしても驚きやわ、まさか真人君がすずかちゃんとお友達だったんとはな」

『えっ！？』

早速はやての衝撃のカミングアウトがやってきた。

「ま、真人君はやてちゃんのお知り合いなの！？」

（うは……）

俺は体中のちからが抜けたような気がした。

【記憶操作……開始】

執行人が小さな声でつぶやいた。

「そうなんよ。この間図書館で本を取ってもらってな、それから友達になったんや」

「まあ、そんなところだ」

はやての言葉に、俺は合わせるように頷いた。

【ワード封印……シャマル、闇の書、シグナム、ザフィーラ、ヴィータ】

さらに執行に何かを呟いた。

【何をやったんだ？】

【相手の記憶を操作する記憶操作に、特定の単語を言えなくするワード封印だ】

何とも便利なものだと思っただ。

「そんなところに立ってないで、こっちに来なさいよ」
「そうだぜ！真人！！」

俺は健司によって強引にはやてのそばまで歩かされた。
その時の健司の表情は、何かが吹っ切れた様子だった。
そのあと少しして俺達は、病院を後にした。

【闇の所がはやてちゃんを浸食する速度が上がっているみたいなの。
このままだともって一月……うっん、もっと短いかも】

その日の夕方、シャマルからそう伝えられた。

（そんな事絶対にさせない。絶対に！！）

俺は心の中でそう誓いながら、蒐集を続けた。

3人称Side

管理局本局のある部屋で、モニターを見ている白髪に白髭の老人……
ギル・グレアムがいた。

「父様。あんまり根を詰めると体に毒ですよ」
「そうだよ」

グレアムに声をかけたのは彼の使い魔のリーゼ姉妹だった。

「リーゼか……どうだい？様子は」
「まあ、ぼちぼちですね」
「クロノ達も頑張っているようですけど……まあ、相手は闇の書ですの」

グレアムの問いかけにリーゼ姉妹が答える。

「そうか……すまんなお前たちまで付き合わせてしまった」
「何言ってるの、父様」

ロッテが身を乗り出して反論する。

「あたしたちは父様の使い魔。父様の願いはあたしたちの願い」
グレアムの謝罪に終いは反論した。

「大丈夫だよ父様。デュランダルももう完成しているし」
「闇の書の封印……今度こそきつと大丈夫ですよ」

その部屋からリーゼ姉妹の笑い声が聞こえる。
彼女たちの陰謀も、佳境に入っているようだ。

S i d e
o u t

第23話 接触／男同士の語らい（前書き）

一度でいいから書いてみたかった話です。

第23話 接触／男同士の語らい

12月24日

3人称Side

「ごめんねはやて、毎日来れなくて」

はやての病室に、シグナム達全員がお見舞いに来ていた。

「うっん。元気やったか？」

「めっちゃめっちゃ元気！」

病室にどことなくのどかな雰囲気が漂っていた時だった。

コンコン

突然病室のドアがノックされた。

「ん？」

「こんにちは」

「っ！！？」

外から聞こえてきた声に、ヴィータ達はドアの方を見る。

「あれ？すずかちゃんや……はい、どうぞー！！」

はやての声と同時に、病室のドアが開く。

『こんにちは』

「っ!!」

ヴィータも入ってくる人を見て息をのんだ。

「あれ、今日は皆さんお揃いですか？」

「こんにちは、皆さん初めまして」

なぜなら、アリサとすずかが入って来て、その後に入ってきたの人物が……

「「っ!!」?」

フェイトとなのはだったからだ。

「あ、すみません。お邪魔でした?」

雰囲気が重いを感じたアリサが、謝りながらシグナム達に聞く。

「あ、いえ」

「いらっしゃいみなさん」

シグナムとシャマルは表面上では穏やかな表情で歓迎した。

「なんだ、よかったあ」

「ところで、今日はみんなどうしたん？」

ほっとしているすずかにはやてが聞いた。

「「えへへ……せーの」」

合図を出して取り出されたのは、いかにもなプレゼントの箱だった。

「サプライズプレゼント」

それにはやては嬉しそうな表情を浮かべた。

「あ……」

なのはは怯えていた。

なぜならばその視線の先には、やくざもびっくりな形相で睨んでいるヴィータの姿だった。

「なのはちゃんどうしたの？」

「あ、ううん何にも」

「ちよつとご挨拶を……ですよね？」

なのははから笑いしていた。

「はい」

「あ、みんな、コート預かるわ」

『はい』

シヤマルの言葉に全員返事をする。

「……………」

「えっと、あの……そんなに睨まないで」

さて、未だに睨まれ続けているなのはは、ヴィータにそう願います

る。

「睨んでねえです。こういう目つきなんです」

「こらヴィータ、嘘はアカン！悪い子にはこうで」

「んうー！んうー！」

はやてがヴィータの鼻をつまむ。

それによって病室内の雰囲気は多少だが改善された。

S i d e o u t

今、俺は八神家にいるのだが。

「……………」

「……………」

シャルルさん達のはやての所にお見舞いに行くと言ったことで、俺とザフィーラの二人でお留守番をすることになったのだ。

お互いに何も会話がなく、ものすごく居心地が悪い。

「真人」

「は、はい！」

突然声をかけられたので、思わず声が裏返ってしまった。

「そう構えなくてもよい」

「あ、はい」

ザフィーラさんに突っ込まれてしまった。

「……………お前は何のために戦う？」

「え？」

予想外の問いかけに、俺は一瞬固まった。

「お前たちの戦う理由が分からなくてな。執行人に理由を聞いたが、言いたくないとの一点張りだったのだ」

「当たり前だ。なぜ僕が、答えなければいけないのだ？」

「あ、あはは……………」

執行人の言葉に、俺はただ笑うしかなかった。

そういう意味では執行人らしいと言え言えるが。

「俺の戦う理由……………ですか」

俺はふと考えてみる。

俺が魔法の力を手に入れたのは、アクシデントに近かった。簡単に言えば、生きるために力を手にしたようにも思える。

でも、それは違うような気がする。

それじゃ、俺の責務をこなすため？

それも違う。

全ては後付けの言い訳のような気がする。

「……………無理に答えを出さなくてもよい。だが、いつかその答えが
とても必要になる時が来ることは覚えておけ」

ザフィーラさんの言葉には、重みがあった。

「はい」

俺に出来たのは、ただそう答えるだけだった。

「それにしても、シャマル達と念話が通じない。様子を見てくる」

「あ、俺も！」

俺はザフィーラさんが立ち上がったのを見て立ち上がるが、それはザフィーラさんの右手に阻まれた。

「いや、真人は良い。俺が行く。しばらく待っていてくれ」

ザフィーラさんはそう言うとしびングを後にした。

（何だか、いやな予感がする）

俺はそんな予感を感じながら、ザフィーラさんが戻ってくるのを待つのであった。

第23話 接触／男同士の語らい（後書き）

ザフィーラのキャラってこんなではなかったような気が……。

第24話 自分の魔法

「……………」

ザフィーラさんが出て行ってから少し経った。
俺は不安を感じていた。

「遅いな」

「何かあったのではないか？」

俺の呟きに、執行人がそう呟いた。
そうだ、なんで気づかなかったんだ！

「ザフィーラさんは異変を察知して行ったんだ。何かがないはずがないじゃないか」

俺はそう言ってソファーから立ち上がった。

「行くのか？」

「もちろんだ！！」

執行人の、問いかけに俺は答えた。

「今回は少々危険が伴うぞ。それでも行けるのか？」

「当たり前だ！魔法を使えるようになってから覚悟なんてできてる」

執行人に俺はそう答えた。
そうだ。

とうに覚悟はできている。

「よし、それでは行

」

執行人が行こうと言おうとした瞬間、空間が区切られるような感じがしたと思うと、景色が変わった。

これは……

「結界!?!」

「どうやら四の五の言える状況ではないな。急ぐぞ!?!」

執行人は、その結界から何かを感じ取ったのか慌てた様子で俺に告げてきた。

「おう!?!」

そして俺達は八神家を飛び出すのだった。

外の景色は、やはり結界内のようにモノクロ色になっていた。

「ここら辺一帯に結界が施されているようだね」

「ああ、しかもこの空気はかなり危険だ」

俺の言葉に、執行人はそう答えながらあたりを見回していた。
確かに雰囲気がいつもとは違った。

まるで俺の知らない何かが現れているかのような雰囲気だ。
言うなれば空気自体がかなり鋭いとげのように俺に突き刺さっているような感じがした。

空気自体が重く、それが俺をさらに不安にさせていた。

「とまれ！真人！！」

「ッ！！？」

執行人の突然の警告に、その場で浮遊する。

「な、何だあれは！？」

俺の視線の先には、こっちに向かって飛んでくる何かがあった。

「プロテクション・ホバー！」

飛んでくるものを受け止める特殊防御魔法を、前方に展開する。

「うわ！！」

「ぐッ！？」

飛んできた何かが防御魔法にぶつかり、少し両腕に圧力がかかる。

「つて、健司！？」

「……………真人か」

飛んできた人物は、友人でもあり転生者でもある健司だった。

「この結界は何だ！！一体なにがあつたんだ！？」

俺は苦しい表情を浮かべる健司に、疑問を投げかけた。

「おい、一気に質問をするな。こいつも困ってるだろ」

「悪い……………って、あんた誰？」

執行人の言葉にいつものように答えようとして声のした方を見た瞬間、そこには見知らぬ俺と同じくらいの背をした少年がいた。短めの銀色の髪をして目の色が赤い少年だった。

「誰って……………執行人だ、執行人。声で気付くだろ普通」

額に手を当てて呆れていた。

「執行人ってそういう姿してたのか」

「お前、俺の力がないから、姿を現すことが出来ないって言ってなかった？」

どこか感心した感じでつぶやく健司をしり目に、俺は執行人に聞いた。

「確かに僕が姿を現すには、お前が力を付けるしかない。そしてお前にはまだそれだけの力はない」

「だったら」

執行人の答えに反論しようとするのを執行人が遮るようにして上空を指さした。

その上空には何もない。

「ここは闇の属性で形成された結界だ」
「??」

よく理解できない俺の様子を見た執行人がさらに説明を続ける。

「属性と属性相乗効果は知っているな？」
「ああ」

属性の相乗効果とは、周囲に形成された結界などの属性が同じだと相乗効果で威力が上がるというものだ。

「何だよ？その属性相乗効果って」

健司はよく知らないらしいので、俺と執行人は健司に説明した。

「と言うことは、闇属性の奴に有利っていう事だよな」
「お前の周りに闇属性の奴はいるか？」

執行人が健司に問いかける。

「えっと闇の書の意志だけだ」
「そうか……こっちは僕と真人の二人が闇属性だ」
「え！？真人も闇属性なのか！？」

執行人の言葉に、健司が驚いたように聞いてきた。

「ああ、こいつは俺の弟子でもあり、マスターのようなものだ。だから俺と同じ属性だ」

執行人は最後に”まあ、それでも僕よりは劣るが”と付け加えた。

「さて、次はそっちの番だ。何があつたかを教えてくれ」
「……分かった」

そして健司は、何があつたかを語り始めた。

健司の話を要約するとこうだ。
まずなのはとフェイトさんがシグナム達と鉢合わせになってしまい、主が分かってしまった。

そして屋上でなのは達が戦い始めるが、突然現れた仮面の男（おそらくは俺を襲ったのと同じ人物だ）がなのはとフェイトさん、健司を拘束してはやてを呼び出した

そして仮面の男ははやてを闇の書の主として、覚醒させたのだ。

その後、空間攻撃を使って攻撃をしてきて封鎖結界を張られた。

この時に俺は外に出たのだろう。

そしてなのはの持つ魔法の砲撃……確か名前は……まあいいかをぶっ放した。

その際に、すずかやアリサ達に正体がばれてしまったのだとか。

そしてフェイトさんが闇の所に取り込まれたらしい。

「それで、それを助けようとした健司はここまで吹き飛ばされてきたという事か」

「……ああ」

健司の声は、どこか元気がない。

「情けないよな。魔法を使ってちよつとしか経ってない奴に負けて、勝てるはずの敵にも負けて」

「……………」

健司の言葉を俺は静かに聞いていた。

「だったら、このまま消えるか？その方が僕も手っ取り早くて助かるんだが」

執行人が健司にそう尋ねる。

俺は思わず執行人の事を怒鳴ろうとしたが、それを必死に堪えた。なぜなら、これが俺のやるべき宿命なのだから。

「執行人」

「……………」

俺の表情から、何を言いたいのかを察した執行人は、そう言うところから歩下がつた。

「なあ、健司」

「何だよ」

「健司にとって魔法ってなんなのかな？」

俺は、前に執行人に問いかけられた言葉をそのまま聞いた。魔導師にとっての根源でもあるその質問を。

「それは……………」

健司は答えに詰まった。

どうやら、俺と同じように考えてなかったようだ。

「…………あの、執行人さん」
「なんだ？」

健司はしばらく考え込むと、執行人に声をかけた。

「俺にも協力させてください！！」
「…………理由を聞こうか？」

突然の言葉に、執行人はしばし考えると、そう返した。

「見つけたいんです。俺の魔法の意味を。だから、もう一度戦わせ
てください！！」
「……………」

健司の言葉に、執行人は無言だった。

「執行人。俺からもお願いだ」

俺は執行人に頭を下げた。
しばらくすると、”はぁ”というため息が聞こえた。

「前からお前は甘いと思ったがこれは、相当だな。まあ、そんな奴
をマスターにしてみましたから仕方ないか」

執行人は後悔しながら、だが表情は嬉しそうだった。

「お前はマスターだ。僕に頭を下げなくてもいいんだぞ。だが、真
人のお願いを断るわけにはいかなえな。おい健司」
「はい！」

執行人に名前を呼ばれた健司は、背筋を正した。

「お前の抹殺は今後の経過を見て判断しよう。だがしかし、もし不審な行動をとつたらすぐに抹殺するゆえ、気を付けるんだな」

その言葉は、執行人なりのOKだった。

「ありがとうございます！」

「ありがとう！」

俺と健司は執行人にお礼を言った。

「本当に変わってるな。さあ、早く行くぞ！時間もあんまりなさそうだし」

「了解！」

「おう！」

俺と健司と執行人は、前方に光る白銀の光に向かって飛んで行った。

第25話 今後のプラン（前書き）

なのは達とのエンカウントです。

それでは、どうぞ。

第25話 今後のプラン

俺達が白銀の光の場所に向かうとそこにいたのは……。

「健司君……それに真人君!？」

制服と同じだが、どこかが微妙に違う白い服を着たなのは黒の露出度の高い服を着ているフェイトさん。
そしてやや金髪の髪をした俺と同じ年の男と、オレンジの髪をした女性がいた。

「真人君って、魔導師だったの!？」

「ああ、うん」

なのはの問いかけに、俺は頷いた。

「全然気づかなかったよ」

「当然だろう。近くに魔導師がいるのが分かっているんだから、魔力をこっちの方で隠滅しておいたんだ」

と、執行人が俺の横に出るとそう答える。

やっぱりあんたがやっていたのか。

「あ、あなたは？」

「僕は……執行人とでも名乗っておこう。こいつの魔導の教導をしている」

執行人はそう自己紹介をした。

「ところで、あの人たちは誰？」

俺はなのは達のそばにいる人たちを見ながら聞いた。

「あ、えつとあの男の人が、ユーノ君で女性の人がアルフさんです」

どうやらやや金髪の髪をした人が、ユーノと言う人物で、オレンジ色の髪の女性がアルフと言う名前らしい。

「初めまして、ユーノさんにアルフさん。山田 真人と言います」

「あ、ユーノ・スクライアです。ユーノって呼んでください」

「あたしはフェイトの使い魔のアルフさ」

と、自己紹介をした時だった。

「うわ!？」

突然光ものすごい光を発したので、思わず目を覆った。

「ああ!？」

やがて光が治まると、そこには三角形の白銀の魔法陣……ベルカ式
のものが展開されその上に守護騎士の4人が立っていた。
まるで中央の光を守るように。

「ヴィータちゃん!」

「シクナム!」

二人が守護騎士の二人の名前を呼ぶ。

「……我ら、夜天の主の元に集いし騎士」

「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」

「この身に命ある限り、我らは御身の元にある」

「我らが主、夜天の王……八神はやての名の元に！！」

シグナム達の口上が終わってから少しして、光の球が砕け中から黒い甲冑を着たはやてが現れた。

「「「はやてちゃん（はやて！）！」「」」

俺となのはの声に、はやては笑顔で答えた

「夜天の光りよ、我が手に集え！祝福の風、リインフォース……セー
ーット、アップー！」

その瞬間はやての姿が変わった。

黒色の甲冑に白い服が現れ、さらにスカートの部分も伸びて背中には4枚の黒い羽根が展開し、髪の色は栗色から銀色になった。

「……はやて」

「うん……」

「すみません……」

「あの……はやてちゃん、私達……」

ヴィータ達が、はやてに謝った。

まあ、主の約束を破ってまでも隠れて蒐集していたしな。

「ええよ、みんな解ってる。リインフォースが教えてくれた……そ
やけど、細かい事は後や。今は……おかえり、みんな」

「うつ……うつ……うわああん！！」

はやての言葉に感極まったヴィータは、はやての胸で泣きじゃくった。

はやてもヴィータを優しく抱きしめて受け止めた。

「はやてっ！はやて！！はやてえ！！うわああん！！」

ヴィータ達から聞いたのだが、彼女たちの目的は、はやてと幸せに楽しく暮らすことだった。

……それが今こうして実現して嬉しいのだろう。

「良かったな、ヴィータ」

「ひつく……うん」

俺の言葉に、ヴィータは涙ぐみながら頷いていた。

「はやても無事でよかったよ」

「真人君って魔導師やったんやな。とても驚いたよ」

俺ははやての言葉に、苦笑いを浮かべていた。

「なのはちゃんとフェイトちゃんもごめんな。うちの子達が迷惑かけてもって……」

「ううん……」

「平気……」

すると、上空から男の人がやってきた。

「済まないな。水を差してしまうんだが……時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。時間がないので簡潔に説明する」

そしてハラOWNさんから、現状の説明が始まった。

「……あその黒い淀み、闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する……僕はそれを何らかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在2つある……1つ、極めて強力な氷結魔法で停止させる。2つ、軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲、アルカンシエルで消滅させる。これ以外に他に良い手がないか、闇の書の主と守護騎士の皆に聞きたい」

ハラOWNさんは守護騎士達に聞くが……

「ええつと……最初のは多分難しいと思います……主のない防衛プログラムは、魔力の塊みたいな物ですから……」

「凍結させても、コアがある限り再生機能は止まらん……」

シヤマルさんとザフィーラにより最初の案は没。

「アルカンシエルも絶対ダメツ！！こんな所でアルカンシエル撃つたら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！！」

ヴィータが猛烈な勢いで反対した。

「そ、そんなにスゴイの？」

「発動起点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら、反応消滅を起こさせる魔導砲……って言うとか大体わかる？」

「あの！私もそれ反対！！」

「同じく！絶対、反対！」

2つ目もヴィータとなのはとフェイトさんにより没。

と言つよりも、恐ろしい兵器だ。

「僕も艦長も使いたくないよ……でも、アレの暴走が本格的に始まったら被害がそれより、遥かに大きくなる」

「暴走が始まると、触れた物を侵食して無限に広がっていくから……」

「……」

ハラオウンさんとユーノの説明を聞いて何も言えなくなる二人……

【はい、みんな！暴走臨界点まで後15分切ったよ！！会議の結論はお早めに！】

「ところで、君は一体誰なんだ？」

女性の声の念話が聞こえたかと思えば、目の前にいるハラオウンさんが俺に向かってそう聞いてきた。

「や、山田正人です！！」

「俺は、こいつの魔導を教えている執行人だ」

「クロノ・ハラオウンだ。君達二人には後で、詳しい事情を聞かせてもらいたい」

「……致し方あるまい」

執行人が嫌そうに答えた。

「ね、ねえ真人君は何かいい案がないの？」

「……悪い」

俺にもわからなかった。

「あるではないか。僕が使っていた全ての無へと返すプリマテリアライズ・オーバードライブを使えば、あの防衛プログラムと言うものでも消せるだろう」

「そ、そんな物騒なものを使っても、影響はないのか？」

執行人の提案に、ハラウンさんがそう疑問を投げかけた。

「もちろんだ。少々強い風が吹くだけだ。周りへの被害は0に等しい」

「……よし、それで行こう」

執行人の答えに、納得したのか、執行人の言ったプランで決定した。

「実に個人の能力頼みでギャンブル性の高いプランだがまあ……やつてみる価値はある」

「防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合4層式、その奥に対魔力のバリア……まずはそれを破る！！」

「え？」

「どうした？何か問題でもあるのか？」

突然声を上げた健司に、ハラウンさんがそう問いかけた。

「あ、いや。なんでもない」

健司は首を振ってそう答える。

【何か問題でもあるのか？】

【……ああ。俺の知っている限りだと、対魔力バリアはないはずなんだ】

健司の言葉に、俺は驚きを隠せなかった。

【健司よ。ここではお前の知っている物語になるとは限らない】

執行人の言葉が、俺には重く聞こえた。

【真人。プリマテリアライズ・オーバードライブの打ち方。覚えてるか？】

【ああ。大丈夫だ】

俺は執行人の問いかけにそう答えた。
前に一度、執行人からはこの技の打ち方を教えてもらっていた。
武装は何でもいいらしいので、弓型にした。

【健司は、真人のサポートをしろ】

【はい！】

俺達の、方針は固まった。

「バリアを貫いて本体にむけて私達の一斉攻撃でコアを露出！」
「そして真人君の魔法で消滅！！」

こちらも、一通りプランの確認を終えたようだった。

【暴走開始まで、後2分！】

まだ少しばかり時間があるようだ

「あ、真人君になのはちゃん、後、その人とフェイトちゃんも」
「「「「？？」」「」」」

はやてに呼ばれた俺達は、状況がうまく飲み込めない。

「シャル！」

「はい、3人の治療ですね……クラールヴィント、本領発揮よ」
『Ja』

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

シャルの言葉に呼応するように、緑の光が俺たちを優しく包み込んだ。

「あ……わぁ！」

「ええ……」

「湖の騎士シャルと風のリング、クラールヴィント。癒しと補助が本領です」

「ありがとうございます。シャルさん」

「すごいです」

「ありがとうございます、シャルさん！」

「ふふ……どういたしまして」

俺は特にダメージなどなかったが、力がみなぎってくる感じがした。そしてとうとう暴走が始まったのか、黒い球体の周りから、黒い魔力の塊が柱のように立ち上った。

「始まるっ！」

「……夜天の魔導書を呪われた闇の書と呼ばせたプログラム……闇の書の闇……」

黒い球体が割れ、中からはおぞましい巨大生物が現れた。

「……!!!」

こうして、俺たちの最後の戦いが幕を開けた。

第25話 今後のプラン（後書き）

今回は、闇の所の暴走プログラムがフルボッコになります。

それでは、次回でお会いしましょう

第26話 最終決戦

3人称Side

「チェーンバインド!!」

「ストラグルバインド!!」

アルフとユーノの鎖型バインドで、防衛プログラムの周りにあるバリケード……魔法生物の足のようなものを捕まえ、切断していく。

「縛れ! 鋼の軛! でえええや!!」

ザフィーラから放たれた魔法でその足を薙ぎ払う。

「ッ!!」

その攻撃に防衛プログラムがさらに声を上げた。
そしてその上空にデバイスを構えたのはとヴィータが控えていた。

「ちゃんと合わせろよ! 高町なのは!!」

「ヴィータちゃんもね!!」

ヴィータはグラーフアイゼンを構える。

「鉄槌の騎士ヴィータと、黒鉄の伯爵グラーフアイゼン!!」

『G i g a n t f o r m』

グラーフアイゼンは巨大なハンマーに変形した。

「轟天爆碎！ギガントクラーケンッ！！」

ヴィータの強烈な一撃で、バリアの二枚目を破壊する。

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン、いきますー！！」
『Load Cartridge』

レイジングハートはカートリッジを一発ロードする。
するとなのはを中心に桃色の魔法陣が展開される。

「エクセリオンバスターッ！！！！」
『Barrel shot』

不可視のバインドのようなものを放ち、触手を払いのける。

「ブレイク……」

そして魔力を収束する。

「シューーッ！！！！」

なのはの放った砲撃攻撃でさらに一枚破壊した。

「ッ！！」
「次！シグナムとテストロツサちゃん！！」

シャマルの指示が、防衛プログラムの背後に待機しているシグナム達に伝えられた

「剣の騎士シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン！刃と連結刃に続く、もう一つの姿……」

シグナムは剣の柄と鞘を合わせる。

『Bogen form』

するとその姿は、弓に変形した。

そしてシグナムが弓を引くと矢が現れ、カートリッジが弓から2発ロードされた

「翔けよ！隼！！」

『Sturm falken』

シグナムは矢に魔力を収束して一気に放つ。

シグナムの攻撃でさらにバリアの四枚目を破壊した。

「フェイト・テストロッサ、バルデッシュザンバー、いきます！！」

「はああ！」

フェイトがバルデッシュを一降りすると、不可視の衝撃波が防衛プログラムに命中した。

そのままフェイトはバルデッシュを上に掲げる。

「撃ち抜け！雷神！！」

『Jet zamber』

フェイトが振り下ろした魔力刃は防衛プログラムのバリアを砕いた。

「ッ！！」

すると防衛プログラムは応戦しようと、触手から砲撃を放とうとした。

「盾の守護獣ザフィーラ！砲撃なんぞ撃たせん！！」

だがそれはザフィーラの魔法により、無効化された。

「はやてちゃん！！」

シャマルは防衛プログラムの正面の上空にいるはやてに、声をかけた。

「彼方より来たれ……やどり木の枝、銀月の槍となりて撃ち貫け！
！石化の槍、ミストルティン！！」

はやてより放たれた魔力槍は防衛プログラムを貫き、石化させていった。

「」

女性を象っていた姿は崩れ落ちた。

しかし防衛プログラムは再生していき、さらにおぞましい姿になった。

「うわっ！？まあ……」

「なんだか、スゴい事に……」

その姿にアルフとシャルは、嫌悪感を露わにした。

『やっぱり並の攻撃じゃ通じない、ダメージを入れたそばから再生されちゃう!!』

「だが、攻撃は通っている……プラン変更なしだ!!……いくぞデユランダル!」

『Ok Boss』

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて永遠の眠りを与えよ」

クロノから放たれた冷気は、海をも凍結させ、防衛プログラムも凍結させていく。

「凍てつけ!!」

『Eternal coffin』

そして一気に防衛プログラムを凍らせた。

しかし防衛プログラムは一瞬で氷を破壊し、再生していく。

「いくよ、フェイトちゃん!はやてちゃん!」

その光景を見ながら、なのはは二人に声をかける。

「うん!!」

「うんっ!」

『Starlight Breaker』

「全力全開っ!スターライト……」

「雷光一閃!!プラズマザンバーッ……」

「……ごめんな……おやすみな。……響け!終焉の笛、ラグナロク……」

「……ブレイカー!!!」

そして三人の砲撃が放たれた。

「最後、真人君お願い!!」

そしていよいよ、最後の締めとなった。

S i d e o u t

「最後、真人君お願い!!」

「了解です」

シャマルさんの指示に、俺はそう答えて地面を改めてみた。
そこにあつたのは、えげつない姿をした防衛プログラムだった。

「健司、両足で踏ん張るように弓を構えて」

「こうか？」

俺の指示に健司は言われた通りに、弓を地面にいる防衛プログラムに構える

「そう。そうすれば軸がぶれる事はない」

「I a m t h e b o n e o f m y s w o r d」

俺の言葉に、健司はなるほどつぶやきながら、詠唱をして生成された先端がドリルのような形をする矢を引いた。

「偽・螺旋剣！」

健司から放たれた矢は防衛プログラムに命中すると、爆発が起こつた。

「さあ、後はお前だ。失敗するなよ？」

「分かつてる」

執行人の茶化すような言葉に俺は静かに言い返す。

（ここで俺がしくじればとんでもないことになる）

俺は一度目を閉じて深呼吸をして目を開けた。

「この世を形成せし、根源よ。我が言霊を聞きいれたまえ」

俺の足元に青色の魔法陣が展開する。

「全てのものを無へと還し給え。プリマテリアライズ……」

俺は魔力で生成した弓やを引く。

照準は合わせてある。

「オーバードライブ!!」

そして一気にそれを放った。

防衛プログラムに命中した矢を起点に白銀の光が放たれ、俺達の視界を光で覆い尽くす。

やがて光が晴れると、そこには何もなかった。

「お、恐ろしいなお前は」

クロノのひきつったような声が聞こえてきた。
上空を見ると、全員が同じ表情だった。

「まあまあのお出来だな」

執行人は一人で頷いていた。

【という訳で現場の皆、お疲れ様でした〜！状況、無事に終了しました！！この後まだ残骸の回収とか、市街地の修復とか色々あるんだけど……皆はアースラに戻って一休みしてって】

女性の念話で、終わったことが告げられた。

「あ、あのアリサちゃんとすずかちゃんは？」

【ああ、被害の酷い場所以外の結界は解除してるから、元いた場所に戻ってもらったよ。大丈夫！】

「そうですか、よかった」

なんでだろう、今頭の中でアリサが喚いている姿が目には浮かぶ。

「はやて！？」

「はやてちゃん！？」

「はやて……はやてーっ！！！！」

「どうした！？……ってはやて！！」

ヴィータ達の叫び声に振り返ると、はやてがシグナムさんの腕にもたれ掛かって気を失っていた。

「真人！！はやてが……はやてがあー！！」

「極度の疲労によるものね……でも命に別状はないから大丈夫よ」

シヤマルさんの言葉に、俺達はほっとすると、アースラと言う場所に向かうのであった。

第26話 最終決戦（後書き）

闇の書事件も終わりが見えてきました。
リインフォースはどうでしょう。

第27話 その後（前書き）

遅くなりましたが、第27話です

第27話 その後

3人称Side

「……やはり破損が致命的な部分にまで至っている……防御プログラムは停止したが、歪められた基礎構造はそのままだ……私は……夜天の魔導書本体は遠からず新たな防御プログラムを生成し、また暴走を始めるだろう……」

「やはりか……」

アースラの病室で、リインフォースが自身の現状を話していた。それを聞いたシグナムは、予想していた事態が的中してしまった事にため息をつく。

「修復はできないの？」

シヤマルがリインフォースに尋ねる。

「無理だ……管制プログラムである私の中からも夜天の書本来の姿は消されてしまっている……」

だが返ってきた言葉はかすかな希望を壊すものだった。

「……元の姿が解らなければ、戻しようもないと言うか」

「そういう事だ」

リインフォースの絶望的な答えにシヤマルは肩を落としていた。

「主はやては、大丈夫なのか？」

「何も問題はない、私からの侵食も完全に止まっているしリンカーコアも正常作動している。不自由な足も、時を置けば自然に治癒するだろう……」

シグナムの問いかけに、リインフォースが答える。

「そう……じゃあ、それならまあ、よしとしましょうか」

「ああ、心残りはないな」

シャルとシグナムは、はやてが助かる事に安堵していた

「防御プログラムがない今、夜天の書の完全破壊は簡単だ。破壊しちやえば暴走する事も二度とない……代わりに私らも消滅するけど」

ヴィータはそう言って俯いた。

夜天の魔導書の完全破壊……それは、夜天の魔導書から生まれたヴォルケンリッター達の消滅と言う事でもあるのだ。

「……すまないな、ヴィータ」

「何で謝んだよ！いいよ別に……こうなる可能性があった事位、みんな知ってたじゃんか」

「いいや、違う……」

「……えっ!?!」「……」

リインフォース突然の言葉に、シグナム達の視線が集まる。

「お前達は残る……逝くのは……私だけだ」

そう言い、リインフォースは悲しみを含んだ笑みを浮かべた。

S i d e o u t

宇宙船 フェイトさん達曰く、時空航行船らしい に到着した俺達は、食堂内の席に座っていた

「それで、どうやって真人君は魔導師になったの？」

目の前にいるのはが俺に疑問を投げかけてきた。
ちなみに席順は俺の横に執行人、健司。

そして向かいには俺の正面になのは、フェイトさんだ。

「実はだな

」

そして俺は、魔導師になるきっかけを話した。

「そんなことがあったんだ」

「まあ、そういう事だ」

話し終わると、なのは達は茫然としていた。

「でもその転生者って、何なの？」

「一度死んで、強大な力を付加させたりして不正に生まれ変わって来たやつの事だ。そのままにしておくで世界自体が狂うことになる」

執行人の説明に、なのは達は首を傾げていた。
やはりよく分かっていないようだった。

「まあ、それは置いといて。はやては大丈夫なのか？」

「……分からないけど。診断の結果が出るまで」

俺がそこまで言いかけると、食堂にユーノとハラオウンさんの二人が入ってきた。

「あ、ユーノ君！クロノ君！はやてちゃんは！！」

なのはの問いかけに、二人の表情は曇っていた。

「落ち着いて聞いて貰いたい」

「実は……」

そしてユーノ達から衝撃の言葉が告げられた。

「闇の書を破壊しないといけないんだ」

第28話 悲しい終わり（前書き）

これで、ようやく闇の書事件は終了です。

第28話 悲しい終わり

「夜天の書の破壊!？」

「どうして!？ 防御プログラムはもう破壊したはずじゃ」

話を聞き終わったなのはとフェイトさんは、ハラウンさんとユーノを問い詰めていた。

「闇の書……夜天の書の管制プログラムからの進言だ」

「管制プログラムって、なのは達が戦っていた?」

「ああ」

アルフさんの言葉に、クロノが頷く。

「防御プログラムは無事破壊できたけど、夜天の書本体がすぐにプログラムを再生しちゃうんだって。今度ははやてちゃんも侵食される可能性が高い……夜天の書が存在する限り、どうしても危険は消えないんだ」

「だから闇の書は、防御プログラムが消えている今の内に、自らを破壊するよう申し出た」

「そんな……」

「でも、それじゃシグナム達も……」

「いや、私達は残る」

フェイトさんが席を立てて身を乗り出した時、シグナムの声がした。

「シグナム!？」

「……防御プログラムと共に我々守護騎士プログラムも、本体から

開放したそうだ」

「それで、リインフォースからなのはちゃん達にお願いがあるって

……」

「お願い？」

そして俺達はシャルさんからリインフォースさんの頼みを聞いた。

それから少しして海鳴市のある丘を、俺と健司になのは、フェイトさんの4人で歩いていた。

「……ああ、来てくれたか」

丘の頂上には、魔導書を手にしたリインフォースが居た。

「リインフォース……さん」

「そう呼んで……くれるのだな」

「……」

「貴女を空に還すの私達でいいの？」

「お前達だから頼みたい。お前達のお陰で私は主はやての言葉を聞く事ができた。主はやてを食い殺さずに済み騎士たちも生かす事が

できた……感謝している。だから最後は、お前達に私を閉じてほしい」

リインフォースさんをお願いされたのは、夜天の書を俺達の手で消滅させることだった。

「はやてちゃんと……お別れしないでいいんですか？」

「主はやてを悲しませたくないんだ……」

「リインフォース……」

リインフォースさんの答えに、フェイトさんが悲しげに名前を呟く。

「でもそんなの……何だか悲しいよ」

「お前達にもいずれ解る……海より深く愛し、その幸福を護りたいと思える者と出会えればな」

リインフォースさんはそう言いながら、優しく笑った。

すると後ろから誰かがくる気配がした。

おそらく守護騎士のみんなだろう。

「そろそろ始めようか……夜天の魔導書の……終焉だ」

「……覚悟を決めているんですね。リインフォースさん」

俺は今までの会話を聞いて、リインフォースさんにその声をかけた。

「……ああ、色々世話になったな。小さな勇者よ」

リインフォースさんは俺にっこりと微笑んだ。

その笑顔は、とても美しいはずだったのにとっても悲しげではかないものだった。
そして、儀式が始まった。

そして儀式が終盤へと進んだ時だった。

「リインフォース!! みんなー!!」

突然響き渡る声に俺達は、驚いて声のした方を見ると、そこには車椅子に乗ったはやてが、息を切らしてこちらに来ていた

「はあ! はあ! はあ!」

「はやてちゃん……」

なのはとフェイトさんは、はやてが現れたことに驚いていた。

「はやて!」

ヴィータは、はやての元に駆け寄ろうとする。

「動くな!! 動かないでくれ、儀式が止まる」

リインフォースさんに一喝され、全員がその場にとどまった。

「あかん！ やめて！！ リインフォース止めて！！ 破壊なんか
せんでええ！！ 私がちゃんと抑える！！ 大丈夫や！ こんな
せんでええ！！」

「……主はやて、良いですよ」

はやての悲痛な叫びに、リインフォースさんは優しく語りかける。

「いいことない！！ いいことなんか、何もあらへん！！」

「随分と永い時を生きてきましたが、最後の最後で私は貴女に綺麗な名前と心を頂きました。騎士達も貴女の傍に居ます。何も心配はありません」

「心配とかそんな……」

「ですから、私は笑って逝けます」

「……ッ！！ 話し聞かん子は嫌いや！ マスターは私や！ 話し聞いて！！ 私がかつと何とかする！ 暴走なんかさせへんって約束したやんか！」

「……その約束は、もう立派に守っていただきました」

「リインフォース！！」

はやての悲痛な声が俺にはつらかった。

「主の危険を払い、主を護るのが魔導の器の勤め……貴女を護る為の最も優れたやり方を、私に選ばせて下さい」

はやての叫びでも、リインフォースさんの決意は覆らないようだ。

「せやけど……ずっと悲しい思いしてきて、やっと……やっと……」

救われたんやないか……」

はやてはとうとう泣き始めた。

「私の遺志は貴女の魔導と、騎士達の魂に残ります……私はいつも貴女の傍にいます」

「そんなんちゃうー！　そんなんちゃうやろ！　リインフォース！　！」

「……駄々っ子はご友人に嫌われます……聞き分けを、我が主」
「リインフォース！」

はやてが、リインフォースさんの所にさらに近づこうと、車椅子を勢いよく運転する。

「きゃ！？」

何かに車輪が取られたのか、車いすが転倒しはやては車椅子から放り出された。

「あ……！？」

なのはと俺は思わず駆け寄ろうとしたが、さっきリインフォースさんに言われたのでその場に留まった。

「ひっく……なんで……これから……やっと私が……これから、うんと幸せにしてあげなあかんのにー！」

「大丈夫です、私はもう世界で1番、幸福な魔導書ですから」

「……リインフォース」

すると、リインフォースさんははやてのそばまで歩み寄ると、屈ん

ではやてと目線を合わせた。

「主はやて、1つお願いが。私は消えて小さく無力な欠片へと変わります。もしよければ、私の名はその欠片ではなく貴女がいずれ手にするであろう新たな魔導の器に贈ってあげて頂けますか？ 祝福の風、リインフォース……私の魂はきつとその子に宿ります」

「……リイン……フォース」

「はい、我が主」

リインフォースさんは、はやての呼び掛けに優しく微笑みながら応えるとはやてに背を向けて、再び魔法陣に戻った。
そして魔法陣がさらに輝きを増した。

「主はやて、守護騎士達、それから小さな勇者達……ありがとう。
そして……さよなら」

「ッ……！」

そしてリインフォースさんの姿は、光の粒子となり消えていった。

「あ……」

上空から何か光る物が落ちて来て、はやてさんがそれを受け取った。

「う……」

こうして、闇の書事件は解決した。

第29話 真実を話す日

闇の書事件が解決した次の日。

「遅いわよ！ 真人！！」

「わ、悪い」

俺は終業式の後、なのはからずかの家に来るように言われたのだが、家に戻ったら待っていたのは両親の説教だった。

無断外泊が主な理由だった。

そのため約束の時間に遅れてしまったのだ。

約束の時間に遅れること数十分。

ちなみに、そこにはアリサやすずかはもちろんのこと、健司やはやととなのは、フェイトさんもいた。

「それで、なんでこんなに来るのが遅いのよ」

俺が座ったのを見計らってアリサが俺に聞いてきた。

「いや、昨日の無断外泊の事でみっちり絞られてたんだよ」

「それじゃ仕方ないわね」

理由を聞いてアリサ達から同情のまなざしが浴びせられた。

「と、ところで、なんで俺は呼ばれたんだ？」

「そうだった、大事な話ってなんなの？」

俺の問いかけに、アリサは思い出したようになるのは達に問いかけた。

「うん、昨日の事なんだけど」

「あのね、実は私達」

フェイトさんとなのはが話し始めたのは、二人が魔導師であること。そして二人の出会いだった。

「なるほど」

「魔法なんて漫画の世界だけだと思ってたわ」

話を聞き終えたすずかとアリサが感慨深そうに口にした。
俺としては、信じている二人の方がすごい。

「大体わかったんだけどさ、一ついい？」

「何かな？」

突然聞いてきたアリサに、小娘が質問を促す。

「真人はどうやってその……魔導師とかになったのよ？」

「えっと……それは」

アリサの鋭い質問に、俺は答えられなかった。

【執行人。話してもいいか？】

俺は念のために、執行人に念話で確認した。

【お前自身で決めろ。その者達が信用に足るものであれば、話すといい】

俺の問いかけに、執行人はそう言い放つと一方的に念話を切った。

「真人？」

「あ、ああ。すまない。実はな」

そして俺は、魔導師になった経緯を話した。

「何ともまあ、あんたもすごい体験してるわね」

呆れたようなまなざしで俺を見るアリサと、呆然としているすずかの姿があった。

「ヴィータが乱暴してごめんな後で叱つとくさかい、堪忍してや」
はやての目に投資が見えたような気がしたので、俺はあえて触れないようにした。
その後、軽く雑談をしてすずかの家を後にした。

「なあ、真人」
「何？健司」

家が同じ方向なため、一緒に帰っていると、健司が突然口を開いた。

「これからも、お前のそばで、魔法の勉強をして貰ってもいいか？」
「え、でもお前は」

健司は俺の”転生者だから大丈夫なんじゃ”と言う言葉を遮って健司は話を続けた。

「俺のはただのごり押しだ。でも、真人の方は違う。だから俺も一緒に魔法の事を勉強させてほしい」
「ようやくその気になったか少年よ」

健司が頭を下げると、どこからともなく執行人が姿を現した。

「最後に聞くぞ。僕の訓練はともつらいものだ。それでも最後までやりとおせるのだな？」

「ああ」

執行人の問いかけに、健司は執行人の目をまっすぐ見て頷いた。

「よろしい。では、少ししたらお前の方も魔法の稽古をつけてやる
う」

「ところで、だ」

俺は一つだけ気になっていることを聞くことにした。

「何だ？ 真人よ」

「なんで、俺達に見えてるんだ？」

俺の言葉の意味を理解したのか、執行人が答えた。

「お前の力が上がったことで、僕は姿を見せたりすることが出来る
ようになったんだ」

「なるほど」

「他にも単独での攻撃魔法の行使や、ユニゾンが出来るようになった」

執行人がさらに伝えてくるが、一つだけ気になった単語があった。

「ユニゾンってなんだ？」

「融合のようなものだ。融合することによって戦闘能力などを上げることが出来る。ただし失敗したらただでは済まないがな」

所謂もろ刃の剣と言うものか。

「やり方は？」

「体の一部分を合わせて”ユニゾン・イン”と唱えるだけでいい。
あとは行動権を持った方が体を動かす」

執行人は最後に、”まあ、そうそうやる機会はないだろうが”とつぶやいた。

俺としてはかなり残念だが。
そんな時だった。

「ッ！！？これは」

「結界！！？」

突然俺達の周囲に結界が展開されたのか、周囲の風景が変わった。
俺はこの感覚を知っている。

最初のころにヴィータと遭遇するきっかけになった閉じ込めの封鎖領域だ。

「見つけたぞ！」

「なッ！！？」

突然の声に、俺は上空を見上げると、そこには橙色のゴスロリ風の
バリアジャケットに身を包んだヴィータの姿だった。

「お前らの魔力、貰っていく！！！」

ヴィータはそう言ってツツコんでくる。

「無駄だ！！ 熾天覆う七つの円環！！」
ろー・あいあす

健司が前方に出て片手を前方に掲げ唱えた瞬間、目の前に七枚の花びらが現れヴィータのグラーファイゼンの攻撃を防ぐ。

「一体何のつもりだ！！」
「うつせえ！！ とつとと倒れる！！」

健司の言葉に、ヴィータは聞く耳を持たない。

「ああくそ！ 真人！！ 行くぞ！！」
「了解！！」

そして俺達の戦いは幕を開けたのであった。

第29話 真実を話す日（後書き）

突然襲ってきたヴィータ。
襲撃の理由とは？

第30話 降りかかる戦い（前書き）

と言うことで、闇の書の欠片事件スタートです。

第30話 降りかかる戦い

「ぶつち抜けえ!!!」

『Protection, extra!!』

「つぐう!!」

ヴィータの突撃に、俺はクリエイトの緊急結界で防ぐがとてつもない圧力に突き破られそうになるのを、必死に堪える。

「はああ!!!」

「あたるかよ!!!」

俺に気を取られている隙に、背後から健司が切りつけると言う作戦だったが、失敗したようだ。

「クソッ!!」

健司が地団駄を踏む。

もう作戦は数回も失敗しているのだ。
その数10回。

【次はどうする?】

【”あれ”をやってみてくれるか?】

健司の念話での問いかけに、俺はそう答えた。
すると、健司は顔をしかめた。

【あれは、命中率が低いが……それでもいいなら】

俺は健司の念話に無言で頷いた。

「それじゃ、手筈通りに」

俺は健司にそう告げると、一直線にヴィータの方へと向かった。

「せいや　――!!」

「同じ手に食うかよ!バーク」

俺の単調な一戦攻撃を躲すと挑発してきたが、乗らないようにする。何せ、このこれは本気でもなんでもないのだ。だから徴発されても全く気にもならない。

「そう言ってられんのも、今のうち」

俺ははそう告げると、クリエイトを弓形態にして、ヴィータに向けて構えた。

「行くぞ!!ファイアー!」

弓が数本に分裂して、ヴィータへと襲いかかる。

「ちい!!」

俺は矢をコントロールする。

そしてヴィータがすべての矢を躲し切った時だった。

「なっ!!?」

ヴィータの両手両足にバインドが展開されたのだ。

「かかったな」

「くそ！！これが目的かよ」

俺の表情に、ヴィータが気付いたのか、悔しげに唇をかみしめた。簡単に言うところだ。

俺の単調の攻撃で、ヴィータに油断をさせたところで、コントロール可能な矢を数本放ちこっそりと設置したトラップ型のバインドのある位置まで誘導する。

後は見ての通りだ。

「あ、ちなみにそのバインドは対物理、魔力タイプだから、魔法とか身体能力を強化しても無駄だ」

その点も抜かりはない。

だが、これが破られるのも時間の問題だ。

だからこそ、今のうちにやってしまうのだ。

「行くぞ！健司！！」

「おう！」

その手に弓を構えた健司が俺の合図に答えた。

「I am the bone of my sword」

「全てを薙ぎ払うは白銀の光」

俺と健司は必殺技を使う準備を進める。

「偽・螺旋剣！！」

「ディザスト・ブレイカー！！」

健司の必殺技と俺の必殺技は、一つの光の傍流となり果て、バインドで身動きの取れないヴィータを飲み込んだ。こうして、決着はついた。

「終わりだ。聞かせてもらっ、なぜ突然俺達を

健司がヴィーを問い詰めようとした時だった。

「うわああああああ！！！」
「ヴィータ！？」

突然断末魔の様な叫び声をあげたかと思うと、ヴィータはまるで砂のように消えて行った。

『……………』

何かなんなのが分からない俺達は、その場で呆然としていた。

【二人とも！！ 大丈夫！？】

そんな時、俺達が耳にしたのは、女性……エイミィさんの通信だった。

「あの、これって一体……」

【それは僕から説明しよう】

「クロノ!?」

俺の問いかけに突然聞こえてきたクロノ（本人曰くそう呼べとのこと）の声に、思わず驚いてしまった。

【実は、闇の書の残滓による結界が確認されている。どうも、蒐集されたもののデータをもとに現れているようだ】

「と言うことは、もしかしてあのヴィータも」

【ああ、偽物だ】

健司の仮定をクロノは肯定した。

【なのは達も対処に向かっているのだが。出来れば君たちも対処に向かって欲しい】

「了解だ（です）」

俺と健司は即答でクロノに答えた。

【悪い。今その近くで巨大な魔力反応を感知した。それと今なのは大きな魔力を持った人物と交戦中だ。出来ればそっちにも援護に行って貰いたい】

「分かった」

【頼んだ】

クロノはそう告げると、通信を切った。

「闇の残滓による偽物か」

「分かっているても、何だか複雑だ」

俺と健司はそう呟いていた。

いくら偽物だとわかっていても、自分の仲間を攻撃すると言つのは心が痛む。

「それにしても、二か所か」

「二手に分かれて行った方がいいな」

俺と健司はクロノから聞いた情報を整理した。

「俺はなのはの方に行くから、健司はこの近くにいる大きな魔力反応がある場所に向かって貰っていいか？」

俺はしばらく考えたのちに、健司に尋ねた。

それは健司の能力の高さを考えたものだった。

「分かった。しっかりとやれよ真人」

「そっちな」

俺と健司は互いに軽口をたたきながら、それぞれの場所へと向かっていく。

俺はなのはと交戦中の、大きな魔力反応がある場所へ、健司はこの近くにある大きな魔力反応があった場所へ。

こうして、事件は幕を開けた。

第31話 対面せしは殲滅者（前書き）

今回は真人方面です。

第31話 対面せしは殲滅者

「真人！」

「執行人！？ 一体どこに行つてたんだよ」

なのはの所へ向かっている途中で、俺は執行人と合流した。

「何、この世界には良いものがあるのだな」

「……………それを見ていたという事か」

俺はおそらく、呆れたようなまなざしをしていたと思う。
それを見た執行人は平然と言い返してきた。

「僕だって、たまには自分の時間が欲しくはなるし、色々なものに
興味が出るさ」

その時の執行人の表情は、どこか寂しげだったため俺は何も言えな
くなった。

「まあ、心配するな。話はクロノから聞いている」

「だ、だよな」

俺は執行人の手際の良さに苦笑いした。

そもそもここに来るには、この事態を知らなければいけないもんな。
そのことを忘れていた自分のことを恥ずかしく思った。

「さて、僕は何をすればいい？」

「……………大型の魔力反応の敵への牽制を」

俺は執行人の尋ねにそう答えた。

そうでもしないと、敵の攻撃を出ざまに食らう可能性があるからだ。

「了解。では、合図をしたら牽制攻撃をしよう」

そう言って執行人は透明化した。

俺の能力が少しずつ上昇したことによる恩恵らしい。

そして俺達はなのは元へと向かった。

なのはSide

私は今、私にそっくりな人、名前は確か星光の殲滅者さんと戦っています。

「ブラストファイアー!!」

「つく!？」

『Round shield』

星光の殲滅さんの砲撃をレイジングハートが守ってくれました。

(接近戦はまずい。回避しないと)

私は何とか距離を取ろうとします。

「ルベライト」

「しまっ

」

そう思った時には遅く、私は星光の殲滅者さんにバインドをかけられていました。

「ブラスト……」

（ッ！！！！）

私はもうだめだと思い、目を閉じました。

「ファイア！！」

砲撃が放たれた時でした。

『Protection, Extra!!』

「え？」

突然のデバイスの声に、私は閉じていた眼を開けました。そこにいたのは、黒いバリアジャケットを着ている真人君の姿でした。

Side out

（いた！！）

しばらく飛んでいると、俺はなのはの姿を見つけた。

だが、なのはの体には紫色の輪のようなもの（おそらくバインドと言う拘束魔法だろう）で体を拘束されていた。

「ブラスト……」

そしてなのはの向かい側には、栗色の髪を短く切り揃え、黒っぽいバリアジャケットを着ている少女がいた。その少女は砲撃魔法を放とうとしていた。

【執行人、お願い！】

【了解した。3秒後に牽制を行う】

俺は執行人に合図を出し拘束でなのはの前まで移動する。

『Protection, Extra!!』

そしてクリエイトによって防御魔法が展開され、少女の砲撃を防いだ。

「ほんのお返しだ!!」

「ツク!!」

そして少し遅れての執行人のけん制魔法で、目の前の少女との距離が少しだけ開いた。

「なのは、大丈夫？」

「う、うん。私は大丈夫」

俺は背後にいるなのはに声をかけた。

「助けてくれて、ありがとう」

「いや、大丈夫だ。こっちこそ、来るのが遅れて悪かった」

お礼を言ってきたのはに、俺はそう返すと少女の方へと視線を戻した。

「私の砲撃を防ぐとは……あなたは何者ですか？」

「俺は山田真人。執行人に選ばれし魔導師だ」

少女の問いかけに、俺は執行人に前から名乗る時にはこう言えと教わっていた名乗りを上げた。

「なるほど。私は”理を”司るマテリアル。星光の殲滅者と申します」

少女 星光の殲滅者 はそう名乗った。

「この結界はお前が作ったものか？ お前の目的は？」

「そんなにたくさん聞かれても私には答えようがありません」

俺の問いかけに、星光の殲滅者は目を閉じて静かに答えた。

「そうか」

「どうしても聞きたいのであれば」

そう言いながら星光の殲滅者は、なのはのデバイスとそっくりなデバイスを俺に向けてきた。

俺は、それに無言で弓状のクリエイトを掲げる。

「私を倒してみてください」

「分かった（なのは、戦える？）」「

【うん！ もちろんなの！】

俺は念話でなのはに確認した。

はつきり言って格の違う相手だと言うことは、すぐに分かった。なので俺はなのはと協力して戦うという手法に打って出たのだ。

「それでは、あなたの力。私の糧とさせていただきます！」

そして、俺と星光の殲滅者との戦いが始まった。

第31話 対面せしは殲滅者（後書き）

次回は健司視点でお送りしたいと思います。

第32話 対面せしは襲撃者（前書き）

今回は健司Sideでお送りします。

何度も言いますが、私はアンチ転生者です。

第32話 対面せしは襲撃者

俺こと永田健司は、近くにある大きな魔力反応の場所へと向かっていた。

（一体なんなんだ？）

一応アニメとかでは見たが、このような事件などなかったはずだ。これがあの人の言うイレギュラーなのだろうか？

（今考えることではないか）

俺はすぐに思考を切り替えた。

俺の両手にあるのは干将・莫耶と言う二本の剣だ。

これが、俺にとっての唯一の武器。

てつきりチート能力でも与えられるとでも思ったのだが、予想より弱そうな能力だったので俺は思わず耳を疑った。

神様曰く、「これが最強なんじゃ」とのことだった。

だが、俺は原作介入し始めてようやく気付いた。

俺自身が、この武装の力を引き出し切れてないのだ。

それもそのはずだ。

ごく普通の一般大学生の俺が、命をかけた戦いなどで力を発揮できるはずなんてないのだ。

これでは、宝の持ち腐れだ。

よく二次創作で見かけるような最強な力をもらった〃それを100%利用すると言う図式はありえないと知ったのだ。

あれはあくまでも作者の理想郷である、と。

そんなこんなで、俺の理想郷は執行人と真人によって、木っ端みじんに砕かれ今に至るわけだが。

（まだまだ俺は弱い。だが、少しでも強くなって俺は俺の目的を果たすんだ！）

俺がここに来た目的は、ズバリハーレム化計画だ。

年齢「彼女いない歴の俺にとってはかなりの夢でもある。

だから、そのためであれば、俺はどのような過酷な場所であっても乗り越えてみせる。

まあこれも真人と執行人で実現不可能になりかけている。

「ようやく見つけた」

「ん？」

そんな時、俺の目の前に一人の少女が躍り出た。

その少女はどこかとフェイトの姿に似ていた。

ただ髪の毛の色が青だと言うのは違うところだが。

「お前は誰だ？」

「僕は”力”を司るマテリアル、雷刃の襲撃者だ！」

最後にどうだかっこいいだろと言って胸を張る。

この時、俺は確信した。

「お前、馬鹿？」

「な！？ 馬鹿っていう方が馬鹿なんだぞ！！」

どうやら口に出ていたようだが、答え方まで子供っぽかった。

「お前の目的は一体なんだ？」

「僕の目的は、闇の闇を集めて、王として君臨することさ！！」

雷刃の襲撃者は、あっさりと目的を覚えてくれた。
どうやら彼女は、闇の書関連の人物らしい。

「だから、君を倒して僕は飛ぶ！！」

雷刃の襲撃者は、物騒な事を言つて、こっちに飛びかかってくる。
しかし、俺はそれを難なく躲す。

スピードは確かに速かったが、オリジナルに比べれば動きが単調で読みやすかった。

（どうやら、俺は当たりくじを引いたようだな）

俺は心の中でそうほくそ笑みながら呟くと、目の前にいる少女へと
干将・莫耶を構える。

「さあ、行くぞ！！」

「望むところだ！！」

そして俺と雷刃の襲撃者との戦いが幕を開けた。

戦いに関しては初心者の俺が、勝てるのだろうか。

そう言った不安はあるが、それでも俺は戦う。

前にいる敵を倒せると信じて。

第32話 対面せしは襲撃者（後書き）

短いですが、楽しんで頂けると幸いです。

第33話 二人の戦い（前書き）

今回はなのは・真人VS星光の殲滅者戦です。

第33話 二人の戦い

「ブラストファイアー！」

「っちい！！」

俺は星光の殲滅者の砲撃を紙一重で交わした。

「デイベインバスター！」

そしてその直後になのがデイベインバスターを星光の殲滅者に向けて放つ。

しかし、それを彼女は何ならく躲した。

「そこだ！ アルティメットフレア！」

俺は躲した瞬間を狙い火球を星光の殲滅者に向けて放った。
かなりいいタイミングだ。

これなら

「甘いです」

「ツク！！」

彼女はそれさえも防ぐと、攻撃に打って出た。

「パイロシューター！」

一気に放たれたそれは誘導弾かは分からないが、俺は回避行動をとった。

「ファイア！」

執行人は魔法弾を放って誘導弾を相殺している。

（これはまずいな）

さつきから戦っていてわかったが、彼女は中遠距離型だ。

そして、俺は近中距離型だ。

なんとかクロスレンジに持ち込みたいのだが、さつきからこの調子でなかなかうまくはいかない。

（となると、使えるのはやっぱり）

俺はそう考えると杖状のクリエイトを弓型に戻した。

俺が選んだのは、得意の弓を使った攻撃だ。

【なのは、ちょっと頼みたいことがあるんだけどできるか？】

【ふえ！？ な、何かな？】

俺はなのはに念話で確認すると、俺が考えている作戦を伝えた。

【それだったらたぶん行けると思う！】

【よし、それじゃあこれで行こう。執行人も大丈夫か？】

【ああ、こつちも大丈夫だ。だが、お前は大丈夫なのか？ あの魔法はお前にも負担が大きいはずだが】

俺は内心で執行人は勘が鋭いと思う。

なぜなら、あの魔法の特性を彼はずばりと見過ごしているのだから。

【やってやるさ。ここでやらなきゃいつやるんだ？】

【そうか。愚問だったな。僕はいつも通りに動かせてもらっ。あとはお前のやり口次第だ】

俺の言葉に執行人はフツと笑いながら答える。

そして俺は一旦深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

チャンスは一回きり。

これを逃したら勝機は俺達にはない。

「作戦会議は終わりですか？」

「ああ。ここからは本気で行かせてもらっ！！」

俺は弓を構えてそう告げた。

「そうですか。では、私も本気で行かせていただきます」

星光の殲滅者はそう告げるや否や上空に飛翔した。

そして大きな魔方阵を展開する。

【なのは、あれって必殺技か？】

【た、たぶん……】

俺はその答えを聞いて息をのんだ。

この時を待っていたのだ。

俺の作戦は主にこうだ。

まず相手が必殺級の大技を使うようにする。

そして相手が大技を使ったら俺の新技、『ミラーインケルト』でその攻撃を跳ね返す。

さらに止めとばかりになのはの必殺技を放つと言う寸法だ。

ただ、この技は相手の魔法を受け止めないといけないので、かなりの負担がかかる。

執行人はそのことを言っていたのだ。

だが、ここでミスをする、勝機はないのだからやるしかない。

「集え赤星、全てを焼き消す焰となれ。ルシュフェリオン、ブレイカ　！！！」

星光の殲滅者から紫色の収束砲が放たれた。

（おいおい、何と言う破壊力だよ）

俺はそう思いながら、詠唱を始めた。

「全ては逆。上は下に右は左へ。全てを逆にしまえ……ミラーインケルト！！」

詠唱を終えると、俺の前方には銀色の魔法陣が浮かび上がっていた。それを見る暇もなく、星光の殲滅者の収束砲が俺の魔法陣と接触した。

「ぐう！！」

俺は想像以上の圧力に、苦痛の声を上げてしまった。

だが、これは本当につらい。

少しでも気を抜いたら体が押しつぶされる。

「うおおおおおおお！！！！」

それを俺は必死に堪え、魔方陣に魔力をつぎ込む。

すると今までかかっていた圧力が、少しずつではあるが少なくなっていた。

「うおおおりゃあああ!!!」

そして俺はそれを押し返すことに成功した。

「なッ!!!?」

あまりの事に相手は驚きの声を上げた。
まさか自分の収束砲が帰ってくるとは、思ってもいなかったのだろ
う。

「ッく!!!」

しかしさすがは星光の殲滅者と言う名だけはある。

完璧を模した俺の反射攻撃は、紙一重で交わされてしまった。
だが、これはあくまでも陽動に過ぎない。

そう、本命は……

「これが私の全力全壊!!! スターライト……」

『st a r l i g h t B r e a k e r』

「ブレイカ !!!!!」

なのはの必殺技が炸裂し、星光の殲滅者をピンク色の光が飲み込
んだ。

こうして、星光の殲滅者との戦いは幕を閉じた。

（な、何と言う人間兵器だ? これは）

そんな俺の心の声とともに。

第33話 二人の戦い（後書き）

皆様の感想やアドバイスをお待ちしております。

第34話 天然との戦い（前書き）

今回は少々短めですが、検事VS雷刃の襲撃者戦です。

第34話 天然との戦い

「電刃衝！」

「よつと！」

俺に向かって飛んでくる金色の魔法弾を躲す。

（っちい！！ やっぱ早い）

俺はその速さに舌打ちを打っていた。
さすがは元がフェイトなだけはある。

「光翼斬！」

「甘い！！！」

俺はこっちに向かってくる金色のリング状の円盤を横に回避する。
しかし、それは俺を追尾してきた。

「ちいっ！ 追尾型かよ」

俺は文句を口にするが、それだけでは何も変わらないため俺は回避行動をとりながら反転すると、干将・莫耶を振りかざし、魔力刃で相殺する。

「天破・雷神槌」

「うわ！？」

突然出てきた金色のバインドを俺は慌てて回避する。

「電刃衝！ 光翼斬！」

その隙に魔法弾と追尾型のリング攻撃が俺を襲う。

（あれは避けて、追尾型は……ひきつけて相殺！）

俺は一気に方針を立てるとすぐさま実行した。

魔法弾を少ない動きで避け、リング状の攻撃を干将・莫耶の魔力で相殺する。

（手札が少ないな）

俺は心の中で、そう考えていた。

俺の戦法はどちらかと言えば近接戦だ。

何せ両手の剣と投影する弓が武器なわけだ。

しかも弓の攻撃のほとんどは、かなりのすきを生むため、今の俺ではあまり多用できない。

（後で真人たちに教えてもらおう）

俺はそう結論を出した。

だが、それがまずかった。

「天破・雷神槌！」

「ぐうううっ！！」

俺は金色のバインドに縛られ、さらに電流の攻撃を食らってしまった。

「碎け散れ！」

「ちいッ！」

見れば相手は必殺技を繰り出そうとしている。
止めたいのは山々だが、先ほどの攻撃のしびれが残って回避行動が
とれない。

「雷神滅殺極光斬——！」

金色の大きな太刀……おそらくはザンバーフォームのようなもので
あろう。

それがこっちに向かって振り下ろされた。

「防いで。熾天覆う七つの円環！」
ロー・アイアス

俺のとつさに展開した宝具により、なんとか攻撃を防ぐことはでき
た。

まあ、7枚中3枚は破けたが。
さて、ここから巻き返しだ！

「鶴翼、欠落ヲ不ラス（しんぎ　むけつにしてばんじゃく）」
「くううう——！」

俺は一気に雷刃の襲撃者に近づくと、干将・莫耶で切り刻む。

「これでとどめ！　壊れた幻想！」
フローケン・ファンタズム
「なッ！？　そんな馬鹿な——！」

俺の攻撃が命中して、なんとか雷刃の襲撃者との戦いを終えた。
俺自身の課題を白日の下に晒した状態で。

第34話 天然との戦い（後書き）

次回は、再び真人Sideになります。

皆様のご感想・アドバイスをお待ちしております。

第35話 目的（前書き）

やや遅れましたが、第35話です。

第35話 目的

「負けた……のですね」

星光の殲滅者が静かに呟いた。

「それじゃ、聞かせてくれるか？ この結界の目的を」
「良いでしょう」

俺の言葉に、星光の殲滅者はそう頷くと、目的を語りだした。

「私の目的は、『砕けえぬ闇』の復活です」
「砕けえぬ闇？」

星光の殲滅者の言う『砕けえぬ闇』の意味がよく分からなかった。
ただ、あまりいいものではない事だけはよく分かった。

「ええ、残念ですが『砕けえぬ闇』の復活は、他の構築体マテリアルに任せましょう」

「何！？」

俺は思わず声を上げてしまった。

彼女の言葉を信じるのであれば、まだまだマテリアルがいることになる。

そんな時、まるでテレビのノイズのような音がしたかと思うと、星光の殲滅者は粒子となって消えようとしていた。

「お、おい！ マテリアルはほかに何人いるんだ！！」

「……また見えることがありましたら、次は私が勝たせていただきます」

「

星光の殲滅者はそう言い残し、消えて行った。

「まずいな、こりゃ」

俺は静かに呟く。

星光の殲滅者の言う『砕けえぬ闇』が何を指すのかが分からず、さらにはマテリアルの人数も不明とまで来た。

これでは、満足に戦う事も出来ない。

まだ俺達はスタートラインにも立ってないのだ。

そんな、状況が俺をさらに苛立たせる。

「真人君、落ち着こう?」

「……………そうだな」

なのはの提案に、俺は頭を冷やすべく頷いた。

「執行人はどう思う?」

「そこで僕に振るのかい……………そうだな」

執行人は顎に手を当てて考え込む。

「僕からは何とも言えんな。判断するには情報が少なすぎる」

執行人から返ってきたのはそんな答えだった。

『真人、聞こえるか!』

そんな中、健司から通信が入った。

「ああ、聞こえてる。そっちの方は大丈夫か？」

『こっちは楽勝だった。それより、奴らの目的分かったぞ』

健司の言葉に、俺は思わず息をのんだ。

「それは本当なのか!？」

『ああ、奴らの目的は、闇の書の闇を復活させることだ!』

そして、健司の口から、目的が語られた。

健司 Side

「さて、お前の目的は何だ？」

「僕のもいく敵は、お前たちが勝つてに破壊した、闇の書の呪いを集めて、この身の内に決して碎けぬ闇の書の闇を再びよみがえらせ、決して碎けぬ力を手に入れ、真の王となるためにつつ!!」

雷刃の襲撃者から、目的が語られた。

「このあたりに出来ている結界。これもお前の仕業か」

「僕だけじゃない。他にもいる。魔導師や守護騎士達の思いや妄執を形になって君達を襲う!!」

(つまり、関係者の記憶をもとに形成された偽物と言うことか)

雷刃の襲撃者の言葉をまとめて、俺はそう解釈した。

「いー！？　なんてこった、ここまでか！？」

突然雷刃の襲撃者が驚いた様な表情を浮かべながら言った。

「え、ええと……や、闇は何度でも蘇るぞ！　僕も王への道を諦めたわけじゃない！」

驚いたかと言えば、まるで悪役が逃げるようなセリフを言う雷刃の襲撃者。

「いずれ、またきつと！　それから、えーと、えーと……あー！？」

それを言い残して雷刃の襲撃者は、まるでガラスのように消えて行った。

「……………」

そのあまりにも突然の光景に、俺は固まった。

「やつぱりあいつは馬鹿だ」

俺はそう決断しながら、真人に通信をつなげた。

「真人、聞こえるか！」

『ああ、聞こえてる。そっちの方は大丈夫か？』

俺の言葉に、返事が来たので、俺は一安心した。

「こっちは楽勝だった。それより、奴らの目的分かったぞ」
『それは本当なのか！？』

俺の言葉に、真人が食いついてきた。

やはり向こうは情報を得られなかったようだ。

「ああ、奴らの目的は、闇の書の闇を復活させることだ！」

そして俺は、真人に今まで聞いたことをまとめて話した。

S i d e o u t

「つまりは、闇の書の防衛プログラムのかけらが、闇の書を復活させようとして起こした事件と言うわけか？」

『そのようだ』

俺の言葉に、健司が頷くように答えた。

「だが、防衛プログラムは、俺達が完膚なきまでに消滅させたはずだから、こんなことになるはずはないんだけど」

『確かに』

「それについては、僕が答えよう」

俺と健司が疑問に頭を抱えていると、突然執行人が話し出した。

「これはあくまで憶測の域を出ない。それでもいいのなら……だけ
ど」

「もちろんだ。話してくれ」

『俺からも』

俺と健司の言葉に、執行人はしばらく目を閉じると、静かに語り始めた。

「真人のあの特技、プリマテリアライズ（原初物質化）・オーバー
ドライブ（暴走）は確かに、全てを消滅させた。だが、それまでに
防衛プログラムの因子がばらまかれてないと断定することはできな
い。おそらくその因子が集合したために、このようなことが起こっ
ているのであろう」

「なるほど……それなら確かにありえそうだ」

俺と健司は執行人の推測に賛同した。

「あの～できれば私にも、分かりやすく説明してほしいな」

『「あー」』

俺はなのはがいるのを忘れて話し込んでしまっていたようだ。

「つまりだな」

「

こうして俺達は、一からわかりやすく説明することになった。

「なるほど」

「さて、これからどうするかだけど」

「

俺がそう呟いた時だった。

『健司君、真人君！ それぞれのいる場所の近くに、巨大な魔力反応があるが！』

「『ッ！！？』」

俺と健司は思わず固まった。

「エイミィさん、俺が対処します」

『俺もです！』

俺の言葉に続くように、健司もエイミィさんに告げた。

しかし、健司はさっきから通信の回線を、つなげたままなことに気付いているのだろうか？

『分かった。二人ともお願い。それぞれかなり大きな魔力を持っているの。気を付けてね！』

『「了解！」』

俺と健司は同時に答えて、ついでにつながっていた通信も遮断した。

「真人君、私も」

「大丈夫だ。なのはは小さな結界の方を叩いてほしい」

なのはの、一緒に行くと言う言葉を遮って、俺はそう指示を出した。今この場で俺のすべきことなのはのすべきことは、既に決まっていた。

「うん、わかった。気を付けてね」

「それじゃなのは、行ってくる」

そして、俺は大きな魔力反応の場所へと進むのであった。

第35話 目的（後書き）

彼女たちの目的って、このような物であってますよね？
間違ってたら教えてください。

第36話 闇統べる王現る（前書き）

いよいよやってきました闇統べる王。
今回は、戦いが始まるまでです。

第36話 闇統べる王現る

しばらく進むと、結界のようなものを感じた。

「この魔力反応……どこかにいるな」
「上だ!!」

執行人の声に、俺は上空を見上げた。

そこにいたのは、はやての姿をした”マテリアル”だった。
いや、髪の色が銀色なのが本物との違いだ。^{はやて}

「ふふ……あはははッ!! 力が……魔導が漲る」

ちなみに言葉づかいもだが。

「集え、闇の欠片よ。我が身に捧げる贅となれ!」^{にえ}

離れていても感じるほどの膨大な魔力量。

それは、目の前にいる人物が強敵であることを告げていた。

「……まずいな」

それを見ていた執行人が舌打ちをしながら呟く。

「真人、ここは引き返し応援を呼ぶぞ」
「なんでだよ!」

俺は執行人の退却の指示に反発した。

「見てわからないか？ こいつはお前一人が倒せる相手ではない！
ここは一旦逃げて応援を呼ぶべきだ」

確かに執行人のいう事は正しい。
勝てる見込みがない敵だ。
だが！！

「だけど！ 俺だって男だ。だから戦う…………俺は今まで色々な困難を乗り越えた、それを俺は無駄にはしたくないんだ。それに強敵だからって逃げたら男が廃るしね」

「真人…………」

それは俺の決意だった。

俺が今まで遭遇したピンチや、戦いはすべて無意味なものではなかった。

それを証明したいのだ。

「と、ここで逃げたら執行人のマスターとして失格だし！」

最後にそう付け加えた。

そんな俺の言葉を聞いていた執行人はフツと笑った。

「たく、お前は本当に最高の奴だ。今まで秘密にしていた究極の方法がある」

「それを使えば、あいつに勝てるのか？」

俺の問いかけに、執行人は”おそらくだがな”と呟きながら頷いた。

「何なんだ？ その方法って」

「ユニゾンだ」

「ユニゾンって、あの融合機と合体するみたいなやつか？」

俺の言葉に、執行人は苦笑いを浮かべながら頷く。

「詳しい説明は省くが、これを使えば、真人の能力に俺の能力が追加されて、異論上では勝てる可能性がある」

「だったらそれで」

俺の言葉を執行人が遮った。

「しかし、その分だけリスクがある。もしこの融合が失敗すれば、お前は僕と共に死ぬことになる。それでもやると言うのか？」

執行人の”死ぬ”と言う言葉を聞いたら、昔の俺であればすぐにやめていただろう。

しかし、今の俺は違う。

「ああ、俺は昔の俺ではない。それに俺は執行人を信じている。だって、俺をここまで導いてくれたんだ。失敗なんてものはないよ」
「……………では、やり方を説明しよう。まずは片手を前に出して」

執行人に言われた通りに、左手を前に突き出すように掲げた。

「その手に僕の手を重ねる」

「……………その次は？」

俺は執行人の手を初めて握って感じた。

とてつもなく冷たい。

それはまるで氷点下の冷血な人物のような印象を持った。

「一斉にこう言うんだ。」ユニゾン・イン」と
「分かった」

俺はそこまで言うと、一旦深呼吸をした。

「では、行くぞ。準備は良いな、マスター？」
「ッ！？」 ああ、大丈夫だ」

俺は執行人が初めてマスターと呼んでくれたことに、嬉しさがこみ上げた。

なぜなら、今まで俺を呼ぶときは名前だったからだ。
それだけ、俺は執行人に認められたという事だろう。

「それでは、行くぞ」
「「ユニゾン・イン！」」

そして、俺と執行人はユニゾンした。

「どうだ？ 不具合とかは出てないか？」
「ああ、それどころか力が漲ってくる」

ユニゾンした俺は、その感覚に酔いしれていた。

体の中から温められているような感じがして、両手両足には力が漲ってくる。

さらには、体が馴染んでいるのだ。
その体は、俺を動かそうとする。

おそらく、執行人の経験値が反映されているのだろう。
とにかく快適だった。

「融合率、95%を超えたか……なるほど、彼こそこの僕にふさ

わしいマスターであつたのか」

俺の頭に、執行人の声が響いて聞こえた。

「さあ、行こう！　すべての戦いを終わらせるために」
「了解だ、我が主」

そして俺は……いや、俺達は強敵の前に躍り出た。

「珍しい贄が迷いこんだものだ」
「軽口を叩けるのもそこまでだ！」
『貴様は、ここで消える運命だ』

目の前にいる少女に、俺と執行人は挑発する。

「ふん、穢れた器と塵芥に何が出来よう？」
「出来るではなく、やるんだよ。そんな事も分からないのか？　馬鹿者」

俺は少女にそう言い返してやった。
すると、俺の言葉を聞いて怒り心頭に言い返してきた。

「貴様、我が王たる力を持つ、”闇統べる王”を馬鹿呼ばわりするとは……覚悟はできておるのだろうな？」

『それはこっちのセリフだ。お前は言っではならぬことを口にした。その言葉を、僕らの力の前で後悔させてくれる！』

闇統べる王に、執行人が言い放つ。

と言うより、かなり怒りが含まれている。

「なんとも言うがよい。我は貴様らを倒し、それを糧に心地よい暗黒で永遠に生きるのだ！」

闇統べる王の目的は、おそらくこの世界を闇で覆い尽くすことだ。

「そんなことは、この俺達がさせない」

『さあ、行こう我がマスターよ』

そして、俺と執行人の決戦が始まった。

第36話 闇統べる王現る（後書き）

次回は、健司Sideでいきたいと思います。

第37話 闇の書の意志（前書き）

大変お待たせしました。
第37話になります。

第37話 闇の書の意志

健司Side

俺は、近くで感知された巨大な魔力がある場所に向かっていた。

「ここが一番魔力の高い場所か」

俺は周りを見回してみたが、そこには何もいなかった。

「……………一体どこにいるんだ？」

俺はエイミィさん達の勘違いかと思い始めた時だった。

「ッ！！？」

周囲の雰囲気が変わるのを、俺は肌身で感じた。
どうやら魔力反応の主が現れたようだった。

そう思い俺は、気配のする場所に視線を移した。
そこにいたのは……

「お、お前は ッ！？」

黒い羽根を生やした、リインフォース……いや、闇の書の意志であった。

「我は再び呼び起されてしまった」

そんな闇の書の意志は、俺に気付くことなく言葉を続けた。

「我を呼び起こしたのは、お前か？」
「え?!」

突然声をかけられ、俺が口に出来たのはそんな言葉だった。

「お前が我を呼び起こしたのか？」
「分からない」

再度問いかけられた俺は、そう答えた。

「そうか……我は闇の書、だが我を織りなす部品がまるで足りない
………防衛システムや転生能力も」
「それは、すべてが壊されたからだ」

俺は闇の書の意志にそう告げた。

「そしてそれを望んだのはほかでもない、あなた自身だ」
「我が望んだ？ それはありえない、我はただ破壊するだけの魔導書だ」

俺の言葉に闇の書の意志が悲しげな表情を浮かべて呟いた。

「違う!! お前は破壊をするだけの魔導書ではない! 今の主が、無限の悲しみを終わらせたんだ!!」
「そんなことはありえない。我らを労わってくれる主などいるはずがない」

俺の言葉を否定する闇の書の意志。

(やっぱり話し合いでは無理か)

俺は内心でそう思っていた。

そして少し前の事を思い出した。

それは執行人と俺と真人とのやり取りだった。

『お前に出来る事?』

『ああ、そうだ。俺には何か出来る事はあのかなって……………』

俺の言葉に、執行人はすかさず答えた。

『ない』

『…………それは、なぜです?』

俺は執行人に尋ねた。

『お前の力は空っぽだ。味も何もないな』

『そ、それはちょっと言い過ぎなような気が』

執行人の言葉に、真人が軽くフォローを入れた。

『言い過ぎでもない。お前のその力には何の意味がある？ お前は
何が為にその剣を振るう？』

『……………』

『それに答えられないようでは、ここにすることもできないだろう』

執行人の言葉は、的を得ていた。

だから、その時俺は満足に反論も出来なかった。

だが、今は答えることが出来る。

「お前の悲しい物語は、この俺の手で終わらせる！！」

だから、俺は戦う。

俺が、この力を振るう目的を確実にするために。

第37話 闇の書の意志（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回は真人Sideになります。

それでは、次回でお会いしましょう。

第38話 最後の戦い（前書き）

本日現在でPVが7万アクセスを超えていました。
こんな駄作を読んで頂きありがとうございます。
そんな感謝のもと、第38話になります。

第38話 最後の戦い

「ドゥームプリンガー」

「っふー!!」

しょっぱなに放たれた魔法弾を、俺は横にずれることで回避する。

「ブレイク・イヤー!」

「甘い!」

回避した際に放った矢を、閻統べる王が回避する。
しかし、それは予想済みだ。

「ライトフレイヤー!」

「だから甘いと ツ!?」

俺が放った矢を再び避けるが、今度はそうはいかない。

「追尾型が、姑息な」

閻統べる王は苦虫を潰したような表情をしながら、俺の矢を払っていく。

「ツ!? どこに行きよった!」

全ての矢を払い終えた閻統べる王が、俺を探している。

「喰らえ! 一刀連舞!」

「ツぐ!」

俺が剣を振り下ろすと、それに続いていくつもの剣撃が閻統べる王を襲う。

一回の攻撃で複数回攻撃を加えることが出来る攻撃方法だ。これも俺と執行人によって生み出した魔法だ。

「調子に乗るな！ エルシニアダガ！」

「うわッ！？」

突然扇形に針のようなものが放たれ、俺は必死に回避する。

「お返した」

「ぐうッ！！」

今度は扇形ではなく、一直線にこっちに集結する。それを避けきれずに数本刺さってしまった。

「よくも」

「

俺はここから挽回しようと、叫ぼうとしたがそれは目の前の光景でできなかった。

そこにあつたのは、ただただ大きい魔力の塊だった。

魔法陣からそれは形成されていて、まともに喰らってはただでは済まないとすぐに分かった。

「絶望に足掻け塵芥」

閻統べる王がそう呟き、手に持っている杖のようなものをこっちに向けてきた。

（間に合うか！？）

俺はそれを見て慌ててシールプロテクションを展開しようとする。
だが、それもむなしく……

「エクスカリバー！！」

闇統べる王の一声で膨大な魔力が牙をむき、俺の方に収束砲として迫ってくる。

そして俺は収束魔法に飲み込まれた。

「はぁ……はぁ」

「む？」

俺は何とかギリギリのところまでシールプロテクションを展開し、防ぐことが出来た。

「我が渾身の一撃を耐えただと？！」

闇統べる王は驚いたように叫んでいるが、俺にはそれに答える余裕はなかった。

『融合率40%まで低下。この分だと必殺技一発分になりそうだな』

執行人の言葉が頭に響く。

さっきの攻撃を防いだ際に受けたダメージが、今でも影響を与えているのだ。

「だが、その様子では我に勝てまい……今許しを請うのであれば許してやらんでもないぞ」

「誰が、お前に許しを請うか！！ 拘束！」

俺は闇統べる王に言い返ししながら、バインドを仕掛けた。

「こんなものッ！！」

「無駄だ。この世に存在せし数多の闇よ、我に集え」

バインドを破壊しようともがく彼女をよそに、俺達は詠唱を続ける。

『その闇はこの世にあるものを破壊せし剣となれ』

「今こそ、解き放たれよ白銀の光」

俺達の詠唱に呼応して白銀の魔法球と、漆黒の魔法球が形成された。

『ダークジャッジメント！』

「ライトジャッジメント！」

それはお互いに対する魔法であった。

それが一気に闇統べる王に向かって放たれる

そして闇統べる王は二色の混ざり合った収束砲に飲み込まれた。

バインドで拘束されていたため、どうあがいても無傷ではいられないはずだ。

つまりそれは、俺達の勝利と言う結果を示していた。

こうして、俺達の戦いは幕を閉じたのであった。

第38話 最後の戦い（後書き）

今回は真人Sideの話でした。
次回は健司Sideになります。

それでは、これにて失礼します。

第39話 始まりの戦い（前書き）

健司Sideです。

果たして彼は闇の書の意志に勝つことができるんでしょうか？

第39話 始まりの戦い

俺は闇の書の意志に苦戦していた。

「つくー!!」

原因は、放たれる赤い槍のような攻撃……『ブラッディダガー』によるものだ。

これはとにかく早い。

回避するだけでも精一杯だ。

時々同時に5、6個の槍が扇形に放たれたりもするので、かなり苦しい。

「ブラッディダガー」

「そこだ!!」

俺はブラッディダガーを放った際に出来る一瞬のすきを狙い、一気に闇の書の意志へと迫る。

だが……

「ナイトメア」

「ッー!!」

突如として放たれた漆黒の砲撃に、俺はとっさに体をひねる。

それが幸いしたのか、若干かすった程度でダメージを受けずに済んだ。

「ブラッディダガー」

「ちい!!」

再び放たれる赤い槍に、俺は距離を取るしかなかった。

（強い力を持つても、これじゃ全く駄目だ）

俺は現実を思い知った。

だが、それを知ったところで何も変わらない。
なんとしてでも勝たなければいけないのだ。
友人の期待を裏切らないために。
そして自分自身の為に。

（もしかして）

その時、俺は気付いた。

真人^{あいつ}にはあつて、俺にはない物を。

それは、俺の力に対する覚悟だったんだ。
今までは、ただがむしゃらに力を使っていた。
転生したから、チートな能力を手にしたから。
でも、それだけでは駄目だったんだ。

「これが使えれば……」

俺がポケットから取り出したのは、バンドのようなもの。

ここに来る前に神から「中身を取り戻したら使え」と言われて渡されたものだ。

最初は意味が分からなかったが、もしかしたらこれで行けるはずだ。
しかし、それを使う前にやるべきことがあった。

（あいつの攻撃を受けても大丈夫な風にしないと）

おそろくだが、これを使っている間は無防備になる。
さっきの収束砲を当てられたら後が無くなる。

「熾天覆う七つの円環！」
ロー・ファイアス

よって俺は、前に宝具を展開した。

これで、少しはしのげるはずだ。

そして俺はバンドに手をのせて、動けと念じる。

『汝は、その力に何を求める？』

「俺は友人を、そして自分自身を守ることを求める」

突然発せられた声に、俺はゆっくりと覚悟を口にする。

『汝は、強敵と戦う時逃げぬと誓えるか？』

「この剣にかけて誓う」

『汝が望むことは何だ？』

「俺が望むのは、人に認められること。そしていずれか来る強敵との戦いで共に戦うものの足を、引っ張らないようにすることだ」

俺は自分でも驚いていた。

今までの俺なら絶対に言おうとしない言葉を、俺は口にしていた。
だが、横目で見ると、七枚中三枚が砕かれていた。
まだ平気だが、早いに越したことはない。

『合格だ。我は汝をマスターと認め、汝と共に戦うことを誓おう』

その瞬間、光が走ったかと思うと、そこにあったのは銀色の杖がだった。

『わが名はヴェントス。準備はできている』

「了解。それじゃ行くぞ!!」

『フラインド・レイ』

ヴェントスの自動詠唱によって、俺は一気に飛翔した。

（やっぱり動きが違う）

今までの速度よりも格段に早くなっていた。

若干ではあるが、俺の方が追い付いていない。

「攻撃手段はあるか？」

『これくらいが今のマスターでは最適だ』

そう言っただけの俺の頭の中に情報が流れ込んでくる。

相手を巧みにトレースするシューティング・レイ。

相手へ一直線に砲撃を放つ、ブレイク・レーザー。

この二つのみだった。

おそらく、今の俺のレベルが低いためだろう。

（このデバイスについては後であいつらに聞いてみよう）

俺はそう考え、高速で飛び続ける。

「シューティング・レイ！」

そして俺は三発の誘導弾を放った。

相手は、それをよけようとするが、誘導弾は闇の書の意志を追尾する。

「ナイトメア」

それを収束砲で相殺する。
だが、こっちは次の手があった。

「ブレイク・レーザー！」

ヴェントスからけたたましい収束砲が放たれる。
ものすごく消費魔力が高いが、魔力量で言えばチートレベルなので、
問題はない。

(ここで一気に決めよう)

俺はそう考え、必殺技を使うことにした。

「I am the bone of my sword. Steel is my body, and fire is my blood」

一言一言の詠唱のたびに、とてつもない魔力量を消費していく。

「I have created over a thousand blades. Unknown to Death. Nor known to Life. Have withstood pain to create many weapons」

かの英雄が使っていた者と同じ術を使おうとしているのだ。

「Yet, those hands will never hold anything. So as I pray,」 unli

mitted blade works”

その瞬間、世界が変わった。

その景色は、ただの白い世界。

かの英雄が使っていた無限の剣制は、己の心象風景を現す固有結界のはずだ。
アンリミテッドブレイドワークス

つまり、俺は空っぽと言う事だろう。

若干ではあるが地面に黒の模様が描かれているだけしか、変わりはない。

「行くぞ！」

俺は近くの剣を手にして、相手に肉厚する。

そして、俺はひたすらに切り続けた。

剣が壊れれば別の剣を手にして切りつける。
それから後の事は、何一つも覚えていない。

第39話 始まりの戦い（後書き）

いかがでしたでしょうか？

なんともしまりのない終わりですみません。

この後どうなったかは、次回にて。

それでは、これにて失礼します。

第40話 初心者の中の初心者（前書き）

今回は健司Side&短めです。

これで闇の書残滓事件も終結です。

第40話 初心者の中の初心者

「ん……」

気が付くと俺はどこかの部屋に寝かされていた。そこがすぐにアースラであることに気付く。

「目が覚めたか」

「し、執行人！？」

俺に声をかけたのは、執行人だった。その表情はいつにも増して厳しいものだった。

「闇の書の意志は！？」

「落ち着け、順を追って説明する」

起き上がろうとする俺を抑え、執行人は説明を始めた。まず、俺と対峙していた闇の書の意志はいつまでも戻らないのを不審に思った真人が駆けつけた際には、弱ってはいたが動いていたらしい。

そして執行人に倒れている俺を、安全な場所まで避難させるように指示を出したらしい。

そして闇の書の意志に真人が止めを刺したと言う事だ。何だか良いところ取りをされた気分だ。

「お前は今回の敗因を何だと考えている」
「……………」

執行人の問いかけに答えることが出来なかった。

覚悟はできたし、固有結界だってちゃんと展開出来た。問題はないはずだ。

「中身がないくせに固有結界とかを使っただけだからだ」

「……どういう事だよ」

俺は執行人に聞いた。だした。

そんな俺の様子に執行人は呆れた風にため息をつく。

「固有結界の中で、お前の使うタイプの物は心象世界を映し出すもののはずだ。違いはないな？」

執行人の言葉に、俺は無言で頷いた。

「しかし、お前は中身が空っぽだったために心象世界を形成するほどの物がなかった。なのに強引に展開させたから暴走を起こして結界の影響を受けて倒れたんだ」

「一体俺はどうすればいいんだよ」

もう何が何だかが分からなくなってしまった。
もうこれ以上出来る事は、俺にはない。

「お前はようやく中身に具材が入り始めたのだ。鍛錬と実践を欠かさなければ満足に使えるようになるだろう」

「……………理不尽だ」

俺は気が付くとそう呟いていた。

「あいつは俺と同じ素人のはずなのに、俺以上の強さを持っている。こんな不公平だ！」

「何時だつて世の中は不公平で理不尽さ。だがしかし、それを受け入れる者と受け入れない者とは大きな差がある」

俺の嫉妬に近い言葉に、執行人は諭すような口調で答えた。

「さらに言えば、あいつには魔法を始めた当初から”覚悟”があった。だからこそ魔法をどんどん習得することが出来、強くなれたのだ」

「……………」

俺は何も言えなかった。

あいつと俺の”差”。

今まで全く考えたことがなかった。

俺は転生してチートな能力を手にしたことに浮かれてただけ。

だが、真人は何かしらかの大きな選択をしたのだろう。

だからこそ俺達の力には差があるのだろう。

「まあ、そう言うところだ。覚悟がしつかりと定着するまではあまり使わない方がいいな。何度も言うがお前には中身がない。そんな状態で固有結界を使うなど、命取りもいいところだ」

執行人はそう告げると、部屋を後にした。

（俺自身の覚悟、か…………）

俺はそのことだけを頭の中で考えていた。

この後、この事件は闇の書残滓事件と名付けられたらしい。
この事件は俺にとってレベルと、新たな課題を知らしめるものとな
った。

第41話 定まる覚悟（前書き）

今回も少々短めです。

第41話 定まる覚悟

ある休日の一面が砂漠の世界にて。

「はああ!!」

「甘い!!」

俺の前で健司と執行人が模擬戦を行っていた。
なぜこうなったのか。

それは今から数時間ほど遡る。

「魔法を教えてほしい!!」

突然家に訪れた健司の一言がすべての始まりだった。

「ああ、俺は今思えば魔法に対する覚悟がなかったんだ。だから真人にそれを含めたすべてを教えてもらいたい!!」

そう言い切ると、健司は俺の前で土下座をした。

「お、おい。よしてくれよ!!」

「この通りだ!!」

俺の制止も聞かずに、健司は土下座を続ける。

「なるほど。覚悟は決まったようだな」

そんな中口を開いたのは、ベッドに腰掛けて本を読んでいる執行人だった。

「ああ」

「そうか。では、この僕が直接教えるでしょう」

執行人はそう告げるとゆっくりと立ち上がった。

「言うておくが真人はまだまだ半人前だ。教えを乞うのであれば俺の方が最適だ」

「お願いします!!」

執行人の若干のトゲのある言葉に、俺は執行人の事を睨みつけるが執行人はそんな俺を気にせず、片手を地面に向けて掲げた。

「クロツキング・ブレザード」

執行人の呟きと同時に周りの空間から色が抜けた。いわばそれはモノクロと呼ぶらしい。

「何をしたんだ？」

「時間を止める魔法だ。かなり高度な魔法なために、多用は出来ない」

今更だが、本当に何でもアリだよな、魔法って。

そして今に至る。

「よし、今日はここまでだ」

「あ、ありがとう……ございました」

時間にして約2時間にも及ぶ練習と模擬戦は、健司にとってかなりハードな物だったのか、息を切らしていた。

「この程度で息を切らしては、まだまだ先は長いぞ」

「は、はい」

「もしかして、これから毎日続ける気か？」

俺は若干嫌な予感がしたため、執行人に聞いた。

「当たり前だ。一日で良くなるものなどおらん」

「……………」

どうやらこの数日間は、俺は平穏な暮らしが出来ないようだな。なぜなら、いつの日にかは俺と健司との模擬戦があるだろう。

「心配するな。時間は今回のように止める。真人が怒られることはない」

執行人は別の事だと思ったのか、そう笑顔で言ってきた。確かにそれも困った。

この間両親に長時間も起こられたのだから。まあ、毎晩夜遅くに無断で出歩いていれば、それも当然だが。

「さあ、戻ろうか」
「了解」

こうして、健司の特訓は幕を開けたのであった。

第41話 定まる覚悟（後書き）

軽く日常編を書こうと思っていましたが、日常編を2、3話で終わらせてあとは完結させる方向にしたいという構想が出てきます。もう少し日常編が長い方がいいですね？

第42話 模擬戦（前書き）

お待たせしました。
第42話です。

第42話 模擬戦

とある世界にて俺と執行人に健司とで向かい合っていた。

「ルールの説明をするぞ。使う魔法は自由。魔力が無くなるか、相手がリタイアすれば勝ちだ」

「分かった」

「同じく」

執行人の言葉に、俺と健司が頷いた。

なぜこうなったのかと言うと、執行人名物の練習も終わった時の事だ。

『健司、真人と模擬戦をやれ』

と突然言い出したのだ。

こうして俺と健司の模擬戦が決まったのだ。もちろん、俺に拒否権はなかったが。

「それでは、始め!!」

「はああ!!」

俺と健司は一直線に駆け出すと剣を振るった。

「つと!!」

それを健司は干将莫邪で防ぐと押し返してきた。

「そこ!!」

「喰らうか！」

押し返された隙を狙って、俺に向かってくる健司だが俺は横に移動することで回避した。

そしてクリエイトを弓状に変形させると一発射た。

「ちい！」

「ブレイク・インパルス！！」

俺の矢を一発喰らう健司に、俺は攻撃力の高い矢攻撃を放つ。

「喰らうか！！ I am the bone of my sword・偽・螺旋剣（カラド、ボルク）」
「のわあ！？」

健司による一撃に俺は慌てて回避する。

危うく直撃しそうになった。

まあ、多少はかすったが。

「ブレイクイヤー・マルチショット！！」

俺はそれに答えるように矢を10本射た。

それは扇状に放たれる。

「熾天覆う七つの円環」
ロー・アイアス

回避できないと悟ったのか、結界を展開する。
だが……

「ぐあああ！？」

俺のブレイクイヤーにある結界魔法や防御魔法をすべて破壊するスキルのおかげで、健司の結界は破壊され3発喰らうことになった。そして俺はこの隙を無駄にはしていない。

「行くぞ!! 一刀………」

「しま」

「両断!!」

俺は剣状にしたクリエイトを思いっきり健司に振りかざす。

これで倒せただろうか？

答えは否だ。

「I am the bone of my sword・Steel is my body, and fire is my blood」

健司が唱えているのはおそらく、固有結界だ。

本来であればここは防ぐべきなのだが、俺は健司がどのくらい強くなったのかを見たかったのでそのまま見ることにした。

「I have created over a thousand blades・Unknown to Death・Nor known to Life」

だが、ただ見ているだけではない。

俺はある準備をしておくことにした。

「Have withstood pain to create many weapons・Yet, those hands

will never hold anything. So as
I pray, unlimited blade works
”!!”

そして辺りの景色は一変した。

そこはまるで砂漠の中にあるオアシスのような場所だった。

言い方は変だが、前方には砂漠が、後ろの方には森林が広がっていた。

これが健司の創り出した世界。

まるで天国と地獄だ。

ブローケン・ファンタズム

「壊れた幻想!!!」

「ぐう!!!」

突如として健司が弓を射てきたので避けるが、突然発生した暴風に俺は吹き飛ばされそうになった。

「はああ!!!」

「っし!」

健司が干将莫邪を俺の方に投げってくるが、俺はそれをバックステッ
プで回避する。

「ファルス」

「なッ!?!」

俺の一言で空中に無数の魔法弾が出現する。

これが俺の新たに作り出した能力。

その名も格納放出だ。

これは、事前に作り出した魔法弾をクリエイトの中にしまっておき、

一言で一気にそれを放出するものだ。

弱点と言えば、作り出すのに時間が掛かることだが。

「健司、お前は強い。だから俺も本気で行く。ファイアー！」

それを俺は一気に放った。

健司のいた場所が爆煙に包まれる。

だが、俺は油断しない。

剣状のクリエイトを手に、俺は一気に肉厚する。

「一刀……」

「やば」

煙が晴れると、そこにいたのは防御魔法で防いで立っている健司だった。

しかしその姿はすでにフラフラだ。

「両断……！」

そんな健司に俺は容赦なく剣を振り下ろした。

「そこまで……！ この勝負、真人の勝ちだ……！」

こうして、この模擬戦は俺の勝利となった。

だが、健司はどんどん強くなっているという感じが、俺が感じた印象だった。

第43話 お手伝いと……（前書き）

もう43話、A・S編だけでこれだけ行けるとは……自分が恐ろしいです。

第43話 お手伝いと……

ある日、俺は親のお使いで翠屋と言う喫茶店でケーキを買うように言われた。

「いらつしゃいませー、て、真人君!？」

「どうも」

翠屋に入ると、そこにはなのはがいた。

（そう言えば、なのはの両親は喫茶店を経営してるって言ってたっけ）

俺はそれを思い出しながらなのはに挨拶を返した。

「どうしたの？」

「いや、ケーキを買いに来たんだ」

不思議そうな表情を浮かべて聞いてくるなのはに、俺はそのまま答えた。

「あ、それと俺あまりケーキに関して詳しくないから、なのはのおすすめする物を適当に選んでくれるか？」

「う、うん」

なのはは、次々とケーキを選んでいく。

ケーキの名前を見ても、どっという意味なのかがさっぱり分からない。

「そう言えば、お兄さんは？」

「お兄ちゃんなら、今お出かけ中だよ」

俺はなのはの言葉を聞いて、ほっと胸を撫で下ろした。

前に一度なのはの家に来たことがあったが、その時にお兄さんから猛攻撃されたからだ。

「お前か！　なのはにちよっかいを出す輩は！！」などと叫ばれながらだ。

それ以来すっかり苦手になってしまった。

「あれ？　君は真人君じゃない！」

「へ？」

突然声に、俺は思わず身構えた。

出てきたのは、母親に見えないくらいに和解、なのはの母親だった。確か桃子さんだったっけ？

俺の2番目に苦手な人だ。

「ご、ご無沙汰しています」

「そうよ。あ、そうだまたあれ、やってくれないかな？」
「お断りします！！」

俺は必死に拒否した。

これが苦手な理由だ。

桃子さんはよく俺に女装をさせるのだ。

それはもう、俺の中では一生のトラウマものだ。

「そう、残念」

本当に残念そうにつぶやく桃子さんに、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「ところで、二人に頼みたいことがあるのよ」

「頼みたい……」

「事、ですか？」

そう、それはある意味天国と地獄のチケットだった。

「ご、ごめんね真人君。私のお使いに付き合わせちゃって」「いや、気にしないでいいよ」

俺達への頼みごとと言うのは、お使いだった。

それはあくまで、なのはへのお使いであり俺は荷物持ちだった。

桃子さん曰く、「男の子だから女の子をエスコートしなくちゃ」とのこと。

「そう言えば、執行人さんはどうしてるの？」

「ああ、あいつならたぶんどこかで見えないのをいいことに、自由気ままに飛んでいたり驚かせて遊んでいたりするかもな」

しかも執行人ならやっていそうで怖い。

「あ、あはは……」

さすがのなのも苦笑いを浮かべるしかなかった。

「ねえ、真人君は管理局には入らないの？」

「管理局か………今考えてるところなんだよな」

そう、俺は今早すぎる人生の転機を迎えていた。

俺の持つ人ならざる力”魔法”……

これを生かすには、管理局と言う警察のような組織に入らなければならない。

もちろん、管理局には入らずに普通の人として過ごすことも選択肢だ。

これに対して執行人は『全てを決めるのはお前自身だ。僕はただマスターの決めた通りに従っていくだけだ』と答えるだけだった。

要するに、俺自身で決めると言う事だ。

「魔法の力を使っていたのだって、生きるためだし、管理局に入りたいというほどの理由にもならないもんな」

それが、俺が一番頭を抱える理由だった。

きっと執行人が聞いたらくだらなと言われそうだが。

「でも、私は真人君が管理局に入ってくれるとうれしいかな」
「なのは……」

この時、俺はなぜか自分の悩み事がまるで水が流れるように解消していくような気がした。

「あ、もしかしたらフェイトちゃんに相談してみるといいかも。フ
イトちゃんね、管理局のリンディさんとクロノ君と一緒に住ん
でいるから」

「ありがとう」

俺はなのはにお礼を言った。

「……………あの、なのは」

「何かな？ 真人君」

俺は、なのはに自分の想いを打ち明けようとした。

「……………何でもない」

「えゝ！？ 何それ」

俺の言葉に、なのはが不満そうな表情を浮かべる

（ダメダメだな、俺は）

俺は心の中で自分の度胸のなさに呆れてしまった。

だが、自分の気持ちは分かったのだ。

あとはそれを切り出せる日が来るようにするだけだ。
こうして俺のダブルお使いは終わったわけだが……。

「高町恭介、推して参る!!」
「ノオオオオ!!」

翠屋に見事に鉢合わせになったのはお兄さんに、決闘を申し込まれる羽目になってしまった。

まさに天国と地獄だった。

と言うより、桃子さんこれを狙っていたような気が……。

第44話 人生の転機（前書き）

すべてがばれました。

ばれたというよりばらしたのほうが妥当ですが……

第44話 人生の転機

天国と地獄を味わった日から数日後。

「フェイト、この後用事とかある？」

俺は放課後になると、フェイトに声をかけた。

今では、少しではあるが仲良くなって呼び捨てで呼んでいる。
男子達の視線が怖いが……

「え？ ないけど……どうしたの？」

「それじゃ、フェイトの家にお邪魔してもいいか？」

「ええ！？」

俺のお願いに、フェイトが顔を赤くして声を上げた。

「あれ？ もしかしてまずいかな？」

「う、ううん！ まずくなんてないよ。大丈夫だよ！！ それじゃ
行こう、早く行こう！！」

フェイトはなぜか早口で叫ぶと俺の腕を引っ張って教室を後にした。

（俺、地雷踏んだか？）

内心でそう思いながら、俺はフェイトの住む家まで向かった。

「な、何だ……リンディさんに用事があつたんだね」

マンションに到着した俺は、事の次第を目を見開いて驚いている女性と、その横にいるハラオウンさん……本人曰く、クロノに説明した。

「そう、あなたが真人君ね。私はリンディ・ハラオウンよ」

「前にもあっているだろうけど、クロノ・ハラオウンだ」

「山田真人です」

まずは自己紹介をする。

「それで、私にお願いって何かしら？」

「はい、その……管理局に入れさせてください!!」

俺はそう叫ぶと頭を下げた。

「あ、えっと……とりあえず頭を上げて」

困惑したようなリンディさんの声に、俺は頭を上げた。

「ちょっと驚いたわ。私の方からも管理局に入ってくれないかを、聞こうとしていた矢先なんだもの」

「それって、もしかして」

俺の予想にリンディさんは笑顔で頷いてくれた。

「大歓迎よ」

「あ、ありがとうございます!!」

俺はリンディさんの言葉に、思わず大きな声でお礼を言ってしまった。

「ただ、問題があるのよね……」

「え？」

リンディさんが言う問題それは……

「
と言う事です」

「真人が」

「魔法使い!?!」

今いるのは俺の家のリビングだ。

リンディさんの説明に、父さんたちはしわを寄せて驚いていた。そう、問題と言うのは父さんと母さんへの説明だった。

俺はリンディさんをお願いをして、話し合いの場を設けて貰ったのだ。

「何かの勘違いじゃないんですか？ そんな魔法だなんて、小説じゃないんですから証拠を見せなさい、証拠を」

「いいえ。その証拠に……真人君」

信じられないと言った様子で反論する母さんに、俺はリンディさんに言われるがままに片手を上空に向けてかざした。

俺がやるのは、魔法の中でも基礎中の基礎の魔法球の生成だ。意識を集中すると、俺の手の上に銀色の魔力球が生成された。

「これは……」

「……………」

「これでご納得いただけましたか？」

目を見開かせて驚く父さんたちに、リンディさんはそう問いかける。

「で、ですが！ 管理局に入れるなんて反対です！！ そんな訳の分からない所に息子を行かせるわけにはいきません！！ あなたもなんとか言ってください！！」

「……真人、管理局とやらに入ると言うのはお前が本心から望むことなのか？」

父さんの問いかけに、俺は無言で頷いた。

「そうか……………ならば俺は構わない」

「あなた！？」

父さんの意見に、母さんが信じられないと言った様子で叫ぶ。

「これは真人が決めたことだ。人様の迷惑にならないのであれば、それを快く見守るのが親と言うものだ」

「父さん」

俺は、父さんの言葉に、思わず感動してしまった。

「だがしかし！ 真人は小学生だ。彼の本文は勉強であり、それを疎かにしないように配慮するというのが最低の条件だ。中学を卒業した後は好きにするといい」

「分かりました。それでは、今後の事についてご説明します」

そしてリンディさんから今後の経緯について説明された。

まずは俺は訓練校に入れられるらしい。

これに関してはうまく学校の方と両立すると言う事で決まっていた。早ければ3、4か月で卒業し、入局できるとのことだ。入局した際は所属する部隊を決めるらしい。

「それでは、これで失礼します」

全ての説明を終えて、リンディさんは家を去って行った。

「それにしても、真人が最近家を抜け出したりすることが多いと思っただら、そういう事だったのね」

「う、ごめんなさい」

俺は母さんに思わず謝っていた。

「それよりも、誰もいない部屋から時より音がしているのだが……
…それもお前の魔法とやらか？」

「いや、それは多分……」

父さんの言葉を俺は否定した。
魔法と言ふよりは部屋に住まうものの仕業だろう。

「それは僕の原因だな」

「誰だ!!」

突如として姿を現した執行人に、父さん達が敵意むき出しで睨みつける。

「僕の名前は執行人だ。お前らの後ろにいる人物を支援する使い魔のようなものであり、魔法の師匠だ」

「ほ、本当なの？ 真人」

俺は母さんの剣幕に押されながら、頷いて答えた。

「それよりも、出てきて良かったのかよ？」

「お前が魔法について話していた。ならばこの僕が隠れる必要もないだろ。それにこれからは堂々としていられるしな」

彼の場合後者の方がもっともな理由だと思うのは、俺だけであろうか？

ともあれ、こうして執行人も家族の一員として迎えられ魔法の事を認めて貰えたのであった。

但し、執行人が両親に認められるのに一週間ほどはかかったと言っておこう。

第44話 人生の転機（後書き）

次回は、入局のお話になりそうです。
果たして真人が入隊する場所とは？

第45話 所属部隊（前書き）

今回はかなり短いです。

おそらく史上最短だと思います。

第45話 所属部隊

どうも、山本真人です。

かれこれ訓練学校に行ってから半年がたちました。

普通は半分の三か月でいいらしいけど俺の場合は通える時間にも限度があつたので、この長さになってしまいました。

おかげで両方の学校との両立が難しくて仕方ありませんでした。

そんなこんなで、俺は訓練校を卒業することが出来ました。

この後にあるのは所属を決めることです。

一番一般的なのは陸士部隊辺りらしいです。

それ以上に素質のあるものは空戦魔導師や教導隊、他には首都防衛隊や航空隊も視野に入る。

でも、そう言う人のたいていの場合には本局の方に引かれてしまうのが実情らしい。

「真人、今日も届いてるわよ」

「ま、また!？」

それ以前に困ったことが一つあつた。

「またスカウト状か。これで10通目になるんじゃないのか？」

「すごいな真人は。期待の新人だな」

呆れた風に俺の元に届いたスカウト状を見る執行人と、嬉しそうに喜んでいる父さんだった。

そう、卒業してからと言うものの、毎日のように色々な部隊からスカウト状が届く。

ここで、所属部署の決定について書きたいと思う。

訓練校の卒業が決まると、管理局の各部署で卒業予定の人物の詳細

なデータが開示される。

そのデータをもとに、各部隊が引き抜きたい人物の住んでいる場所にスカウト状を送るのだ。

それを見た人物は、所属部署希望用紙に行きたい部署名を書き込んで提出する。

これで所属部署は決定となる。

もちろんその後直接その部署の人と会って、面接の様な事をするらしい。

「ところで、真人はもう行くところは決まってるのか？」

そんな中、執行人が突然聞いてきた。

「まあ、一応は」

「そうか」

俺の答えに執行人はそう呟くと目を閉じて何も言わなかった。

「そう言えば執行人はどこに行くんだ？」

「僕か？ そうだな………考えておこう」

俺の問いかけに執行人はあいまいな答えをした。

実は執行人にもスカウト状が届いているのだ。

「あ、言っておくけど俺と同じ部署にしないで、行きたい部署を選んでよ」

「……………心得た」

少しの間が不安を掻き立てるが、俺は執行人の答えを聞くと、どこに行こうかと考えるのであった。

そして卒業から二か月後。

「失礼します」

「入りましたえ」

俺は管理局の地上本部へとやって来ていた。
それはある部署の面接を受けるためだ。

「山本真人二等空士です」

「わしは、ここの部隊長でもある」

こうして面接が始まった。

名前：山本真人

階級：二等空士

魔導師ランク：SSS-

所属：管理局地上本部 首都防衛隊

名前：井上健司

階級：三等空士

魔導師ランク：S+

所属：管理局 執務官補佐

名前：執行人

階級：二等空士

魔導師ランク：測定不能

所属：管理局 執務官（補佐は健司）

第46話 動き始める物語（前書き）

時系列がかなり飛びます。

第46話 動き始める物語

どうも、山本真人です。

あれから2年たち、俺は二等櫓から空曹長にまで昇進しました。まあ、あれから数多くの任務に就いているからだけど。

【山本空曹長、北3キロ先にターゲットです】
「了解！」

通信から、女性の声で情報が入った。

今日の任務は山奥でロストログアを不正に取引する者が出るとの情報が入ったので、その取引をする人たちの身柄を拘束するというものだ。

『マスター、見つめました』
「おっと」

クリエイトからの言葉に、俺は上空で止まると真下にいるであろう人達に声を上げた。

「そこにいる人たち。あなた達のやっていることは犯罪です。大人しく降伏してください。そうすれば弁護の機会があります。もし抵抗する場合はこちらも対応の対応をいたします」

俺はいつもこのように勧告するようにしているのだ。

一応忠告するのも俺なりの慈悲だと思うからだ。

「誰がするかよッ！！」

「っと！ 降伏の意思なしと確認。実力行使で行動を止めます！」

俺の元に放たれた誘導弾を軽くかわしてそう宣言すると、俺は剣状のクリエイトを弓に変える。

「ブレイクイヤー・マルチショット！」

俺は矢を10発装填すると、それを犯罪者たちに向けて何の戸惑いもなく放った。

「ぎゃあああああ！！！」

下にいた人たちの断末魔がしたけど、非殺傷設定だから大丈夫。

……………たぶん。

「こちら山本。二人の身柄を拘束しました。これより本部に帰還します」

【え、ええ。了解しました。あと、レジアス中將がお呼びですので、ご帰還されましたら至急向かってください】

俺は通信の女性……………オーリス三佐に返事をする、二人を引っ張って地上本部に戻った。

「失礼します。レジアス中将」
「うむ、入りたまえ」

本部に帰還した俺は、言われた通りレジアスさんの元を訪れた。
目の前にいるいかついおじさんが、俺の直属の上司にもあたるレジアス・ゲイズ中将だ。

「さて、今回の任務だがご苦労であった。少々あの二人は刺激が強すぎたようだ」

「すみません。忠告はしてあるので、それに応じなければ徹底的にぶっ潰せが自分のモットーですので」

苦虫を潰した様子で切り出してきたレジアスさんに、俺は素早く頭を下げて言い訳がましいことを口にした。

「いやいや、別に攻めているのではない。君のおかげで検挙率が上がり、再犯率も少しではあるが下降の兆しを見せた。逆にうれしいくらいだ」
「恐縮です」

どうでもいい話だけど、この地上本部の検挙率は前から低かったらしいのだが、俺がここに来てからそれは少しずつ良くなっていき、治安も良くなり始めているらしい。

「私は、レアスキル希少能力持ちは嫌いだ。だが、君のような逸材は嫌いではない。そこでだ、山本空曹長に休暇を与える」
「休暇……ですか？」

俺はレジアスさんの突然の宣告に、驚いた。

「ああ、ここ最近ずっとオンシフトだったからな。たまには体を休めると良い」

「ありがとうございます」

俺は頭を深々と下げてお礼を告げた。

正直な話だが、最近休みが欲しいなと思っていた頃なのだ。

「話は終わりだ。下がちなさい」

「失礼します」

俺は、レジアスさんに一礼すると部屋を後にした。

「山本空曹長〜！」

「ん？ アリス二等陸士、どうしたんだ？」

部屋を出ると大きな声で俺を呼びながら駆け寄ってくる腰まで伸びているほどの長い青髪の少女がいた。

名前はアリス・アルフォード。

俺が管理局に入局した翌年に配属となった少女で、俺の初めての部下だったりする。

俺はアリスと呼んでいる。

「あの、お話ってなんだったんですか？」

「ああ、しばらく休暇だよ」

俺に聞いてくるアリスに、俺はそのまんま答えた。

「休暇ですか。いいですね」

「悪いな、アリスだけ働かせて」

俺が謝るとアリスは「いえいえ、好きでやっていることなので」と言ってくれた。

彼女とはたまにタッグを組んで戦場に出ることがある。

魔法の才能もなく、端から見れば俺の足を引っ張っているようにも見られるが、実際は俺にとっては最高のサポート要因でもあるのだ。さらには俺が多忙でデスクワークが出来ないときは彼女が代わりにやってくれたり、感謝してもしきれないのだ。

「それでもだ。いつもありがとな」

「いえいえ」

俺とアリスが立ち話をしていると視界の隅に見知った人物を見たような気がした。

「あ、悪い、俺急用を思い出したんだ。ちょっと行ってくる！」

「あ、はい。お気をつけて」

俺はその人物の歩いて行った方へと走って行った。

しばらく走ると、すぐにその人物を見つけた。

「なのは！」

「あれ？ 真人君、珍しいねここで会うなんて」

目の前にいた少女……なのはは俺を見ると驚いた様子で近寄ってきた。

「まあな。こういう事もあるさ」

俺はそう答える。

あの日から俺は彼女の俺の気持ちを打ち明けようとしたが、どうにも言えずじまいだった。

（今日こそは）

「あのさ、なのは」

「ん？ 何かな、真人君」

俺は意を決して俺の気持ちをなのはに伝えようとした。

「俺さ、なのはの事が

」

「なのは、そろそろ時間……… って真人！？ 久しぶりだな」

俺の告白を遮って表れたのは、管理局の制服に身を包むヴィータだった。

「…………… ああ、久しぶりだな。ヴィータ。ところで、二人とも任務だったりするのか？」

「ああ、と言っても今日は調査任務だからそんなに大変じゃないんだけどな」

俺の問いかけに答えるヴィータ。

「ついででいいんだけどさ、俺も同行してもいいか？」

「は？ 悪くはねえがよ、大丈夫なのか？」

なんで俺はこの時そう口にしたのか、理由は全く分からない。

でも、そうしなければいけないと、俺の何かが感じ取ったのかもしれない。

「ああ、ちょうど今日から休暇なんだ。ここで会ったのも何かの縁だし、俺も手伝うよ」

「…………… 分かった。それじゃよろしくな」

しばらく考えたのち、ヴィータはそう言って同行を許してくれた。

「あ、なのは」

「何？ 真人君」

俺は、歩き出そうとするなのはを引き留めた。

今想いを告げようとしたが、任務に支障が出るといけないので、や

めることにした。

「この任務が終わったら、話したいことがあるんだけどいい？」

「うん、良いよ。頑張ろうね真人君」

俺はなのはの言葉に頷くと、ヴィータの元に駆けよって行く。
そして、俺達は異世界での調査任務を遂行するのであった。

第46話 動き始める物語（後書き）

何気にフラグを立てている真人です。
次回で、この作品は最終話となります。

最終話　すべてを失った時（前書き）

いよいよ最終話です。

衝撃の結末をどうぞ。

最終話 すべてを失った時

辺りに広がるのは一面の雪景色。

「はぁ……はぁ……」

そこで俺は息を切らせて倒れていた。

俺の周囲は赤く染められていた。

（なんでこうなったんだろうな）

俺は心の中で何度目か知らない問いかけをした。

そう、それはほんの数十分前の事だった。

異世界での任務を無事に終え、俺たちは帰還していた。

「任務も無事に終わったね」

「そうだな」

「二人とも、気を抜くなよ？ 戻るまでが任務なんだから」

俺となのはにヴィータからの喝が飛んできた。
もちろんだが俺たちは気を抜いてはいない。
そんな時だった。

『マスター、前方にアンノウンです！』

「何だと!？」

「あたしも確認した」

クリエイトからの突然の情報に、俺が慌てっているとヴィータは前方を見据えていた。
そこから現れたのは、まるでカマキリのような機械が大量に向かってきていた。

「とにかく早く片付けよう!」

「うん（おう）!!」

俺の一声に二人は元気よく返事をする、アンノウンの撃破を始めた。

それは、非常に順調に進んでいた。

「はあ!!」

剣状のクリエイトを振りかぶりアンノウンを真っ二つにする。

『お見事です。マスター』

「まあ、それほどでもない……って、あれは!!」

俺が見たのは、なのはの背後に迫るアンノウンの姿だった。そいつは鋭い鎌のようなものをなのはに向けて振り上げていた。

「なのは! 避ける!!」

俺は大きな声でなのはに警告を出した。

なのはSide

「デイベインシュータ!」

私は、目の前にいるアンノウンを倒しています。

「はあ……はあ」

今まで無理をしていたためでしょうか、体が重いです。そんな時でした。

「なのは! 避ける!!」

突然真人君の叫び声がしました。私は振り返ります。

「ッ!?!」

そこにはあたしに向かって鎌のような刃を振り上げている、アンノウンの姿でした。
避けようと思っても、体が動きません。

(ここまで、なの?)

私は心の中で諦めた時でした。

「このお!!」
「きゃ!?!」

私は誰かに地面に弾き飛ばされました。

何がかかわからない私は、弾き飛ばした人を見るべく、頭を上げました。

「……………え?」

私はそれしか口から出ませんでした。

「おい! 大丈夫かよ真人!!」

私の視線の先にいるのは、アンノウンに体を貫かれている真人君の姿でした。

S i d e o u t

「このお！」

「きゃ！？」

俺は、避けようとしなないのはを弾き飛ばした。

自分でも信じられない速さで動けたと思う。

そして俺は………

「グフ！？」

アンノウンの鎌のようなものによって胸を貫かれた。

「おい！ 大丈夫かよ真人！！」

「大…丈夫。なの…はを、連れて…… かえって」

俺は痛みをこらえてヴィータにそう指示を出した。

「だ、だけど真人が」

「良いから！！ 早く！！！！」

ためらっているヴィータに、俺は声を荒げた。

「ッ！！ すぐ戻るから待ってるよ！！」

ヴィータは何かをわめいているのはを連れて戻って行った。

「はあ！！」

俺はクリエイトを振りかぶり、胸に突き刺さったままアンノウンを撃破した。

「があ!？」

その時の爆風により、俺は地面に叩き付けられた。

そして、俺はそのまま地面にうつぶせに倒れ今に至るのだ。

(俺、死ぬのか?)

心の中でそう考えていた。

もう体の感覚がない。

寒いのかも、痛いのかもわからなかった。

「せめ……て、なのは……に……好き……だ……って言い……た……かつた……な」

心残りであることを話しながら、俺の意識は完全に闇へと落ちて行
った。

完

後書き

初めましての方は初めまして。

それ以外の方はご無沙汰しております。

まずは、あのような終わらせ方ですみません。

元々はどのような構成にするかは考えておりませんでした。ですが、書いているうちに構成が次から次に浮かんでいくのです。

この作品のコンセプトは次の二点です。

・魔法を知らないものが強靱なる力を手に入れ、強い摩導師になつていく過程を描く。

・転生者＝最強と言うおかしな等式を否定し、転生者そのものを否定する。

前者のほうは飛ばし飛ばしだったので、あまり表現できていませんでしたが、後者の方は自分なりにうまくできたかなと思います。

転生者もただの人間です。

なのにどうして能力をもらって練習もせずに”最強”になるのか。そんな疑問からこのようになったのです。

色々と小説を読んでいるとそう考えてしまうのです。

さて、このようなことは置いときまして、この作品の続編のお話です。

現段階ではStrikers編を考えております。

それでは、このような駄作を読んでもくださりました皆様に、もう一度深い感謝の心でお礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。

これにて、この作品は完結とさせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0485s/>

魔法少女リリカルなのは～目覚めた力～

2011年9月5日22時44分発行